上峰町文化財調査報告書第９集

船石遺跡Ⅳ

昭和63年度佐賀県営農業基盤整備事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1991年３月

上峰町教育委員会

上峰町文化財調査報告書第９集

船石（ふないし）遺跡 Ⅳ

昭和63年度佐賀県営農業基盤整備事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1991年３月

上峰町教育委員会

序

この報告書は、上峰町大字堤地区一帯を対象とした県営農業基盤整備事業に先がけて実施しました昭和63年度の船石遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書であります。

船石遺跡は、これまでの発掘調査で、弥生時代を中心に縄文時代から中世に及ぶ遺構、遺物が検出され、町北部を代表する複合遺跡であります。今回の発掘調査では、弥生時代の集落の北限が確認されたこと。また、縄文時代の住居址から石棒、磨石、石皿が土器とともに検出されたことなど、多大な成果を挙げることができました。

この報告書を学術資料として、また住民の共有の財産としての文化財を大切に保存していくための資料として役立てていただければ幸いです。

なお、今回の調査にあたって、ご指導、ご協力をいただきました文化庁、佐賀県教育委員会、佐賀県農林部をはじめ、地元関係各位に対し深く感謝申し上げます。

平成３年３月

上峰町教育委員会

教育長　松　田　末　治

例　　言

1．本書は、昭和63年度の佐賀県営農業基盤整備事業に伴い、上峰町教育委員会が発掘調査を実施した、佐賀県三養基郡上峰町大字堤字二本杉および二本谷に所在する船石遺跡の発掘調査報告書である。
2．発掘調査は、昭和63年度の佐賀県営農業基盤整備事業の施工により地下の埋蔵文化財に影響が及ぶ部分5,000㎡について、便宜的に８～10の３区に分割し、８区、９区（1,500㎡）を国庫補助事業として、10区（3,500㎡）を佐賀県農林部の委託事業として実施した。
3．現地での発掘調査は、昭和63年６月27日から12月６日まで行った。
4．現場での遺構実測作業は、調査員の指示により、実測作業員が行った。
5．遺構の個別写真及び出土遺物の写真撮影は、調査員が行った。また、一部気球による空中写真撮影は有限会社空中写真企画に委託した。
6．調査後の出土遺物、記録類の整理作業は、上峰町文化財整理事務所にて実施した。
7．本書中の挿図の実測図作成、トレース作業などは、調査員の指示により、製図作業員が行った。
9．本書の執筆・編集は、原田大介が行った。
10．本報告書に係る発掘調査で出土した全ての遺物、及び図面・写真・その他の記録類は、上峰町教育委員会で保管している。

凡　　例

1．船石遺跡の略号は、「FNI」であり、調査区略号は、「FNI-８」、「FNI-９」、「FNI-10」とした。
2．遺構番号は、発掘調査当時のままとした。また、遺構番号に冠した２文字のアルファベットは、遺構の種別を表わす。
SH……竪穴式住居址　SB……掘立柱建物址　SK……土壙　SD……溝跡　SX……性格不明
3．挿図中の方位については、既成の地形図を用いたものは特記のない限り図上方が座標北、現場で作成した遺構図等は磁北を基準としている。
4．表中の数値に付した記号について、（　）は推定値を、※は部分値・残存部値をそれぞれ表わす。
5．土器実測図の縮尺は、原則として１/４であるが、土器拓影など、同一図版内で縮尺が異なるものについては、遺物報告番号の後に続けてその縮尺を特記している。
6．遺物実測図の遺物報告番号は、一連の番号を付した。また、この番号は、遺物写真図版に付した遺物報告番号と一致する。
7．上峰村は、平成元年11月１日に町制を施行した。村・町の表記における煩雑さを考慮し、本書では「上峰町」に統一する。

調査組織（発掘調査当時）

（事務局）

総　括	重松守男	上峰町教育委員会	教育長（～昭和63年９月31日）
	松田末治	〃	教育長（～昭和63年10月１日）
事務主任	浜田小夜子	〃	教育課長
経費執行	八谷勝憲	〃	社会教育係長
	鶴田浩二	〃	社会教育係
	原田大介	〃	社会教育係
調査員	鶴田浩二	上峰町教育委員会	社会教育係
	原田大介	〃	社会教育係
調査指導		佐賀県教育委員会	

発掘作業参加者

秋山ユキエ、石橋テル、石丸ミチエ、大坪静雄、大坪弘子、大坪光代、河口末利、川原　等、川原正美、川原ミヨ、川原ヨシエ、北島八重子、黒石光利、高島英子、田中ミスエ、堤　イシ、堤　一、堤　ユキ、鶴田サヨ子、鶴田久子、鶴田八重子、納富ヌイ子、三好スエ、矢動丸喜三、矢動丸勅代、矢動丸ミツエ、柳　和義、山口ミヨ子、和佐治夫（発掘作業員）

荒木和代、島　美保子、深町佐千子、馬原喜美子、（実測作業員）

整理作業参加者

荒木和代、島　美保子、深町佐千子　馬原喜美子（製図作業員）

目　　次

序

例言・凡例

調査組織・発掘作業参加者・整理作業参加者

Ⅰ．遺跡の位置と環境……1

1．遺跡の位置……1

2．歴史的環境……1

Ⅱ．調査に至る経過……6

1．調査に至る経緯……6

2．調査の経過……7

Ⅲ．遺跡の概要……9

1．遺跡の概要……9

2．調査区の概要……11

Ⅳ．船石遺跡８区の調査

1．遺　構……13

(1)　竪穴式住居址……13

(2)　掘立柱建物址……15

(3)　土　壙……15

(4)　その他の遺構……16

2．遺　物……17

Ⅴ．船石遺跡９・10区の調査

1．遺　構……20

(1)　竪穴式住居址……20

(2)　土　壙……30

2．遺　物……40

Ⅵ．まとめ……64

挿図目次

Fig. 1　船石遺跡の位置及び周辺遺跡（1/50,000）……2
2　船石遺跡周辺地形図及び調査区位置図（1/5,000）……10
3　船石遺跡8区遺構配置図（1/500）……13
4　船石遺跡8区竪穴式住居址・掘立柱建物址実測図SH-801・SH-807・SB-810（1/80）……14
5　船石遺跡8区土壙実測図SK-802～SK-805・SK-808（1/60）……16
6　船石遺跡8区出土遺物実測図(1)（1/4）……18
7　船石遺跡8区出土遺物実測図(2)（1/4）……19
8　船石遺跡9・10区遺構配置図（1/500）……21・22
9　船石遺跡9区竪穴式住居址実測図　SH-914・SH-915・SH-925・SH-926（1/80）…25
10　船石遺跡10区竪穴式住居址実測図(1)　SH-026・SH-031～SH-033（1/80）……26
11　船石遺跡10区竪穴式住居址実測図(2)　SH-042～SH-044A（1/80）……27
12　船石遺跡10区竪穴式住居址実測図(3)　SH-044B・SH-045・SH-053（1/80）……28
13　船石遺跡10区竪穴式住居址実測図(4)　SH-054・SH-055（1/80）……29
14　船石遺跡9区土壙実測図(1)　SK-909～SK-913・SK-916～SK-920・SX-921・SK-922・SK-924（1/60）……33
15　船石遺跡9区土壙実測図(2)　SK-927・SX-928・SK-929～SK-933・SK-936・SK-938～SK-941（1/60）……34
16　船石遺跡10区土壙実測図(1)　SK-001～SK-010（1/60）……35
17　船石遺跡10区土壙実測図(2)　SK-011・SK-012・SK-017・SK-022・SX-027・SK-028～SK-030・SK-034～SK-036（1/60）……36
18　船石遺跡10区土壙実測図(3)　SK-037・SK-038・SK-040・SK-041・SK-047～SK-049・SX-050・SK-052・SK-056・SK-057（1/60）……37
19　船石遺跡10区土壙実測図(4)　SX-059・SX-061・SX-062・SX-064・SX-067・SX-068（1/60）……38
20　船石遺跡10区土壙実測図(5)　SX-069～SX-071・SK-072～SK-075～SX-077・SK-078（1/60）……39
21　船石遺跡9区出土遺物実測図(1)（1/4）……45
22　船石遺跡9区出土遺物実測図(2)（1/4）……46
23　船石遺跡9区出土遺物実測図(3)（1/4）……47
24　船石遺跡9区出土遺物実測図(4)（1/4）……48

25　船石遺跡９区出土遺物実測図(5)・船石遺跡10区出土遺物実測図(1)（１/４）……49
26　船石遺跡10区出土遺物実測図(2)（１/４）……50
27　船石遺跡10区出土遺物実測図(3)（１/４）……51
28　船石遺跡10区出土遺物実測図(4)（１/４）……52
29　船石遺跡10区出土遺物実測図(5)（１/４）……53
30　船石遺跡10区出土遺物実測図(6)（１/４）……54
31　船石遺跡10区出土遺物実測図(7)（１/４）……55
32　船石遺跡10区出土遺物実測図(8)（１/４）……56
33　船石遺跡10区出土遺物実測図(9)（１/４）……57
34　船石遺跡10区出土遺物実測図(10)（１/４）……58
35　船石遺跡10区出土遺物実測図(11)（１/４）……59
36　船石遺跡10区出土遺物実測図(12)（１/４）……60
37　船石遺跡10区出土遺物実測図(13)（１/４）……61
38　船石遺跡10区出土遺物実測図(14)（１/４）……62
39　船石遺跡10区出土遺物実測図(15)（１/４）……63

表　目　次

Tab. 1　船石遺跡周辺遺跡地名表……3
2　船石遺跡８区出土土壙一覧表……16
3　船石遺跡９・10区出土土壙一覧表……30

図版目次

PL. 1　船石遺跡８区全景
2　船石遺跡９・10区全景
3　船石遺跡９・10区竪穴式住居址集中分部
4　遺構(1)　SH-801・SH-807・SB-810
5　遺構(2)　SH-925・SH-926・SH-026
6　遺構(3)　SH-026・SH-031・SH-032
7　遺構(4)　SH-033・SH-042・SH-043
8　遺構(5)　SH-044A・SH-044B・SH-045・SH-054
9　遺構(4)　SK-802～SK-804・SK-808・SK-910・SK-912

10　遺構(5)　SK-913・SK-918・SK-922・SK-001・SK-002・SK-003

11　遺構(6)　SK-004・SK-007・SK-008・SK-010・SK-011・SK-022

12　遺構(7)　SK-028・SK-029・SK-030・SK-034・SK-037・SK-041

13　遺構(8)　SK-056・SK-079・遺物(1)SK-802・SK-803出土

14　遺物(2)　SK-803・SK-807・SK-808・SK-910出土

15　遺物(3)　SK-912・SK-913・SK-922・SD-014・SX-019・SD-023・SK-028出土

16　遺物(4)　SK-029・SH-044・SX-052・SH-053出土

17　遺物(5)　SH-053・SH-054・SH-055・SX-061・SX-062出土

18　遺物(6)　SX-065・SX-066・SK-075・SK-803出土

19　遺物(7)　石鏃・石匙・石棒・磨石・石皿

Ⅰ．遺跡の位置と環境

1．遺跡の位置（Fig. 1）

船石遺跡は、佐賀県三養基郡上峰町大字堤字三本杉、四本杉、一本谷、二本谷の洪積世丘陵上（標高14m～30m付近）に位置している。

船石遺跡が所在する佐賀県三養基郡上峰町は、佐賀県東部の穀倉地帯である佐賀平野のほぼ中央、三養基郡の西端に位置しており、東部は同郡中原町端に位置しており、東部は同郡中原町・北茂安町、南部は三根町、西部は神埼郡東脊振村・三田川町と境を接している。

鳥栖市から佐賀郡大和町に至る佐賀県東部には、北部の脊振山地、その南麓に発達する洪積世丘陵、さらに南部の有明海へと続く沖積平野と変化に富んだ地形が展開している。なかでも山麓から沖積平野へと移行する部分に発達する洪積世丘陵は、山麓部に源を発し有明海へと南流する大小の河川によって開析され数多くの南北に延びる舌状を呈した段丘となっている。

船石遺跡は、町北部の大字堤地区の南東部に所在している。大字堤地区には、中央を南流する切通川の本支流の開析作用で形成された谷底平野を境界として大小の南北に延びる舌状丘陵が発達している。船石遺跡が立地する船石丘陵もそのひとつで、中原町高柳集落の標高35m付近から派生する丘陵であり、現在船石集落が位置する低位段丘上位面(坊所面、標高22～30m）とこれから南に延び、国道34号線沿いの切通集落北側で沖積平野に没する低位段丘下位面（舟石面、標高14～21m）とで構成されている[1)]。東方の中原町上地地区の丘陵とは舟石溜池が設けられている谷底平野によって、また、西方の八藤、二塚山の両丘陵とはそれぞれ切通川の支流である大谷川、切通川本流の開析谷によってそれぞれ分かたれている。

2．歴史的環境（Fig. 2）

上峰町を中心に佐賀県東部の遺跡を概観すると、前述の洪積世段丘が古くから人々の生活の舞台となっており、各段丘上には遺跡の分布が知られ、県内でもとくに弥生時代遺跡を中心に遺跡の密度が高い地域となっている。沖積地を望む丘陵のほとんどが集落あるいは墓域として占有され、縄文時代遺跡と比較すると、量的にも質的にも爆発的に増加、充実する。鋼澤の鋳型を出土した鳥栖市安永田遺跡[2)]、約400基の甕棺墓が検出された中原町姫方遺跡[3)]、12本の鋼矛を埋納した北茂安町検見谷遺跡[4)]、甕棺墓から舶載鏡を出土した東脊振村三津永田遺跡[5)]、近年の工業団地建設に先立つ調査で貴重な遺構・遺物が検出された三田川・神埼・東脊振の２町１村にまたがる吉野ヶ里遺跡[6)]など多くの著名な集落遺跡、墳墓群が知られ、弥生の「クニ」あるいは「ムラ」単位の集団の存在が想定されるに至っている。南北約12㎞、東西約３㎞と南北に細長い町域をもつ本町においても同様で、町の北部から中央部を占める洪積世段丘を中心に遺跡が分布している。

Fig. 1　船石遺跡の位置及び周辺遺跡（1/50,000）

先土器時代の遺跡は、各段丘ごとに層序が異なる本地域においては本格的な調査がなされていないのが現状で、断片的な遺物の採取にとどまっている。町内では、未だ発見例がなく、近傍では、三田川町との境界に位置する二塚山丘陵の三田川町側からナイフ形石器が採取されている[7]。

縄文時代になると中原町香田遺跡[8]や東脊振村戦場ケ谷遺跡[9]などが出現する。町内においてもこれまでは町北部の丘陵部から土器や石器が採取されていたが、農業基盤整備事業に伴う調査の結果、ここに報告する船石遺跡10区をはじめ船石遺跡の各調査区[10]において遺構・遺物がまとまって検出されており、今後の調査例の増加が期待されている。

弥生時代になると、遺跡の数、規模、内容が飛躍的に増加、充実することは先に触れたが、早くから魏志倭人伝の「弥奴国」の所在地を佐賀平野東部、なかでも三養基郡西部の旧三根郡にあてる論考が行われてきたことは周知のことである。旧三根郡に属する上峰町においても、丘陵部のほとんどにこの時期の遺跡が展開している。しかし町南地部の米多地区、坊所地区の丘陵部は、中近世以降集落として発達し早くから宅地化が進み、本格的な調査例に乏しくその内容を詳細に把握できていないのが現状である。これに対し、町北部の堤地区周辺は、近年の大型開発に伴い広範囲の遺跡が調査の対象となっており、当時の社会の様子を知るうえで貴重な資料が得られている。町内の代表的遺跡としては、甕棺墓から細形銅剣や貝釧を出土した切通遺跡[11]、神埼郡東脊振村・三田川町にまたがる佐賀県東部中核工業団地の建設に伴い甕棺墓、土壙墓約300基が調査され舶載鏡、仿製鏡をはじめとする貴重な副葬品を出土した二塚山遺跡[12]・五本谷遺跡[13]、佐賀県住宅供給公社の宅地造成に伴う調査で一集団の集落部分の全容が明らかになった一本谷遺跡[14]、地区運動広場整備に伴う調査で5世紀代の古墳とともに支石墓はじめ多数の甕棺墓が検出された船石遺跡[15]などが知られている。また、この度の県営農業基盤整備事業に伴う調査においても船石南遺跡[16]・船石遺跡[17]・八藤遺跡[18]から住居址や甕棺墓などが検出されている。

古墳時代になると、この地域にも首長墓が出現する。初頭の時期には中尾町姫方原遺跡[19]・五本谷遺跡などで方形周溝墓が営まれ、やがて中期にかけて鳥栖市から大和町にかけての山麓

Tab. 1　船石遺跡周辺遺跡地名表

上峰町		11	一本谷遺跡	21	姫方前方後円墳	31	東尾銅剣出土遺跡	39	三津永田遺跡
1	鎮西山南麓古墳群	12	目達原古墳群	22	姫方原遺跡	三根町		40	下三津前方後円墳
2	屋形原古墳群	13	塔の塚廃寺跡	23	上地遺跡	32	本分貝塚	41	夕ヶ里遺跡
3	谷渡古墳群	14	上米多貝塚	24	ドンドン落遺跡	三田川町		42	西一本杉遺跡
4	堤土塁跡	中原町		25	町南遺跡	33	吉野ヶ里丘陵遺跡群	43	西石動遺跡
5	八藤遺跡	15	山田蔵骨器出土地	26	天神遺跡	34	二本黒木遺跡	44	下石動遺跡
6	五本谷遺跡	16	山田古墳群	27	西寒水遺跡	35	下中杖遺跡	45	松原遺跡
7	二塚山遺跡	17	大塚古墳	北茂安町		東脊振村		46	辛上廃寺跡
8	**船石遺跡**	18	八幡社遺跡	28	宝満谷遺跡	36	山田谷遺跡	47	大塚遺跡
9	船石南遺跡	19	簑原遺跡	29	宝満宮前方後円墳	37	西石動古墳群	48	横田遺跡
10	切通遺跡	20	姫方遺跡	30	大塚古墳	38	西石動銅戈鋳笵出土地		

部や丘陵部に前方後円墳が出現する。鳥栖市剣塚古墳[20]、中原町姫方古墳[21]、上峰町から三田川町にまたがる目達原古墳群[22]、神埼町伊勢塚古墳[23]、佐賀市銚子塚古墳[24]、大和町船塚古墳など佐賀県東部の代表的古墳が築かれる。後期になると、現在長崎自動車道や、県道鳥栖－川久保線が通る山麓部から丘陵部にまたがる一帯に小円墳を中心とした古墳が多数築かれ、それぞれが古墳群を形成している。

後の『肥前風土記』に見える三根郡米多郷に属す当時の上峰町一帯は、『古事記』の記事によれば、応神天皇の曾孫にあたる「都紀女加」なる人物が初代の米多国造として中央より下向した地域に比定され、その中心は、町南部の米多地区から三田川町の目達原一帯にあったと想定されている。町内の主要な古墳としては、米多国造一族の墳墓として、５世紀代後半に形成されたと考えられる前方後円墳７基ほか円墳数基からなる目達原古墳群、同じく５世紀代の古墳で蛇行状鉄剣、鉄矛を出土した船石天神宮境内の船石古墳１～３号墳[25]が知られている。また、後期の群集墳としては、町北部の鎮西山の周辺山麓部を中心に古墳群が存在している。一方、この時期の集落は、三田川町下中杖遺跡[26]、東脊振村下石動遺跡[27]などが知られているが、弥生時代集落の調査例に比べると少なくいまだに実態が明らかになっていないのが現状である。町内の遺跡をみても、当時の政治的中心であったと考えられる町南部の米多地区周辺における本格的調査例がなく、今後の大きな課題といえる。

奈良・平安時代遺跡としては、三田川町下中杖遺跡、東脊振村辛上廃寺跡[28]、霊仙寺跡[29]などが著名であるが、まとまった調査例が少なく実態はあまり解明されていない。当時の遺構として大規模なものは、佐賀平野に敷かれた条理制の遺構が上げられ、早くから地名などから条里の復元が試みられ、現在ではほとんどの条里が復元されている。

町内では堤土塁跡[30]や塔の塚廃寺跡[31]などが奈良時代の遺跡として戦前から注目されている。町北部の堤地区の八藤丘陵と二塚山丘陵の間を遮断する形で築かれた堤土塁跡は、版築工法により築かれた福岡県の水城に似た施設＝「小水城」で、その築造目的が、大宰府の防衛施設であるとする説、潅漑用水確保のための堤防であるとする説など議論がなされてきたが、結論に至っていない。また町南西部を占める目達原丘陵の南端部に位置する塔の塚廃寺跡は、百済系単弁軒丸瓦が発見され、戦前までは基壇、礎石の存在が知られていた奈良時代中期の寺院址で、目達原古墳群を営んだ米多国造一族の流れをくむ三根郡の郡司層が建立したものと推定されている。

中世になると、北部の山麓部の小峰に山城が築かれ、沖積平野部には環濠を伴う平城や集落が出現する。町内の中世城館址としては、北部の鎮西山山城、上峰町中央部の平野を臨む丘陵部に坊所城跡、平野部には米多城跡、前牟田城跡、江迎城跡、一の橋環濠集落、加茂環濠集落などが知られている。

以上、上峰町を中心に佐賀県東部の遺跡を概観したが、まさにこの地域は遺跡の密度、その内容ともに高く、遺跡の宝庫と部にふさわしい地域といえる。

註

1）赤木祥彦「二　地形」『上峰村史』上峰村　1979
2）藤瀬禎博・石橋新次『柚比遺跡群範囲確認調査第３年次概要報告書』鳥栖市文化財調査報告書第30集　鳥栖市教育委員会　1980
3）木下巧・天本洋一『姫方遺跡』佐賀県文化財調査報告書第30集　佐賀県教育委員会　1974
4）七田忠昭『検見谷遺跡』北茂安町文化財調査報告書第２集　北茂安町教育委員会　1986
5）金関丈夫・坪井清足・金関恕「佐賀県三津永田遺跡」『日本農耕文化の生成』日本考古学協会　1961
6）佐賀県教育委員会調査中
7）七田忠志「原始」『上峰村史』上峰村　1979
8）高瀬哲郎・堤安信・久保伸洋「香田遺跡」『香田遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(2)　佐賀県文化財調査報告書第57集　佐賀県教育委員会　1981
9）七田忠志「佐賀県戦場ケ谷遺跡」『史前学雑誌』６－２・４　1934
10）昭和62年度、平成元年度、上峰町教育委員会調査、整理中
11）金関丈夫・金関恕・原口正三「佐賀県切通遺跡」『日本農耕文化の生成』日本考古学協会　1961
12）高島忠平・七田忠昭他「二塚山遺跡」『二塚山』佐賀県文化財調査報告書第46集　佐賀県教育委員会　1979
13）木下巧・七田忠昭「五木谷遺跡」『二塚山』佐賀県文化財調査報告書第46集　佐賀県教育委員会　1979
14）七田忠昭『一本谷遺跡』上峰村文化財調査報告書　上峰村教育委員会　1983
15）七田忠昭『船石遺跡』上峰村文化財調査報告書　上峰村教育委員会　1983
16）昭和60年度、上峰村教育委員会調査、
17）鶴田浩二、原田大介『船石遺跡Ⅱ図録編』上峰村文化財調査報告書第６集　上峰村教育委員会　1988　鶴田浩二、原田大介『船石遺跡Ⅱ本文編』上峰村文化財調査報告書第７集　上峰村教育委員会　1989
18）平成元年度、上峰町教育委員会調査
19）木下巧他『姫方原遺跡』佐賀県文化財調査報告書第33集　佐賀県教育委員会　1976
20）石橋新次『剣塚前方後円墳墳』鳥栖市文化財調査報告書第22集　鳥栖市教育委員会　1984
21）前出(3)
22）松尾禎作『目達原古墳群調査報告　佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告』第９輯　佐賀県教育委員会　1950
23）木下之治「古代国家の形成」『佐賀県史』佐賀県　1968
24）木下之治編『銚子塚』佐賀市教育委員会　1976
25）前出(15)
26）七四忠昭・高山久美子・西田和己『下中杖遺跡』佐賀県文化財調査報告書第54集　佐賀県教育委員会　1980
27）高瀬哲郎他「下石動遺跡」『下石動遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(6)佐賀県文化財調査報告書第86集　佐賀県教育委員会　1987
28）松尾禎作「東脊振村辛上廃寺跡の調査」『佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告』第５輯　佐賀県　1936
29）田平徳栄他『雲仙寺跡』東脊振村文化財調査報告書第４集　東脊振村教育委員会　1980
30）高島忠平・柾一義『堤土墨跡』上峰村文化財調査報告書　上峰村教育委員会　1978
31）松尾禎作「塔の塚廃寺址」『佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告』第７輯　佐賀県　1940

Ⅱ．調査に至る経過

1．調査に至る経緯

上峰町は、昭和30年代までは純農村として、近世以来の水田耕作を主とした農業経営が連綿として行われてきた。しかし、戦後の激変する社会・産業の構造は、労働力の都市部への流出などを招き、旧来の農業経営による農家経済を圧迫する事態となった。この農家経済の行き詰まり打開のためには、近代的な大型圃場と農地の集団化を併せ行い、高度の農業生産技術と大型機械の一貫作業体系の導入により、労働生産性の向上と農業経営の合理化による農家所得の増大を図る必要があった。佐賀県では、昭和38年度より県営農業基盤整備事業の計画が策定され、昭和41年度より事業が開始された。上峰町においても、昭和42年度にモデル事業として町南部の碇地区を対象に事業が実施され、昭和46年度以後国道34号線以南の町南部の圃場を対象に事業が実施された。

一方、国道34号線以北の大字堤地区の耕地は、洪積世丘陵と切通川本支流の開析谷底平野からなっており、地区の１戸当たりの平均耕地面積は約0.6haと県平均を下回り、用水には河川、溜池があてられていたが、いずれも用水確保が不十分であり、慢性的な用水不足を来していた。また、圃場は不整形で散在し、道路は狭く未整備で機械導入も困難で圃場条件は極めて悪かった。このため、昭和58年度より、堤地区を対象とした上峰北部農業基盤整備事業の実施に向けた調査計画が開始され、昭和60年度より事業が実施されるに至った。

しかし、地形的制約の上に成り立ってきた従来の耕地の集団化、道路・用排水路の整備を目的とした農業基盤整備事業の実施は、一方では土地の大規模な改変を必要とし、ひいては地下の埋蔵文化財に工事の影響を及ぼすことが予想され、今日的要求と埋蔵文化財の保護との調整という問題が文化財保護行政の大きな課題となった。そこで、佐賀県においては、農業基盤整備事業とこれに伴う埋蔵文化財の保護との調整について、県農林部と県教育委員会との間で「農業基盤整備事業に係る埋蔵文化財の保護に関する確認事項」（昭和53年４月締結、昭和59年４月一部改正。）という覚書を交わし、現在この確認事項に基づき、県農林部、県教育委員会、市町村土地改良担当課、市町村教育委員会の関係機関四者により協議が行われ、調整が行われている。

上峰北部農業基盤整備事業に係る埋蔵文化財の保護に関する協議調整は、昭和59年９月に、県事業担当部局から県教育委員会に昭和60年度農業基盤整備事業施工計画が提出され、ＪＲ長崎本線以南の埋蔵文化財の取扱について協議されたことに始まる。

今回の船石遺跡の調査区を含む船石地区一帯の埋蔵文化財の取扱についての四者協議会は、昭和60年10月15日に行われた昭和61年度農業基盤整備事業に伴う第１回の協議会が最初であった。この席上では、昭和61年度事業に伴うＪＲ長崎本線以南の船石遺跡（２～５区として昭和

61年度調査）について協議を行う一方で、次年度以降の農業基盤整備事業に先立つ船石地区一帯の埋蔵文化財確認調査について協議が行われた。その結果、昭和57年に町教育委員会が主体となって調査を実施し、支石墓、甕棺墓のほか５世紀代の古墳３基が検出され、古墳からは蛇行状鉄剣ならびに蛇行状鉄矛など貴重な遺物が出土し、県史跡に指定された船石遺跡周辺のＪＲ長崎本線以北の水田面約40haについて確認調査を実施することになった。

確認調査は、稲刈り終了をまって実施され、２ｍ×２ｍの試掘溝268カ所による調査で、県史跡が位置する低位段丘上位面の周辺の低位段丘下位面に弥生時代を中心とする遺構遺物が検出された。この調査によって、船石遺跡の範囲がほぼ把握され、全体では約100,000㎡以上に及ぶことが判明した。

以後、船石遺跡については、昭和61年度から農業基盤整備事業に伴い工事の影響が地下の埋蔵文化財に及ぶ地区を対象に本調査を実施してきた。

昭和62年10月、「昭和63年度農業基盤整備事業に係る文化財の保護に関する第１回協議会」が開催され、昭和63年度農業基盤整備事業として、ＪＲ長崎本線以北の船石集落西側区域及び船石集落東方の中原町との境界付近の田面を対象とした事業計画が提示された。当該区域内では、現在船石集落が立地する低位段丘上位面の西側に連続する低位段丘下位面及び集落南東方の舟石川東岸の中原町上地から延びる低位段丘下位面に遺跡の広がりが確認されていたため、埋蔵文化財の取扱いについて、事業の設計変更による調査面積の縮小など文化財の保護に関する調整を進めていった。その結果、船石地区内で、水田基盤造成工事、水路掘削工事などで地下の埋蔵文化財に影響が及ぶ範囲5,000㎡について事前の記録保存を目的とした埋蔵文化財発掘調査を実施することになった。

２．調査の経過

昭和63年度の佐賀県農業基盤整備事業に伴う船石遺跡８～10区の発掘調査は、圃場基盤造成工事及び水路設置工事により削平が予定される部分5,000㎡について、船石集落南東の舟石川東岸の区域を８区、船石集落西側の低位段丘下位面の区域を９・10区として実施した。調査は、昭和63年６月27日に着手し、同年12月６日まで現地での作業を行った、以下、簡略に調査経過を記す。

船石遺跡８区の調査経過

８区の調査は、６月27日から８月10日まで、現地での作業を行った。

６月27日　圃場基盤造成工事で面的に削平が予定されている部分について、調査区名を船石遺跡８区として、重機による表土剥ぎに着手。28日終了。その後調査の基準杭を設定。

7月4日　作業員を招集し、簡単な作業の安全祈願の後、発掘器材類の搬入、休憩用テントを設営。午後、調査区北東部分から、発掘作業員による遺構検出作業に着手。

7月5日　検出した遺構の掘り下げに着手。以後、検出した遺構から逐次掘り下げを行った。掘り下げ作業が完了した分部から遺構実測作業も開始。以後、必要に応じて写真撮影を行い、調査範囲を調査区南西方面に拡大していった。

7月中旬　天候不良のため、調査停滞。

8月2日　遺構掘り下げ作業終了。空中写真撮影のため、調査区全体の清掃作業を開始。

8月6日　空中写真撮影。以後、9日まで遺構のレベリングなど実測作業を行い、10日に器材類を撤収し現地での作業を終了した。

船石遺跡9・10区の調査経過

9・10区の調査は、6月30日から8月10日まで、現地での作業を行った。

6月30日　圃場基盤造成工事で面的に削平が予定されている部分について、調査区名を船石遺跡9・10区として、10区北側より重機による表土剥ぎに着手。10区の表土剥ぎは、調査区南部の一部を残し7月11日に終了。

7月7日　作業員を招集し、発掘器材類の搬入後、10区北部から、発掘作業員による遺構検出作業に着手。

7月19日　調査の基準杭を設定。遺構検出作業を引き続き行うが、降雨のため進捗せず。

8月12日　調査お盆休み。～16日。

8月24日　調査区の北側からこれまでに検出された遺構の掘り下げ作業を開始。以後、掘り下げが終了した遺構から、写真撮影、実測をあわせて行い調査を進めていった。重機による表土剥ぎ再開。10区の残り部分と、引き続き9区の表土剥ぎを実施。9月14日まで。9月12日から9区の基準杭の設定。

9月13日　10区の作業を進める一方で、9区の遺構検出作業に着手、22日から遺構掘り下げ開始。以後9・10区の調査を並行して行い、11月22日に遺構の掘り下げをほぼ終了した。

12月3日　空中写真撮影。以後、6日まで遺構のレベリングなど実測作業を行い、同日、器材類を撤収し現地での作業を終了した。

その後、出土遺物、実測図などの記録類を町文化財事務所に移し、遺物の水洗い、図面、写真などの記録類の整理作業を実施した。

Ⅲ. 遺跡の概要

1．遺跡の概要（Fig. 2）

船石遺跡は、佐賀県三養基郡上峰町大字堤字三本杉、四本杉、一本谷、二本谷の標高14m～30mの洪積世段丘上に位置している。遺跡は、これまでの調査で縄文時代から中世に及ぶ各時代の遺構、遺物が検出されており、中でも弥生時代の所産になるものが圧倒的に多く、弥生時代の集落及び墳墓がその主体の複合遺跡である。遺跡の範囲は、農業基盤整備事業に伴い過去に実施された確認調査によって、現在船石集落が立地する低位段丘上位面とこれから南に延び切通集落の北部で中世期平野に没する低位段丘下位面にまたがり、100,000㎡以上の範囲に及ぶことが明らかになっている。この段丘は、東を切通川の支流の舟石川に、西を切通川本流及び同支流の大谷川に開析され南北に細長い舌状を呈している。

地元では、以前から土器片や石器などが耕作に伴い採取されたり、集落の竹藪の開墾の際には甕棺墓が開口したりするなどの話が伝えられていた。また、低位段丘上位面の先端（標高20m～25m付近）付近に位置する船石天神宮境内には、古墳の存在とともに「舟石」・「亀石」・「鼻血石」と呼ばれる巨石群の存在が知られ、昭和20年代より研究者のあいだでは支石墓ではないかと疑問視されてきた。この舟石遺跡が、本格的に調査されるのは昭和57年のことで、その後の上峰北部農業基盤整備事業に伴う調査としては、今回の船石遺跡６、７区の調査が、２年次目に当たる。以下、過去２回の調査概要を年度ごとに記す。

(1) 昭和57年度　船石地区運動広場整備に伴う調査[1)]

調査地区・調査面積・調査区域名：字四本杉の低位段丘上位面（標高21m～25m）に所在する船石天神宮境内の調査、1,660㎡、北区・南区[2)]

遺構：弥生時代の竪穴式住居址９軒、支石墓２基（「舟石」・「亀石」）、甕棺墓ほか墳墓100基以上、５世紀中葉から５世紀末の古墳３基（内１基の天井石が「鼻血石」）、中世の祭祀遺構、その他時期・性格不明の基壇状遺横が検出された。

遺物：住居址出土の弥生式土器・石器・鉄器、甕棺墓に使用された弥生式土器、古墳出土の土師器・須恵器・鉄器、中世祭祀遺構出土の中世土器などで、なかでも古墳出土の蛇行状鉄剣・蛇行状鉄矛は被葬者の性格を裏付けるものとして注目されている[3)]。

(2) 昭和61年度　佐賀県営上峰北部農業基盤整備事業に伴う調査[4)]

調査地区・調査面積・調査区域名：字一本谷の低位段丘下位面（標高15m付近）の水田面の調査、6,500㎡、２区～５区

遺構：弥生時代から古墳時代にかけての竪穴式住居址108軒、土壙多数、掘立柱建物址３棟、

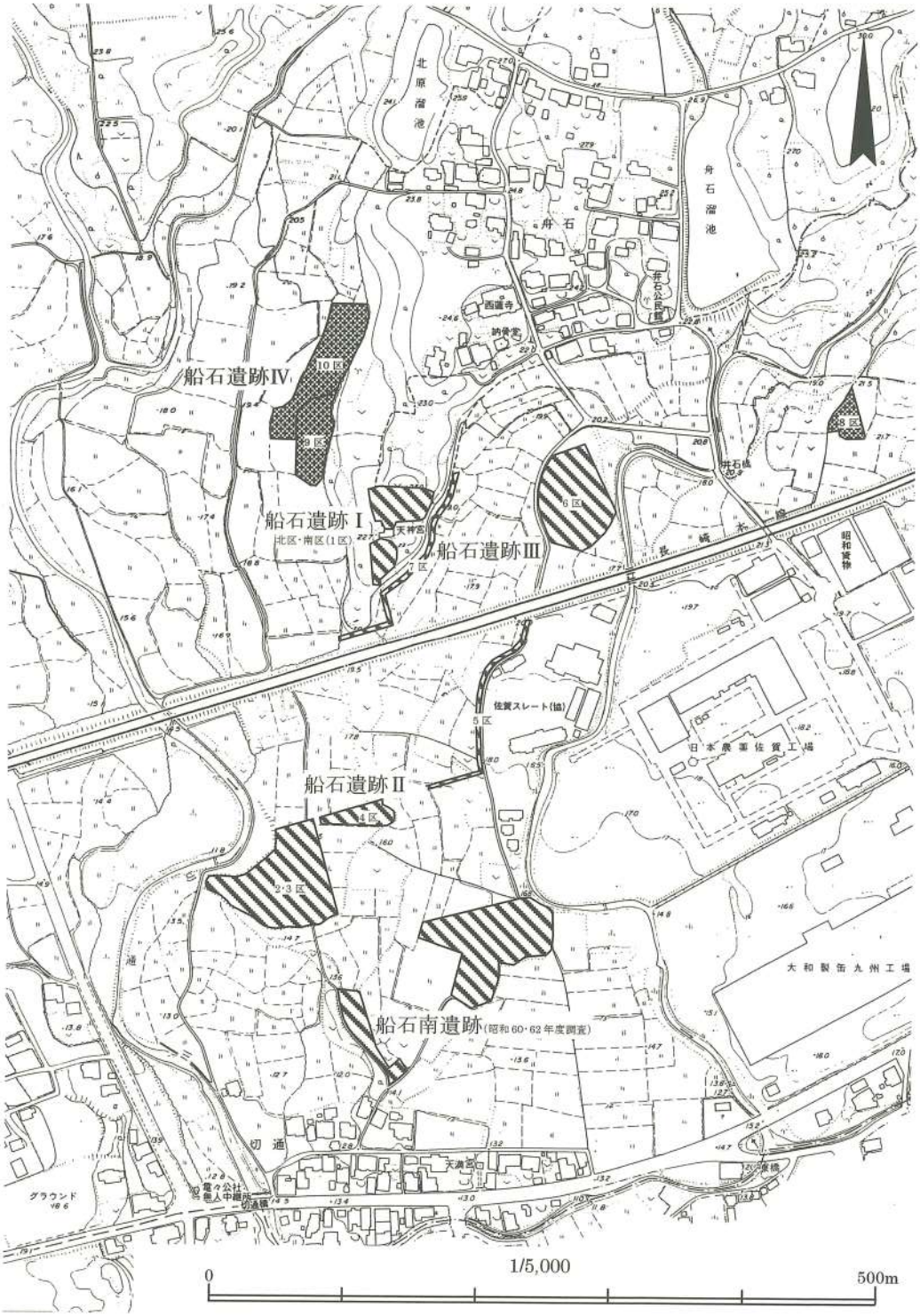


Fig. 2　船石遺跡周辺地形図及び調査区位置図（1/5,000）

甕棺墓８基、溝１条が検出された。

遺物：弥生時代住居址出土の弥生式土器・石器・鉄器、甕棺墓に使用された弥生式土器、古墳時代住居址出土の土師器・須恵器・鉄器など

(3) 昭和62年度　佐賀県営上峰北部農業基盤整備事業に伴う調査[5]

調査地区・調査面積・調査区域名：字四本杉の低位段丘下位面（標高19m付近）の水田面の調査、4,200㎡、６・７区

遺構：縄文時代の土壙１基、弥生時代の竪穴式住居址11軒、土壙、奈良時代以降の掘立柱建物址２棟、土壙、溝３条が検出された。

遺物：縄文式土器・石斧、弥生時代住居址出土の弥生式土器・石器、奈良時代後半の土師器・須恵器、その他舶載青磁片など。とくに奈良時代後半の土壙から出土した「肥人」のヘラ描き文字をもつ須恵器坏や円面硯片などは、当時この地を識字階級者が占有していたことを示唆するものとして注目される。

次に、本遺跡周辺の遺跡を概観すると、かなりの密度で弥生時代の遺跡が分布している。昭和61年度調査の船石遺跡２～３区の東南に隣接する船石南遺跡では、昭和60年度・62年度の農業基盤整備事業に伴う調査で竪穴式住居址40軒余、甕棺墓をはじめ土壙墓・石棺墓など約700基が検出されている[6]。さらに東方の船石工業団地内においても甕棺墓などの墳墓が確認されており、一帯に一大墓域を形成している。これらの墳墓群を営んだ集団は、集落を主体とした船石遺跡の集団を想定することが妥当であり、船石遺跡群として有機的関連を持つものと考えられる。

また、切通川西岸の二塚山丘陵上には昭和30年に調査された切通遺跡[7]、佐賀県東部中核工業団地造成にともない調査が行われた二塚山、五本谷などの二塚山遺跡群の墓域が展開しており[8]、これらの墳墓からは副葬品として漢式鏡・小型仿製鏡・鉄剣・鉄刀・玉類が多数出土している。これは副葬品がほとんど見えない船石遺跡群の墳墓群と好対照をなしている。

以上のように、本遺跡は、切通川西岸の二塚山丘陵に展開する二塚山遺跡群・切通遺跡などとともに町北部の代表的な遺跡である。

２．調査区域の概要（Fig. 2）

昭和63年度県営農業基盤整備事業施工地区の内、今回の調査の対象となった区域は、船石遺跡８区が上峰町大字堤字二本杉の標高21m付近の低位段丘下位面に、船石遺跡９・10区が二本谷・四本杉の標高21m付近の低位段丘下位面にそれぞれ位置し、両地区ともに現在は水田として利用されている。

船石遺跡８区は、現船石集落の南東、中原町上地付近から船石工業団地付近を経て国道34号線の南へ延びる丘陵上標高21m付近に位置し、船石遺跡が立地する船石丘陵とは舟石川により分けられている。この様なことから、遺跡としては、本来、船石遺跡とは区別すべきであろうが、今回は船石遺跡として調査を行った。

調査は、８区および９・10区の合計5,000㎡について、両地区を一部並行して実施した。８区では、磁北を基準として東西列Ａ～Ｆの６列、南北列０～９の10列の５ｍ×５ｍのグリッドを設定し、また、９・10区では、磁北を基準として東西列Ａ～Ｉの９列、南北列０～14の15列の10m×10mのグリッドを設定しこれを基準に実施した。調査区域の土層は、後世の水田耕作などのため、８区の南部、10区北側一部を除き、自然堆積層が失われ、耕作土などの直下は洪積世段丘を構成するいわゆる地山であり、この面が遺構検出面となっている。

遺構は、８区では、弥生時代の竪穴式住居址２軒、奈良時代以降の掘立柱建物址１棟、土壙５基、溝跡１条、柵列と考えられるピット列１列その他ピットなどであった。

また、９・10区では、弥生時代の竪穴式住居址が調査区南部に集中して検出され、縄文時代の土壙などが検出された。９区では縄文時代から弥生時代の土壙26基、弥生時代の竪穴式住居址６軒、10区では縄文時代から弥生時代に及ぶ竪穴式住居址12軒、土壙52基などが検出された。これら８～10区の各遺構から縄文式土器、弥生式土器、土師器、須恵器、石器などが出土している。

註

1）七田忠昭『船石遺跡』上峰村文化財調査報告書　上峰村教育委員会　1983
2）農業基盤整備事業に係る船石遺跡の調査にあたって、この「北区」・「南区」を「船石遺跡１区」と仮称した。
3）調査区域は「船石遺跡」として、また古墳出土遺物も「船石遺跡１・２・３号墳出土遺物」としてそれぞれ昭和59年３月21日に佐賀県史跡および重要文化財の指定を受けている。
4）鶴田浩二・原田大介『船石遺跡Ⅱ　図録編』上峰村文化財調査報告書第６集　上峰村教育委員会　1988
　鶴田浩二・原田大介『船石遺跡Ⅱ　本文編』上峰村文化財調査報告書第７集　上峰村教育委員会　1989
5）原田大介『船石遺跡Ⅲ』上峰町文化財調査報告書第８集　上峰町教育委員会　1990
6）原田大介「３．船石南遺跡」『佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書７』佐賀県文化財調査報告書第94集　佐賀県教育委員会　1989
7）金関丈夫・金関恕・原口正三「佐賀県切通遺跡」『日本農耕文化の生成』日本考古学協会　1961
8）高島忠平・七田忠昭他『二塚山』佐賀県文化財調査報告書第46集　佐賀県教育委員会　1979

Ⅳ．船石遺跡８区の調査

１．遺　構（Fig. 3 ～ 5 ・PL. 1 、4 、9 ・Tab. 1 ）

今回８区の調査において検出された遺構は、弥生時代の竪穴式住居址２軒、奈良時代以降の掘立柱建物址１棟、土壙など５基、溝跡１条、柵列１列ほかピットなどであった。

(1) 竪穴式住居址（Fig. 4 ・PL. 1 、4 ）

今回の調査で竪穴式住居址として取り扱った遺構は、２軒であった。いずれも弥生時代中期の隅丸方形を基調とする竪穴式住居址で、調査区域の北端及び南端部分で１軒ずつ検出されており、船石丘陵上の船石遺跡本体の集落部分と比較すると、分布密度はきわめて低い。出土遺物などから中期の所産であることが確認された。

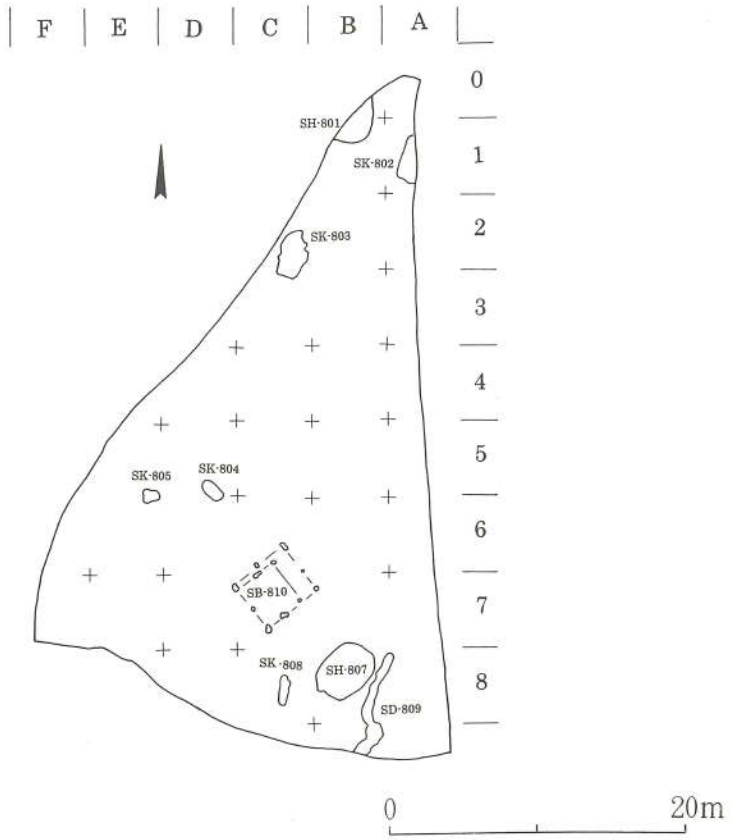


Fig. 3　船石遺跡８区遺構配置図（１/500）

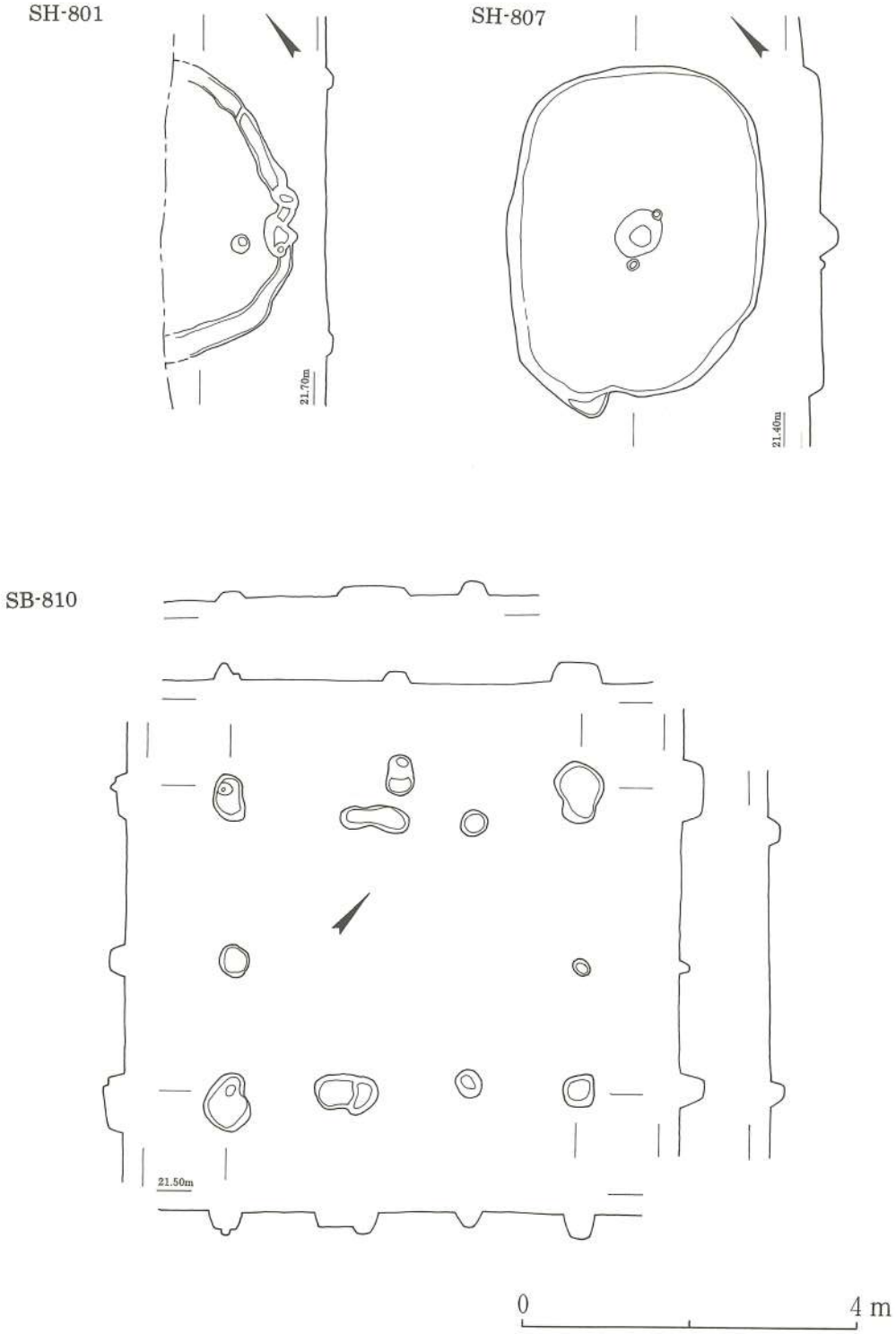


Fig. 4　船石遺跡 8 区竪穴式住居址・掘立柱建物址実測図　SH-801・SH-807・SB-810（1/80）

SH-801（Fig. 4 ・PL. 4 ）

SH-801は、調査区北端のB-0 、 1 Gr.付近で検出された平面プランが隅丸長方形と推定される竪穴式住居址の一部で、検出された部分で東西長2. 5m以上、南北長3. 4m。後世の削平によって、住居の壁際に沿ってめぐる幅30cm、深さ5 cm程の周溝のみが検出された。主柱穴などは不明。床面積は検出部分で3. 1㎡。主軸は、住居南辺の周溝を基準とするとN-70°-W。

SH-807（Fig. 4 ・PL. 4 ）

SH-807は、調査区南端部のB-8 Gr.付近で検出されたやや不整な隅丸長方形の竪穴式住居址。床面中央に炉状土壙をもつ。主柱穴は不明。規模は、長辺3. 7m、短辺2. 8m、床面積は9. 2㎡。掘り方底面までの掘り込みの深さは平均で15cm程度。主軸は、長辺方向を基準にするとN-45°-E。

(2) 掘立柱建物址（Fig. 4 ・PL. 4 ）

今回の調査で検出された掘立柱建物址と考えられる遺構は、SB-810の1棟であった。柱穴からの出土遺物もなく、時期は限定できないがその形態、または遺構の配置などから奈良時代以降の建物と推測される。

SB-810（Fig. 4 ・PL. 4 ）

SB-810はC-6 、 7 Gr.で検出された平面形態2間×2間の建物で、柱穴は、直径30cm～60cm、深さ10cm～30cmほどで不整な円形の掘り方。建物北西辺の桁行には3本の柱穴が並ぶが、南東辺の桁行には4本の柱穴が並ぶ。この中央の二本の柱穴が入口かとも考えられる。桁行の柱間は2. 1m、梁行の柱間は1. 9m。規模は、桁行4. 2m、梁行3. 6m、床面積15. 1㎡。主軸はN-47°-E。また、この建物には南角の柱穴を共有したかたちで、3. 2m×2. 8mと一回り規模が小さい1間×1間の建物も想定され、建て替えが行われた可能性も否定できない。

(3) 土壙（Fig. 3 、5 ・PL. 9 ・Tab. 1 ）

今回の8区の調査で土壙として扱った遺構は5基であった。これらの中でSK-802は竪穴式住居址とも考えられたが全体が把握できなかったために土壙とした。これらの各土壙の時期についてみると、出土遺物などから時期が特定できるものは、土師器・須恵器を出土したSK-803が奈良時代後半、SK-802、SK-804、SK-808の3基が弥生時代中期の所産である。SK-805は出土遺物がなく時期は不明。

以下、各土壙の形態・法量などを一覧表にまとめ報告する。

Tab. 2　船石遺跡８区出土土壙一覧表

遺構番号	平面形態	規模(上段:上面、下段:底面、単位m・㎡)				柱穴状のピットなど	出土遺物	備考
		長さ・長径	幅・短径	深さ	底面積			
SK-802	隅丸方形	3.14 3.06	※1.1 ※1.0	0.04	※1.7		弥生式土器甕、壺、鉢、碗	
SK-803	不整形	3.24 3.16	1.99 1.96	0.16	4.2		須恵器坏、蓋、土師器甕、石製紡錘車	
SK-804	不整形	1.89 1.82	1.07 0.97	0.68	1.5		弥生式土器高坏	
SK-805	不整形	1.33 0.70	0.82 0.65	0.66	0.5			
SK-808	不整形	2.08 1.97	0.70 0.61	0.10	1.0		弥生式土器甕、高坏	

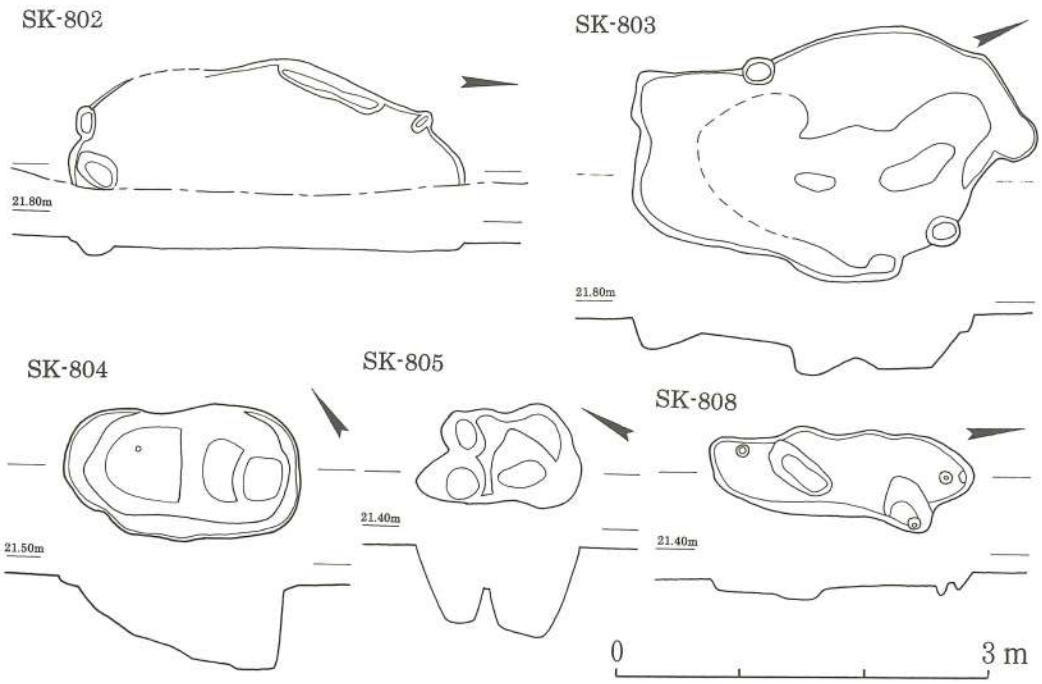


Fig. 5　船石遺跡８区土壙実測図　SK-802～SK-805・SK-808（1/60）

(4) その他の遺構（Fig. 3・PL. 1）

ここまでに報告した遺構のほかにも、今回の調査では、柵列と考えられるピット列が１列、溝跡が１条検出された。

また、調査区南部のA～D列の７、８Gr.付近には、黒色土の自然堆積層が堆積していたが、遺物はほとんどなく、これを除去したところ、この区域から地山が南に向かって傾斜していることが判明し、SH-807やSD-809などがこの黒色土の下層から検出された。

柵列（PL. 1）

A-4 Gr.からB-7 Gr.にかけてピット群が北北東から南南西に向け、2.5m程の幅をもってほぼ直線状に検出されており、柵列が数次にわたって配置されたものと思われる。

SD-809（PL. 1）

SD-809は調査区南端で検出された溝跡。幅は0.6m～1.0m、深さは北部で約20cm、南部で10cm、北から南へ小さく蛇行しながら延びる。延長7mが検出された。まとまった遺物をもたず時期は不明である。

2．遺　物（Fig. 6、7・PL.13、14）

船石遺跡8区の調査では、これまで述べてきた各遺構から、弥生式土器、土師器、須恵器などが出土し、これらに伴い少量ではあるが石器なども出土している。ここでは代表的なものを遺構ごとに報告する。

SK-802出土土器（Fig. 6・PL.13）

1～10は、いずれも弥生式土器。1、2、4は鉢。1は平底で半球形の体部に直接やや内径する短い口縁がつく。内外面ともにナデ。2、4は逆「L」字形口縁の鉢。2は内面にハケ目を残し、外面ナデ。4は内面ナデ、外面ハケ目。3、5は壺。3は広口壺やや上底気味の平底で、胴部上位がすぼまり外反しながらほぼ水平に開く短い口縁がつく。外面底部周辺にハケ目、他の部位はナデ。6～10は甕。6～9は逆「L」字形口縁をもつ。遺存部はともに内外面ナデ。

11は土師器の甕。胴部上位がすぼまり口縁は外反しながら開く。胴部内面へラケズリ。

SK-803出土土器（Fig. 6・PL.13、14）

12、14は土師器の甕。12は長胴の甕。内外面ともにナデ。14は短い口縁が「く」の字形に開くもの。内面へラケズリ、外面ハケ目。

13、16は須恵器の坏と坏蓋。13は高台坏で体部は腰が張り直線的に外傾しながら開く口縁をもつ。底面外周よりやや内側に直立する短い高台がめぐる。16は体部は浅く平坦な天井部をもつ。扁平なつまみをもち、口縁部は玉縁状を呈す。

15は砂岩製の紡錘車。低い円錐台形を呈し、中央に径5㎜ほどの穴が上下に貫通している。全体の1/2弱が遺存し、推定径は上面で3.6cm、下面で4.8cm、厚さ2.1cm、遺存部の重量は29.5g。

SK-804出土土器（Fig. 7）

17は、弥生式土器の高坏の坏部。体部に張りがなく、口縁は外傾し開く口縁端部が外の小さくつままれている。内外面ともにナデ。

SH-807出土土器（Fig.7・PL.14）

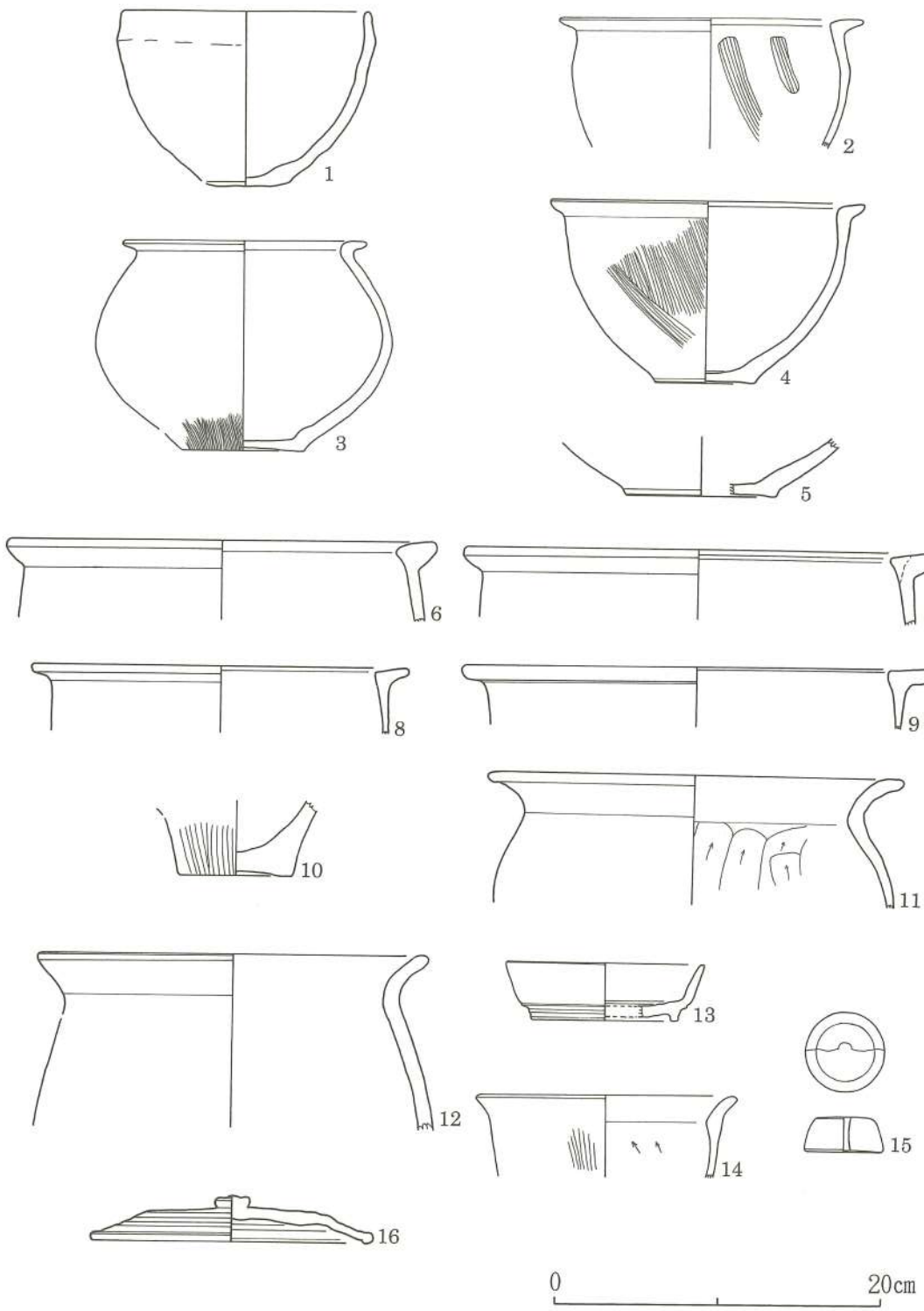


Fig. 6　船石遺跡 8 区出土遺物実測図(1)（1／4）

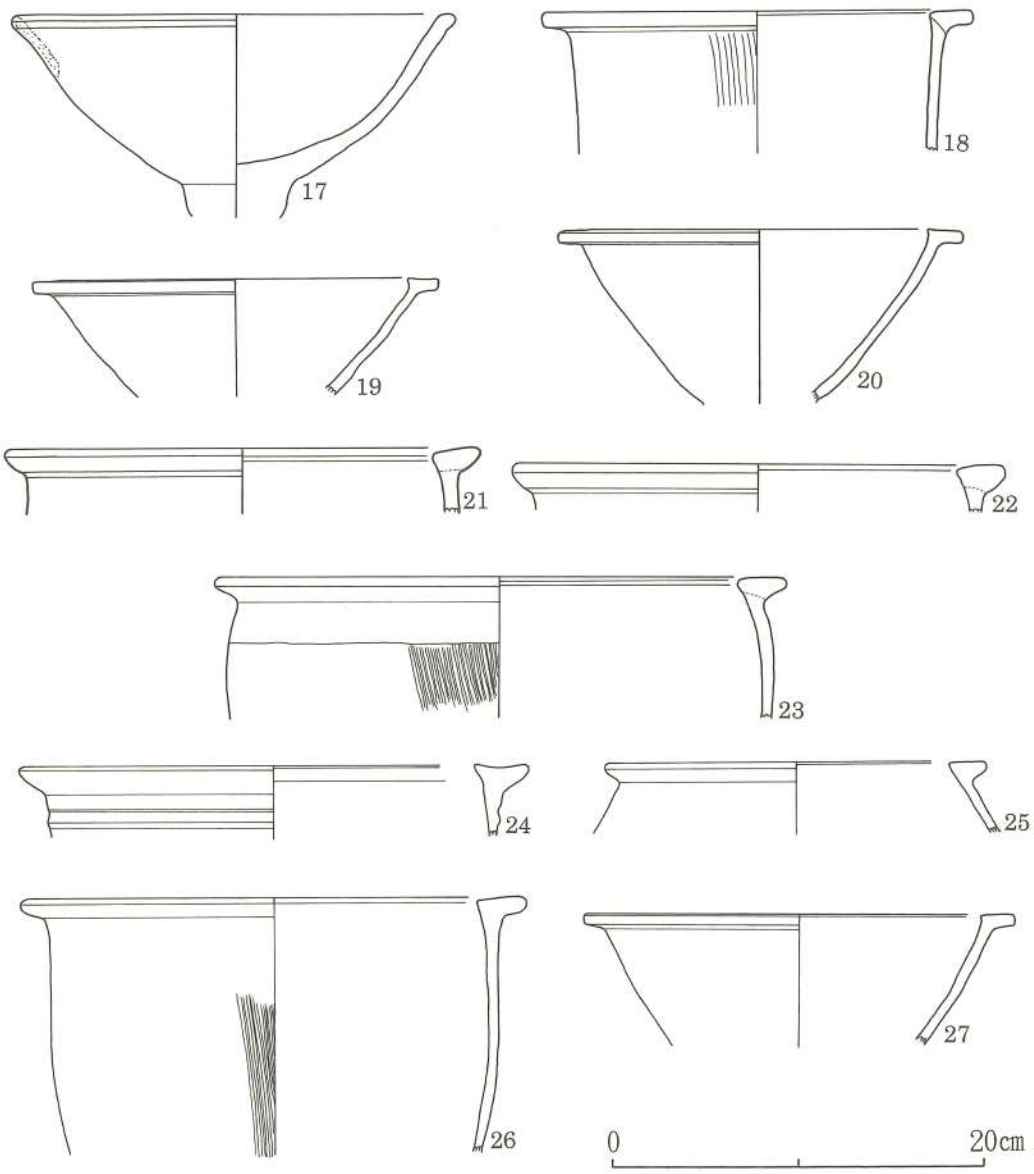


Fig. 7　船石遺跡８区出土遺物実測図(2)（１/４）

18～23は、いずれも弥生式土器。18、21～23は逆「L」字形口縁の甕。18、23は内面ナデ、外面ハケ目。21、22は内外面ともにナデ。19、20は高坏の坏部、19は鋤形口縁を、20は逆「L」字形口縁をもつ。

SK-808出土土器（Fig.7・PL.14）

24～27は、いずれも弥生式土器。24～26は逆「L」字形口縁の甕。24は口縁下部に断面三角形の凸帯が１条めぐる。25は胴部上位が内傾し截頭卵形を呈す。26は外面ハケ目。27は高坏の坏部で、逆「L」字形口縁をもつ。

Ⅴ．船石遺跡９・10区の調査

１．遺　構（Fig. 8 ～20・PL. 2 、3 、5 ～13・Tab. 3 ）

今回９・10区の調査において検出された遺構は、９区で弥生時代の竪穴式住居址６軒、縄文時代から弥生時代に及ぶ土壙など28基、10区で縄文時代の竪穴式住居址１軒、弥生時代の竪穴式住居址11軒、縄文時代から弥生時代に及ぶ土壙など、発掘調査当時、性格不明遺構として遺構番号にSXを冠して調査した遺構を含め51基であった。このほか、溝跡も数条検出されているが出土遺物に幅があり時期の特定が困難である。近世以降の遺物をもつなど明らかに新しいと考えられるものを除く、４条についてFig. 8の遺構配置図に記載したが、個々の溝跡についての報告は紙面の都合で割愛させていただく。

(1) 竪穴式住居址（Fig. 8 ～13・PL. 2 、3 、5 ～ 8 ）

今回の調査で竪穴式住居址として取り扱った遺構は、上記のように９・10区あわせて18軒であった。縄文後期の住居址であるSH-026を除くと、他の17軒はいずれも弥生時代中期の円形または隅丸方形を基調とする竪穴式住居址で、９Gr.ライン以南の９・10区の南部に集中して検出された。また弥生時代の土壙についても同様な分布を示しており、船石遺跡における弥生時代集落の北限ということができる。

SH-914（Fig. 9 ）

SH-914は、９・10区調査区境界のG-10Gr.付近で検出された平面プランが不整な隅丸長方形の竪穴式住居址。住居西側を耕作の段によって失っている。規模は、長辺3.7m、短辺2.6m。床面積は遺存部で9.6㎡。床面までの掘り込みの深さは平均で５㎝程度。主柱穴などは不明。主軸は、長辺方向を基準とするとN-63°-E。近世の溝SD-923にも切られている。

SH-915（Fig. 9 ）

SH-915は、G-11Gr.付近で検出された平面プランがやや不整な隅丸方形を呈すと考えられる竪穴式住居址。住居の北壁、西壁部分は地山の傾斜によって失われている。規模は、東壁部分で2.9m、南壁部分で検出長2.7m、床面積は推定で6.8㎡。床面までの掘り込みの深さは、深いところで７㎝程度。主柱穴などは不明。主軸は、東壁を基準にするとN-３°-E。

SH-925（Fig. 9 ・PL. 5 ）

SH-925は、９区調査区東側境界のE-12Gr.付近で検出された平面プランが不整な円形の竪穴式住居址。規模は、長径4.8m、短径推定で4.0m。床面積は9.6㎡。後世の削平により床面ま

Fig. 8　船石遺跡9・10区遺構配置図（1/500）

での掘り込みの深さは平均で5㎝程度。主柱穴などは不明。

SH-926（Fig. 9 ・ PL. 5）

SH-926は、F-9 Gr.付近で検出された平面プランが隅丸長方形の竪穴式住居址。規模は、長辺4.3m、短辺3.1m。床面積は12.0㎡。床面までの掘り込みの深さは平均で5㎝弱。床面中央に炉状土壙をもつ。主柱穴は不明。主軸は、長辺方向を基準とするとN-48°-E。

SH-934（PL. 3）

SH-934は、9区南端のF、G-13Gr.付近で検出された平面プランが円形の竪穴式住居址。西に隣接するSH-937及び溝跡SD-935に切られ、住居の北側の壁が全周の1/4程度遺存する。規模は、推定径6.1m。床面積は遺存部で7.0㎡。床面までの掘り込みの深さは平均で20㎝。床面中央に炉状土壙をもつ。主柱穴は不明。

SH-937（PL. 3）

SH-937は、9区南端のG-13Gr.付近で検出された平面プランが不整な隅丸方形の竪穴式住居址。溝跡SD-935に切られ、住居の南半部分を失っており住居の北側壁が一部遺存する、規模は、不明。床面までの掘り込みの深さは遺存部で20㎝程度。主柱穴などは不明。

SH-026（Fig.10・PL. 5、6）

SH-026は、D、E-6 Gr.付近で検出された縄文時代後期の竪穴式住居址。平面プランは不整円形を呈し、床面は中央に向かって傾斜している。床面中央のピットが主柱穴と考えられる。規模は、長径4.2m、短径3.9m、床面積は、9.6㎡。床面までの掘り込みの深さは、住居中央のもっとも深い部分で約40㎝。この住居からは、縄文式土器とともに石棒、磨り石、石皿がセットで出土している。

SH-031（Fig.10・PL. 6）

SH-031は、H-8、9 Gr.で検出された不整な隅丸長方形の竪穴式住居址。規模は、長辺5.4m、短辺3.9m、床面積は、19.0㎡。床面までの掘り込みの深さは、平均で25㎝程度。床面中央に炉状土壙をもち、主柱穴は2本。住居の東隅の壁際に土壙状の掘り込みをもつ。主軸は、長辺を基準にするとN-32°-E。

SH-032（Fig.10・PL. 6）

SH-032は、H、I-9 Gr.で検出された隅丸長方形の竪穴式住居址。住居の南東角部分をSH-044

Aに切られ全体の約1/3を失っている。規模は、長辺5.4m、短辺3.8m、床面積は推定で19.5㎡。床面までの掘り込みの深さは平均で5㎝程。主軸は、長辺を基準にするとN-55°-W。

SH-033（Fig.10・PL.7）

SH-033は、H-9Gr.で検出された隅丸長方形の竪穴式住居址。地山の傾斜により住居の北西壁、南西壁部分を失っている。規模は、検出された部分で、長辺5.6m、短辺3.6m、床面積は推定で18.4㎡。床面までの掘り込みの深さは、深いところで10㎝弱。主柱穴などは不明。主軸は、長辺を基準にするとN-43°-W。

SH-042（Fig.11・PL.7）

SH-042は、H-9、10Gr.で検出された円形の竪穴式住居址。規模は、長径7.2m、短径6.7m、床面積は36.3㎡。床面までの掘り込みの深さは、平均で20㎝程度。主柱穴は6本。床面中央に炉状土壙をもつ。張り床下部からも新たに6本の柱穴が検出され、住居が拡張され建て替えが行われていることが判明した。

SH-043（Fig.11・PL.7）

SH-043は、10区南端のH、I-10、11Gr.で検出された隅丸長方形の竪穴式住居址。住居の南半分は耕作等による削平を受け不明。規模は、検出された部分で、長辺5.8m、短辺約2.2m以上、面積は検出部分で11.2㎡。床面までの掘り込みの深さは、約20㎝。主柱穴は不明。床面中央に炉状土壙をもち、住居の南東壁沿いに幅1.2m、高さ15㎝程のベッド状遺構をもつ。主軸は、長辺を基準にするとN-56°-W。

SH-044A（Fig.11・PL.8）

SH-044Aは、10区南端のH、I-9Gr.で検出されたやや不整な長方形の竪穴式住居址。西に隣接するSH-045に北西壁と南西壁の一部を切られている。規模は、長辺6.5m、短辺約4.0m、面積は推定で19.8㎡。床面までの掘り込みの深さは、深い部分で約20㎝。主柱穴などは不明。主軸は、長辺を基準にするとN-35°-E。

SH-044B（Fig.12・PL.8）

SH-044Bは、10区南端のH、I-9Gr.で検出された円形の竪穴式住居址。重複するSH-044Aに切られ、床面は失われて掘り方のみが遺存する。規模は、遺存部で直径5.6m、面積は推定で22.9㎡。掘り方底面までの掘り込みの深さは、平均で約20㎝程度。主柱穴は6本。床面中央に炉状土壙をもつ。

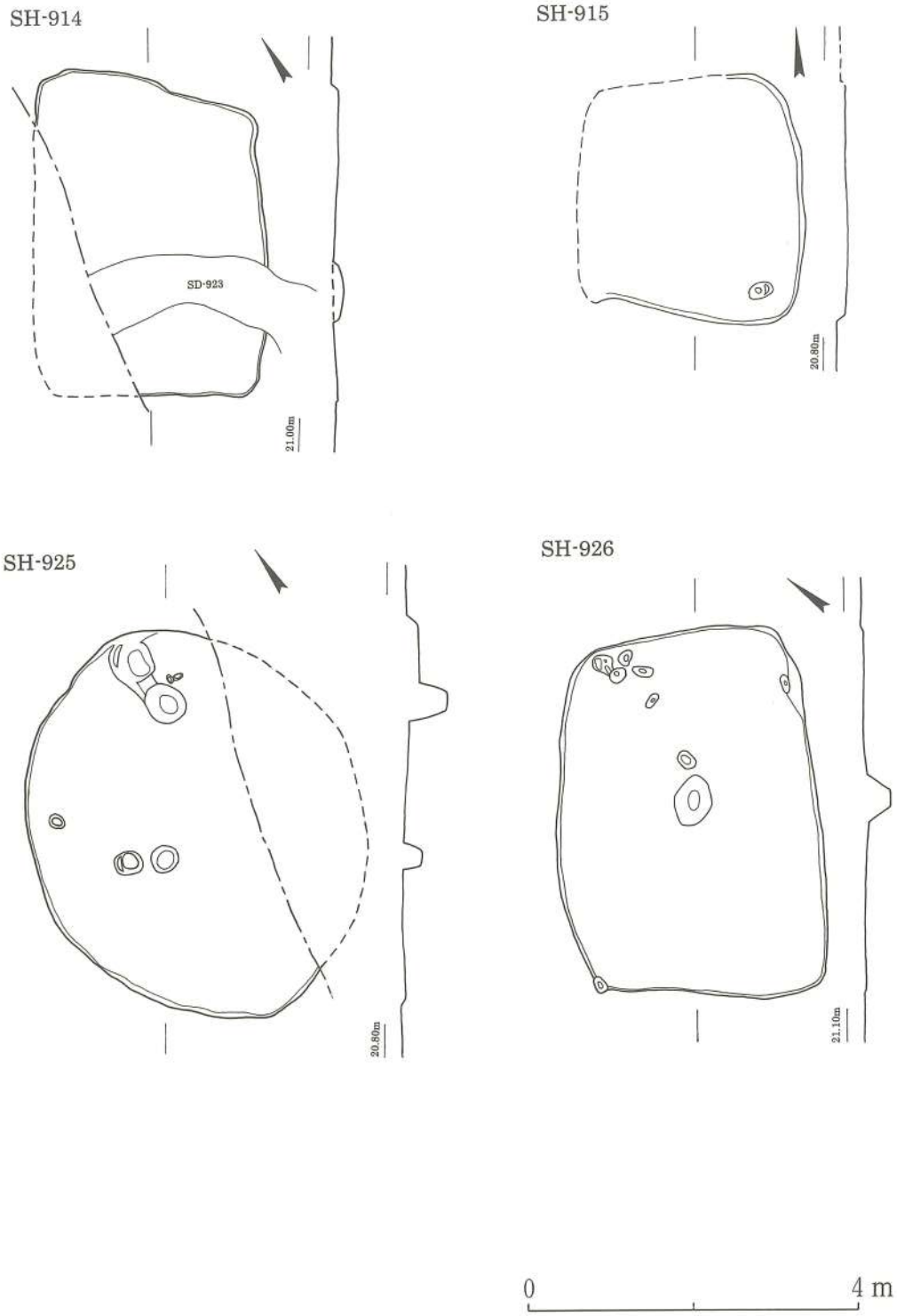


Fig. 9　船石遺跡 9 区竪穴式住居址実測図　SH-914・SH-915・SH-925・SH-926（1/80）

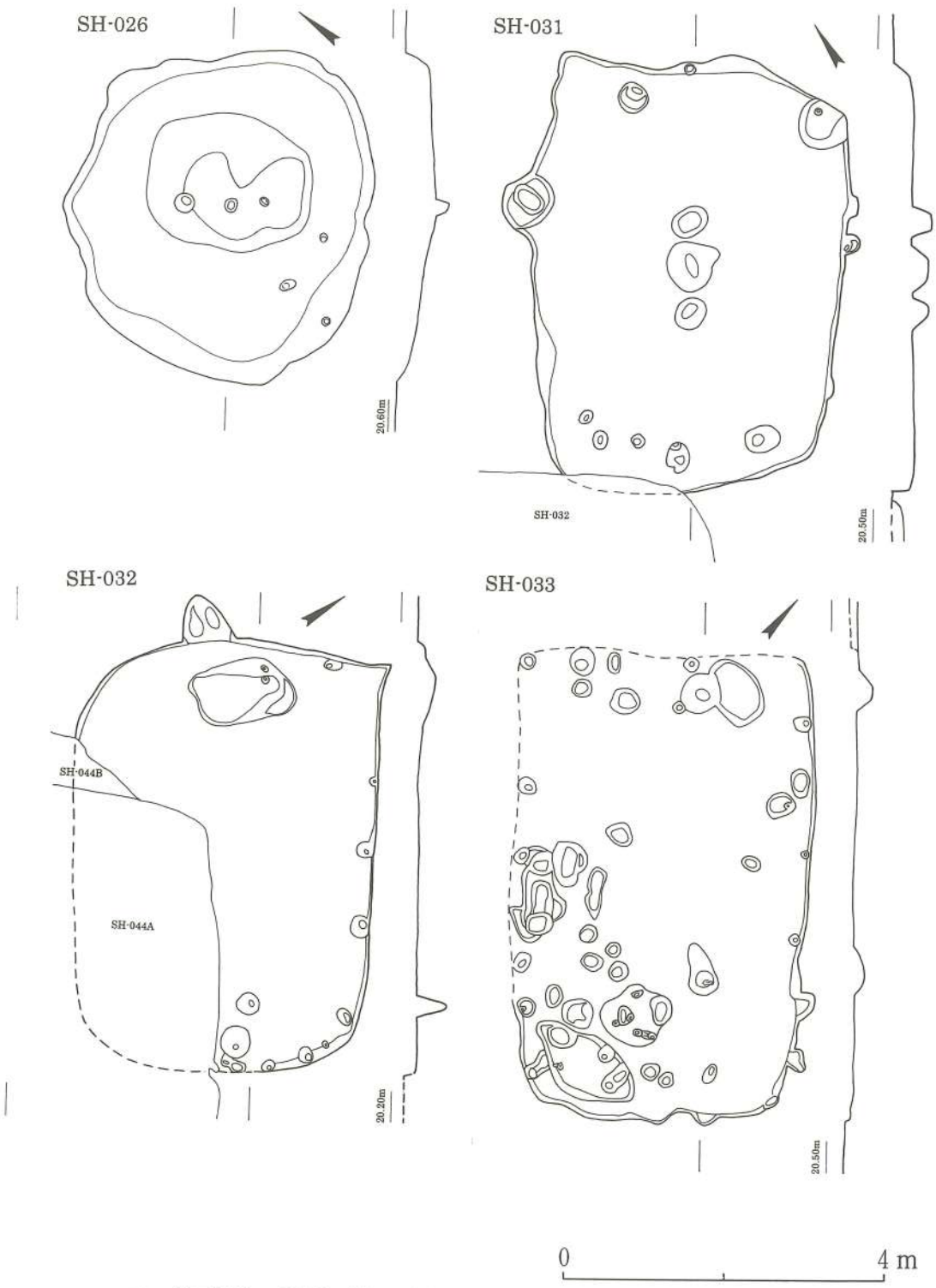


Fig.10　船石遺跡10区竪穴式住居址実測図(1)　SH-026・SH-031～SH-033（1/80）

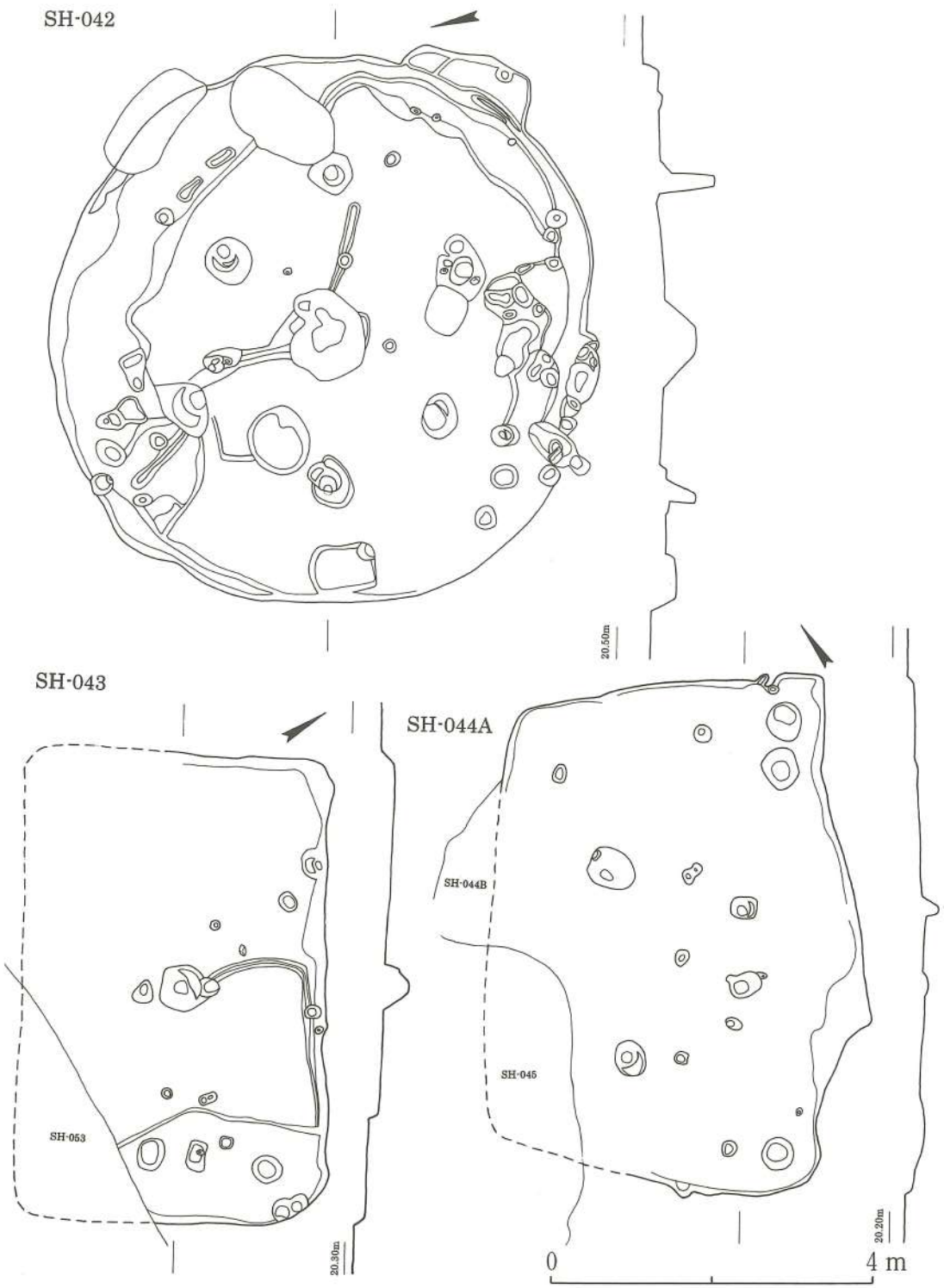


Fig.11　船石遺跡10区竪穴式住居址実測図(2)　SH-042～SH-044A（1/80）

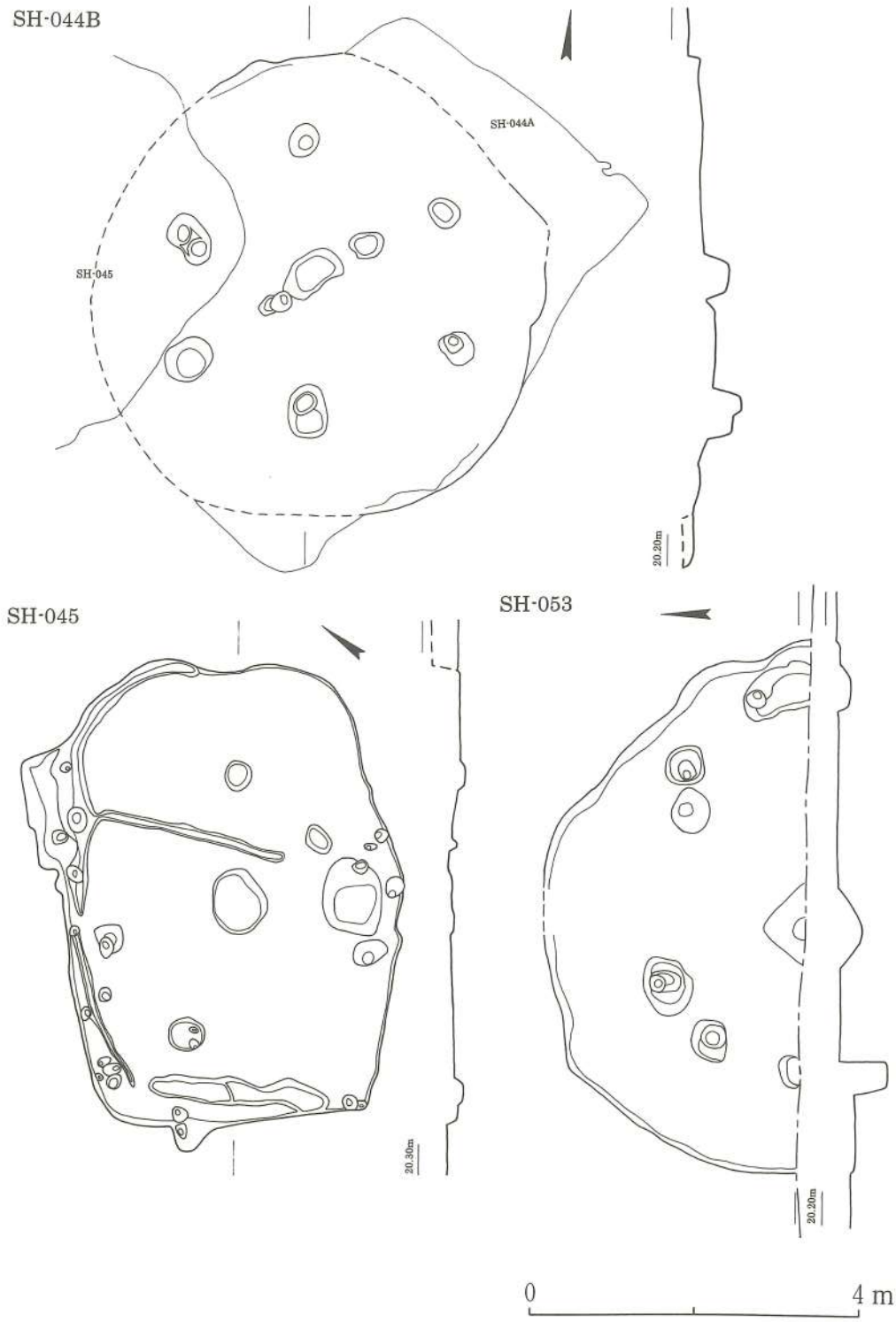


Fig.12　船石遺跡10区竪穴式住居址実測図(3)　SH-044B・SH-045・SH-053（1/80）

SH-045（Fig.12・PL.8）

SH-045は、10区西端のI-9Gr.で検出されたやや不整な隅丸長方形の竪穴式住居址。規模は、長辺5.6m、短辺4.2m、面積は推定で16.1㎡。床面までの掘り込みの深さは、平均で約10cm。主柱穴は不明。住居の北側コーナー部分から北西壁、南西壁沿いにやや内側に幅10cm～30cm、深さ10cm弱の周溝が断続的にめぐる。住居中央には浅いものの炉状土壙をもち、南東壁際ほぼ中央付近に土壙をもつ。主軸は、長辺を基準にするとN-25°-E。

SH-053（Fig.12）

SH-044Bは、10区南端のH、I-10Gr.で検出された円形の竪穴式住居址。住居の南半部分は調査区外に位置し全体の1/2を調査した。規模は、遺存部で直径6.2m、面積は14.1㎡。掘り方底面までの掘り込みの深さは、平均で約20cm程度。主柱穴は6本と推定され。床面のほぼ中央にあたる部分に炉状土壙をもつ。

SH-054（Fig.13・PL.8）

SH-054は、10区南西端のI-10Gr.で検出されたやや不整な隅丸長方形の竪穴式住居址。後世の削平によって床面以上を失い、掘り方のみが遺存する。規模は、長辺4.2m、短辺2.6m、面積は推定で9.6㎡程度。掘り方底面までの掘り込みの深さは、平均で約10cm。主柱穴などは不明。主軸は、長辺を基準にするとN-36°-E。

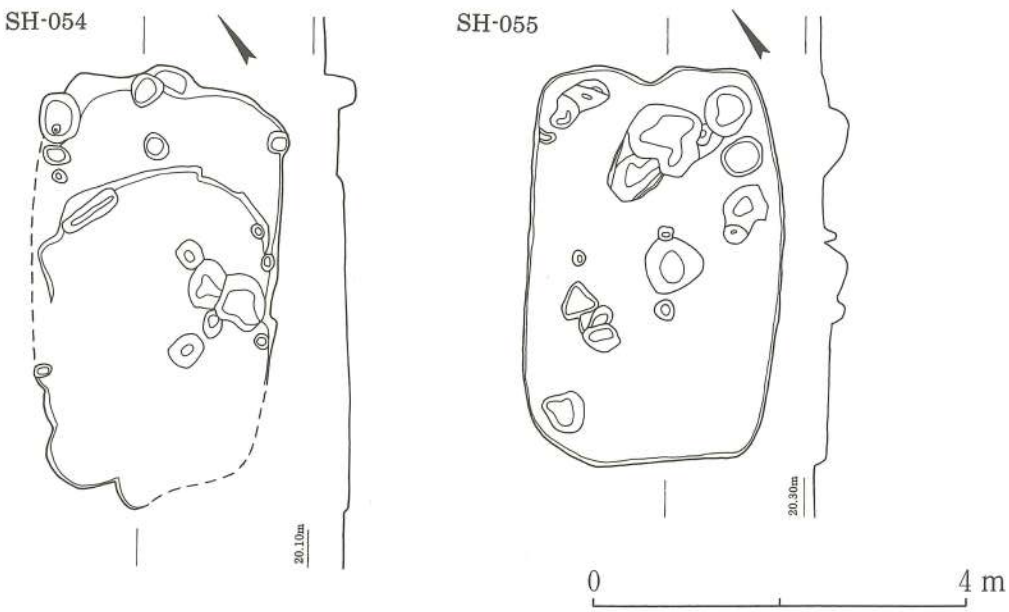


Fig.13　船石遺跡10区竪穴式住居址実測図(4)　SH-054・SH-055（1/80）

SH-055（Fig.13）

SH-055は、10区南西端のI-10Gr.で検出されたやや不整な隅丸長方形の竪穴式住居址。規模は、長辺4.2m、短辺2.7m、面積は10.1㎡程度。床面までの掘り込みの深さは、平均で約10㎝。主柱穴などは不明。主軸は、長辺を基準にするとN-34°-E。

(2) **土壙**（Fig.8、14～20・PL.9～13・Tab.3）

今回の9・10区の調査で土壙として扱った遺構は、発掘調査当時、性格不明遺構として遺構番号にSXを冠して調査した遺構を含め89基であった。また、これらの土壙の時期についてみると、出土遺物などから時期が特定できるものも少なくない。個々の土壙の時期については下記一覧表を参照願いたい。

以下、各土壙の形態・法量などを一覧表にまとめ報告とする。

Tab.3　船石遺跡9・10区出土土壙一覧表

遺構番号	平面形態	規模(上段:上面、下段:底面、単位m・㎡)				柱穴状のピットなど	出土遺物	備考
		長さ・長径	幅・短径	深さ	底面積			
SK-909	長方形	2.26 2.03	0.93 0.74	0.14	1.4		縄文式土器浅鉢 弥生式土器甕	
SK-910	長方形	2.10 1.94	1.48 1.32	0.13	1.0		弥生式土器甕、壺、鉢、器台	
SK-911	不整長方形	0.98 0.90	0.73 0.68	0.17	0.3			
SK-912	不整楕円形	1.27 0.86	1.10 0.82	0.23	0.7		弥生式土器甕、壺、蓋、土製支脚	
SK913	不整形	1.81 1.68	1.14 1.02	0.24	0.5		弥生式土器甕、壺	
SK-916	不整形	1.93 0.80	0.80 0.50	0.36	0.4		弥生式土器甕	
SK-917	不整円形	※1.1 ※0.8	1.03 0.80	0.11	0.6			
SK-918	不整 隅丸長方形	1.82 1.77	1.28 1.09	0.13	0.7			
SK-919	不整長方形	2.34 2.12	1.39 1.06	0.09	2.0			
SK-920	不整形	1.07 0.91	1.05 0.93	0.15	0.6			
SX-921	不整形	1.92 1.54	1.90 1.52	0.17	1.8			
SK-922	円形	1.35 1.29	1.25 1.10	0.19	1.1		縄文式土器深鉢、石鏃、石匙	
SK-924	不整形	1.21 0.95	0.64 0.38	0.11	0.3			
SK-925	不整形	-	-	-	-		弥生式土器甕	
SK-926	不整形	-	-	-	-		弥生式土器甕	
SK-927	不整長方形	0.95 0.83	0.63 0.51	0.28	0.4			
SX-928	不整形	3.07 2.82	※1.6 ※1.5	0.14	※3.6		弥生式土器甕	

遺構番号	平面形態	規模(上段:上面、下段:底面、単位m・㎡)				柱穴状のピットなど	出土遺物	備考
		長径・長径	幅・短径	深さ	底面積			
SK-929	不整形	1.28 1.21	1.16 1.08	0.18	1.1		弥生式土器壺	
SK-930	不整形	1.58 1.52	1.38 1.25	0.40	1.4			
SK-931	不整形	2.32 2.26	0.94 0.88	0.41	1.6			
SK-932	不整形	1.32 1.12	1.02 0.81	0.10	0.7		弥生式土器鉢	
SK-933	不整円形	1.00 0.91	0.90 0.82	0.11	0.7		弥生式土器甕	
SK-936	不整 隅丸方形	2.58 2.33	1.11 0.95	0.80	1.9			
SK-938	不整方形	0.85 0.78	0.75 0.65	0.17	0.5			
SK-939	不整円形	2.04 1.70	1.89 0.72	0.17	0.9			
SK-940	不整形	1.85 1.75	0.94 0.80	0.14	0.6			
SK-941	不整形	1.37 1.10	0.85 0.72	0.21	0.5			
SK-942	不整形	-	-	-	-			
SK-001	不整形	2.17 1.97	1.11 1.02	0.36	-			
SK-002	隅丸長方形	1.12 1.06	0.72 0.61	0.20	0.6			
SK-003	隅丸長方形	1.32 1.12	1.07 0.84	0.32	0.8	四隅にピット	縄文式土器浅鉢	
SK-004	隅丸長方形	1.39 1.30	1.08 0.98	0.34	0.8	四隅にピット		四辺に溝、木棺の板材が消失した土壙墓?
SK-005	不整形	-	-	-	-			
SK-006	不整形	-	-	-	-			
SK-007	不整円形	1.32 0.87	1.17 1.12	0.20	0.8			
SK-008	隅丸長方形	1.55 1.43	1.02 0.83	0.35	1.0			
SK-009	不整形	-	-	-	-			
SK-010	不整形	-	-	-	-			住居址の可能性
SK-011	不整形	4.23 4.14	3.39 3.18	0.40	9.3			
SK-012	不整形	-	-	-	-		縄文式土器深鉢	
SK-017	不整形	1.88 1.80	0.83 0.74	0.11	1.0			
SX-019	不整形	-	-	-	-		縄文式土器深鉢 蓮弁文青磁碗	
SX-020	不整形	-	-	-	-		弥生式土器壺、蓋	
SK-022	不整形	1.42 1.19	1.13 0.92	0.10	0.8		弥生式土器甕、壺	
SX-027	不整形	1.54 1.49	1.05 0.94	0.10	0.8			
SK-028	不整円形	1.49 1.43	13.2 1.21	0.26	1.3		縄文式土器深鉢	
SK-029	不整 隅丸長方形	1.29 1.22	0.84 0.64	0.26	0.9		弥生式土器甕、壺、器台	
SK-030	隅丸長方形	1.36 1.21	1.02 0.86	0.30	0.8		弥生式土器甕、壺	

遺構番号	平面形態	規模(上段:上面、下段:底面、単位m・㎡)				柱穴状のピットなど	出土遺物	備考
		長さ・長径	幅・短径	深さ	底面積			
SK-034	不整長方形	1.27 1.08	0.670 .64	0.20	0.6		弥生式土器甕、壺、鉢、蓋、器台	
SK-035	不整形	1.24 0.77	0.68 0.34	0.20	0.2			
SK-036	不整形	1.43 0.96	0.61 0.26	0.22	0.3			
SK-037	不整長方形	1.03 0.95	0.98 0.84	0.25	0.7		縄文式土器深鉢	
SK-038	不整形	1.00 0.87	0.93 0.63	0.13	0.5		弥生式土器甕	
SK-040	不整形	2.22 1.74	0.92 0.50	0.18	0.7			
SK-041	不整形	1.97 1.32	1.19 0.88	0.18	1.0		弥生式土器甕、鉢、蓋	
SK-047	不整形	-	-	-	-		弥生式土器甕	
SK-048	不整形	1.48 1.14	0.70 0.44	0.35	0.4		弥生式土器甕、壺	
SK-049	隅丸長方形	1.42 1.07	0.87 0.50	0.26	0.5			
SX-050	不整楕円形	1.53 1.10	0.80 0.62	0.29	0.5			
SX-052	不整形	3.3 3.1	1.90 1.77	0.12	0.4		縄文式土器深鉢	
SK-056	不整長方形	1.43 1.30	0.97 0.78	0.23	0.9		弥生式土器甕、壺	
SK-057	不整形	1.30 1.22	0.58 0.50	0.8	0.5			
SX-059	不整形	-	-	-	-			
SX-061	不整形	3.59 3.52	1.83 1.81	0.50	4.7		縄文式土器	
SX-062	不整円形	1.69 0.41	1.68 0.28	0.80	0.1		縄文式土器	
SX-064	不整円形	1.26 0.98	1.02 0.84	0.20	0.6			
SX-066	不整形	-	-	-	-		縄文式土器	
SX-067	不整形	1.57 1.45	0.67 0.59	0.12	0.7			
SX-068	不整形	1.96 1.93	0.57 0.53	0.12	0.4			
SX-069	不整形	1.50 1.41	1.25 1.20	0.70	2.5			
SX-070	不整形	3.63 3.53	1.29 1.21	0.16	2.7			
SX-071	不整長方形	1.54 1.28	0.72 0.48	0.20	0.5			
SK-072	不整長方形	1.51 1.16	1.42 0.71	0.23	0.7			
SK-073	不整長方形	1.56 1.38	0.58 0.48	0.12	0.6		弥生式土器甕、	
SK-074	不整長方形	-	-	-	-		弥生式土器甕、器台	
SK-075	不整形	1.95 1.81	1.10 0.86	0.31	1.2		弥生式土器甕、壺、蓋、器台	
SX-076	不整形	3.40 1.39	1.97 1.18	0.30	1.4			
SX-077	不整形	1.82 1.66	1.26 1.16	0.08	1.7			
SK-078	不整形	1.68 1.53	0.67 0.48	0.09	0.5			

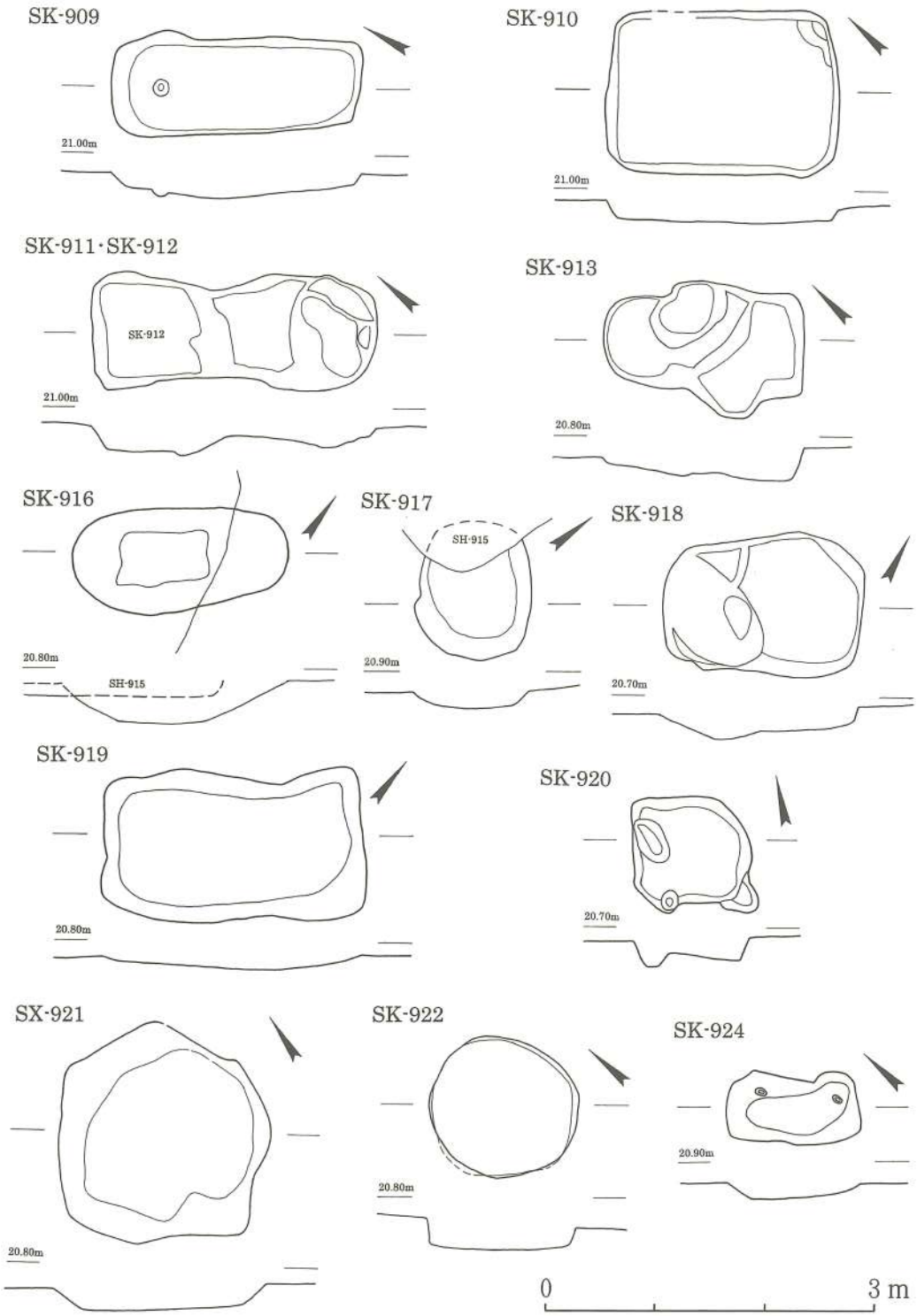


Fig.14　船石遺跡 9 区土壙実測図(1)
SK-909～SK-913・SK-916～SK-920・SX-921・SK-922・SK-924（1/60）

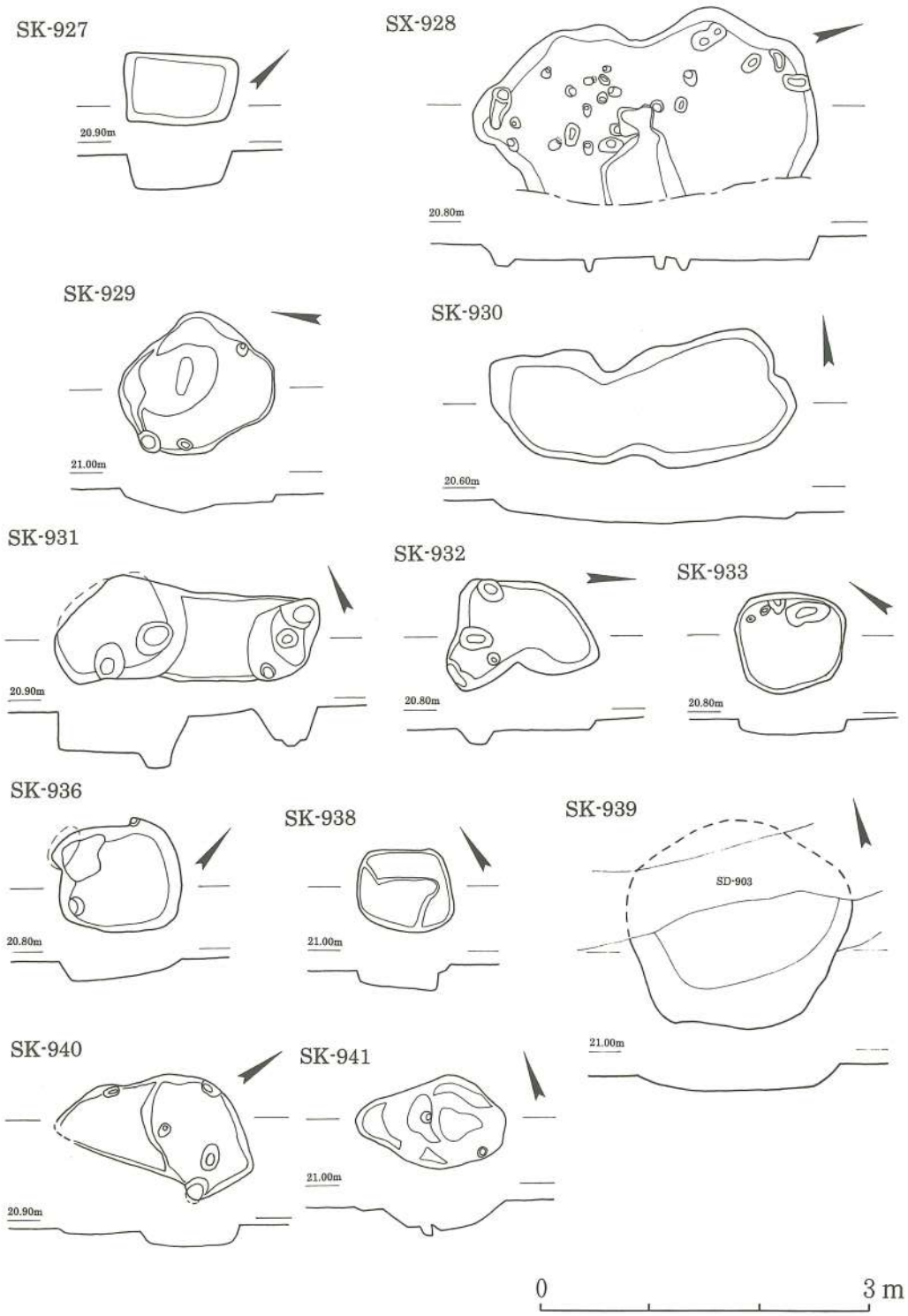


Fig.15　船石遺跡 9 区土壙実測図(2)
SK-927・SX-928・SK-929～SK-933・SK-936・SK-938～SK-941（1/60）

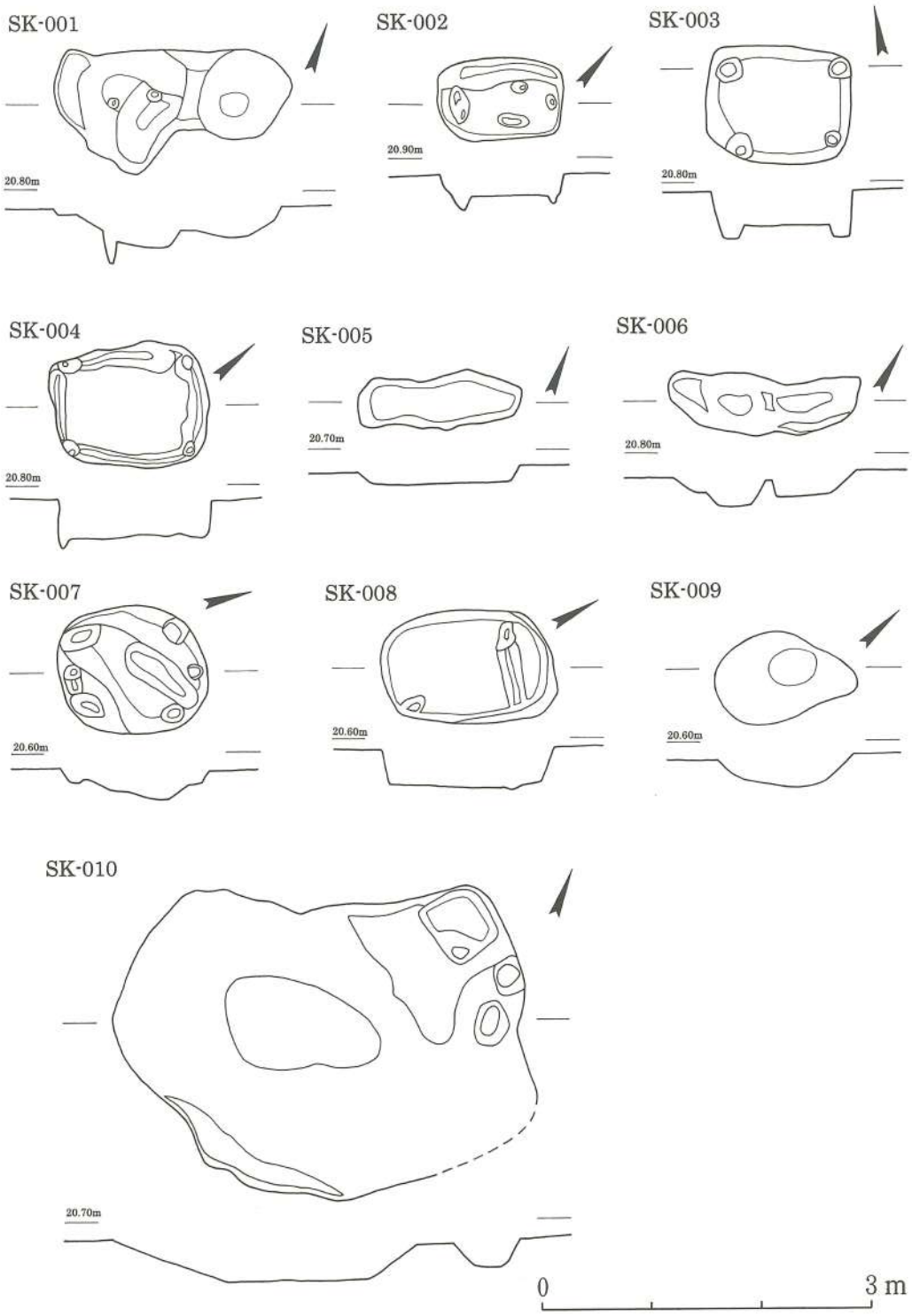


Fig.16　船石遺跡10区土壙実測図(1)　SK-001～SK-010（1/60）

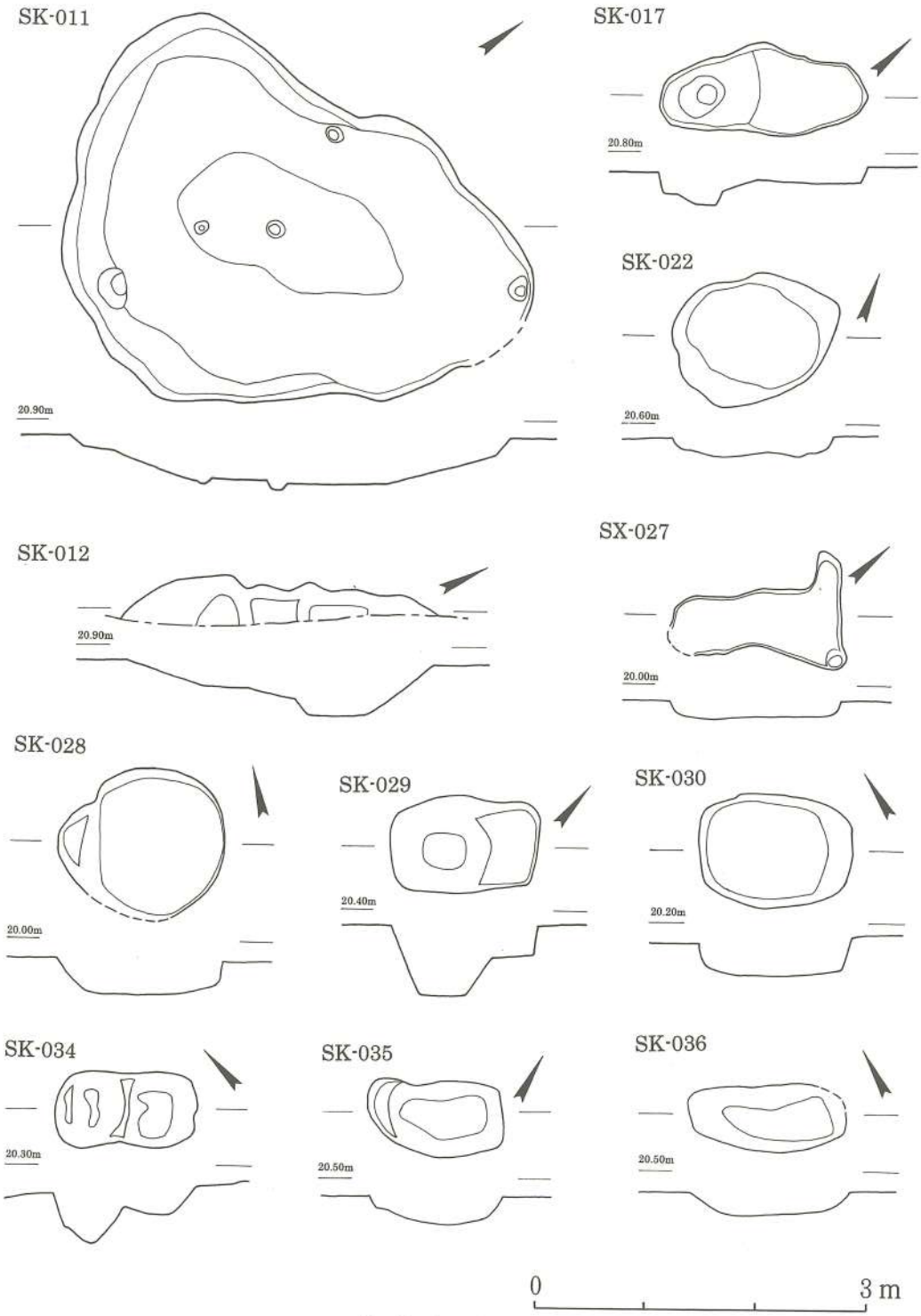


Fig.17　船石遺跡10区土壙実測図(2)

SK-011・SK-012・SK-017・SK-022・SX-027・SK-028～SK-030・SK-034～SK-036（1/60）

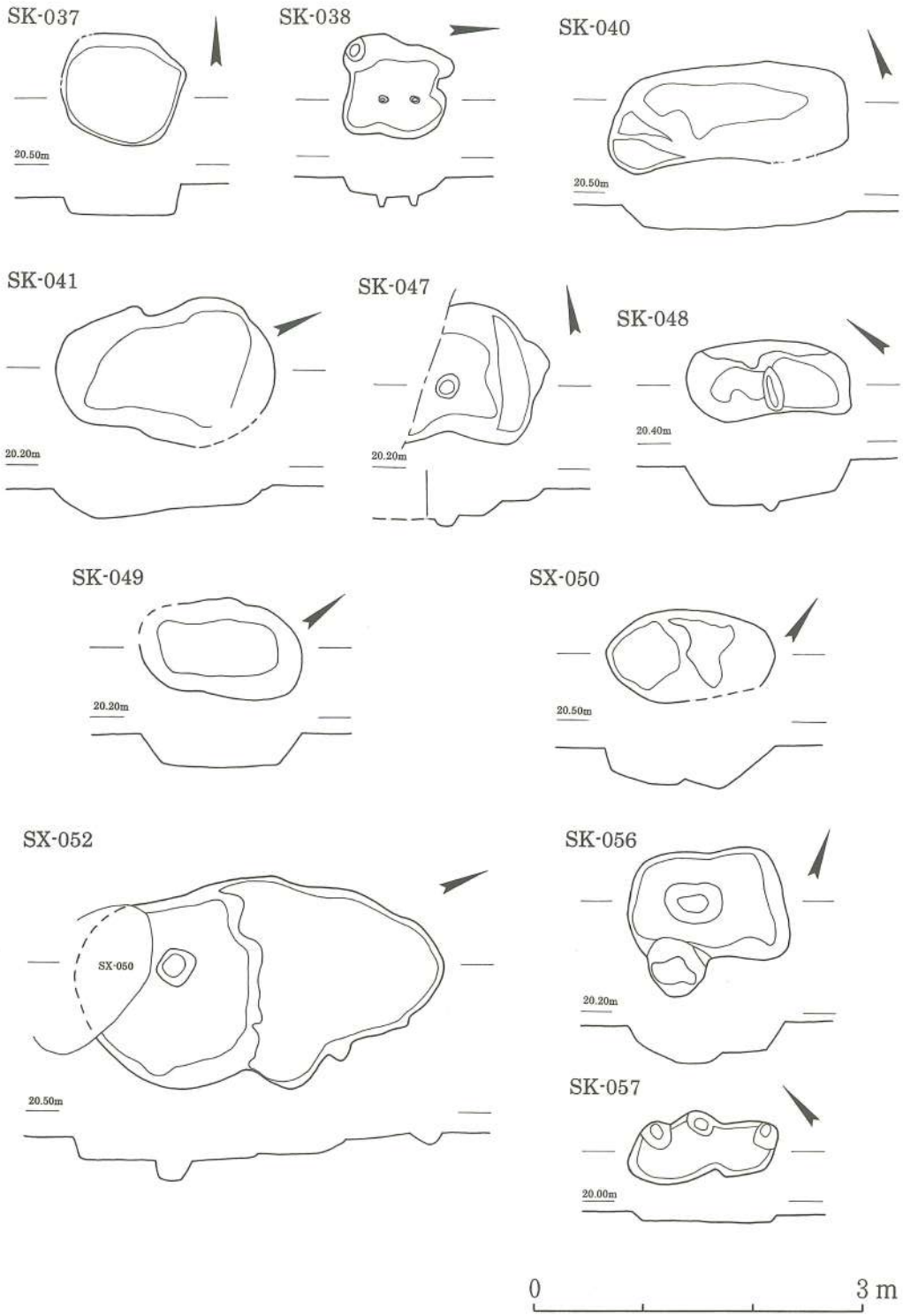


Fig.18　船石遺跡10区土壙実測図(3)　SK-037・SK-038・SK-040・SK-041・SK-047～SK-049・SX-050・SK-052・SK-056・SK-057（1/60）

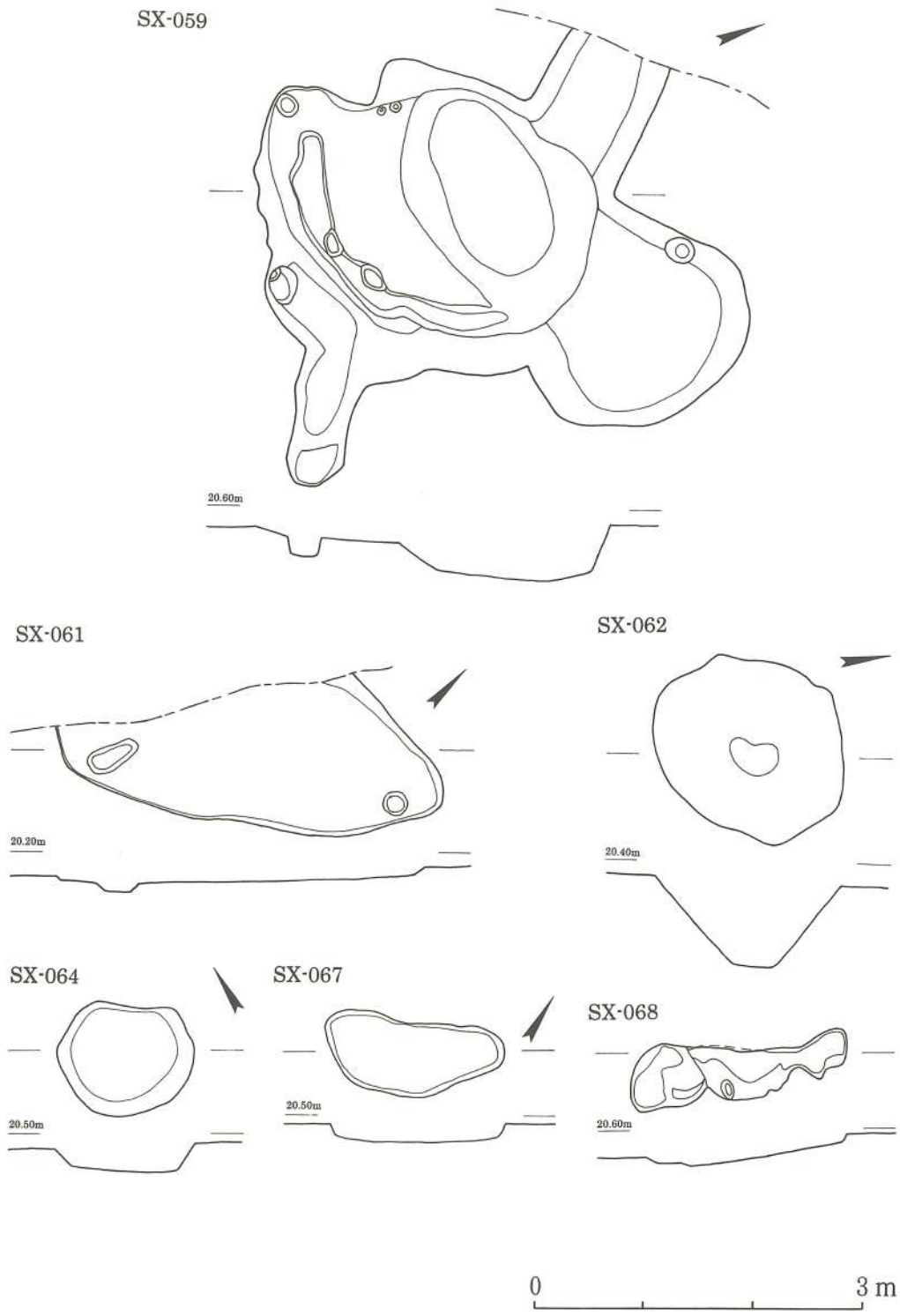


Fig.19　船石遺跡10区土壙実測図(4)
SX-059・SX-061・SX-062・SX-064・SX-067・SX-068（1/60）

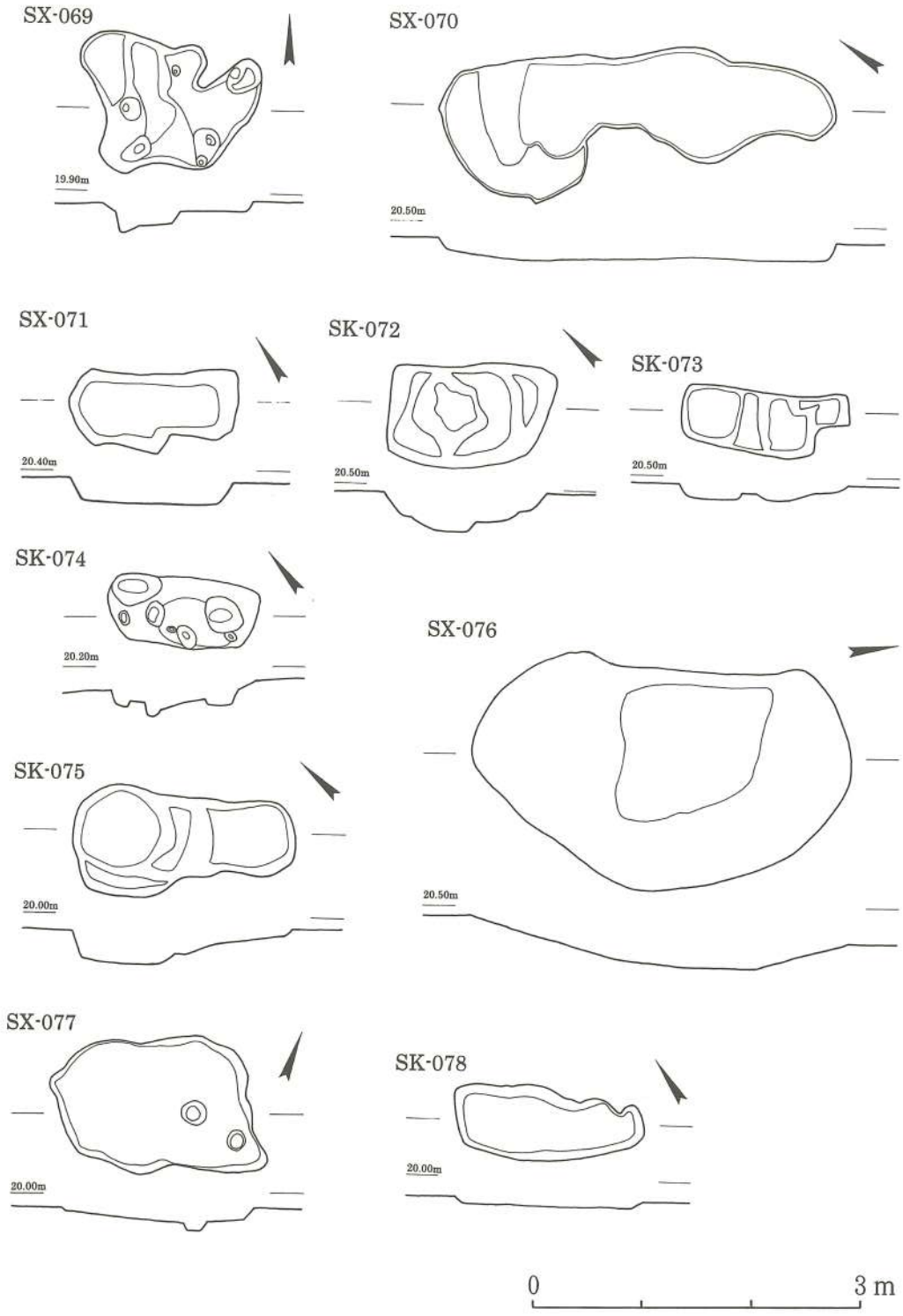


Fig.20　船石遺跡10区土壙実測図(5)
SX-069～SX-071・SK-072～SK-075～SX-077・SK-078（1/60）

2．遺　物（Fig.21～39・PL.13～19）

船石遺跡９・10区の調査では、これまで述べてきた各遺構から、縄文式土器や弥生式土器、などが出土し、これらに伴い少量ではあるが石器なども出土している。ここでは土器について代表的なものを遺構ごとに報告し、石器などについては文末にまとめて報告する。

SD-903出土土器（Fig.21）

28、29は弥生式土器で器台の裾部。

SD-904出土土器（Fig.21）

30は中世土器の土鍋。

SK-909出土土器（Fig.21）

31は弥生式土器の甕の底部。32は縄文式土器。浅鉢。

SK-910出土土器（Fig.21、22・PL.14）

33～45は弥生式土器。33～39は器台、33、34などの大振りなものと、38の細く低いものがある。40～42、44は甕。40～42は逆「L」字形口縁をもつ。43は鋤形口縁の壺。45は鉢。半球形の体部に水平に近く開く口縁がつく。

SK-912出土土器（Fig.22、23・PL.15）

46～56は弥生式土器。46～49は逆「L」字形口縁をもつ甕。50は土製支脚、やや裾部が広がる円柱状の支脚で底面中央には棒状の工具を挿入したような穴をもつ。51、52は蓋。53、55は壺の、56は甕の底部。

SK-913出土土器（Fig.23・PL.13）

57～60は弥生式土器。57、58は逆「L」字形口縁をもつ甕。60は広口壺。

SK-916出土土器（Fig.23）

61、62は弥生式土器で逆「L」字形口縁をもつ甕。

SK-917出土土器（Fig.23）

63は弥生式土器で甕または壺の底部。

SK-922出土土器（Fig.24・PL.15）

64、65は縄文式土器の深鉢。64は４単位の波状口縁の深鉢で口縁部、頚部に磨り消し縄文、刺突文などが施文されている。65は粗製の深鉢、外面に条痕文を施す。

SD-923出土土器（Fig.24）

66は弥生式土器で逆「L」字形口縁をもつ甕。

SK-925出土土器（Fig.24）

67は弥生式土器で逆「L」字形口縁をもつ甕。

SK-926出土土器（Fig.24）

68、69は弥生式土器で逆「L」字形口縁をもつ甕。69は口縁下部に断面三角形の凸帯が1条めぐる。

SX-928出土土器（Fig.24）

70は弥生式土器で逆「L」字形口縁をもつ甕。口縁上面の平坦面はやや内傾する。

SK-929出土土器（Fig.24）

71は弥生式土器の壺で鋤形口縁をもつ。

SK-932出土土器（Fig.24）

72は弥生式土器の鉢で逆「L」字形口縁をもち、口縁下部に断面三角形の凸帯が1条めぐる。

SK-933出土土器（Fig.24）

73、74は弥生式土器。73は鉢、74は甕。それぞれ逆「L」字形口縁をもち、口縁下部に断面三角形の凸帯が1条めぐる。

SH-934出土土器（Fig.24）

75、76は弥生式土器。75は逆「L」字形口縁の甕。76は甕棺として使用される大型甕の口縁。

SD-935出土土器（Fig.25）

77～79、81は弥生式土器。77～79は逆「L」字形口縁の甕。81は器台。80は須恵器の高坏。

SH-937出土土器（Fig.25）

82～85は弥生式土器。82～84は逆「L」字形口縁の甕。85は壺の底部。

SK-003出土土器（Fig.25）

86は縄文式土器の浅鉢。

SK-012出土土器（Fig.25）

87は縄文式土器の深鉢。条痕文が施され口縁外面に刺突文をもつ。

SD-014出土土器（Fig.25）

88は竜泉窯系の青磁碗底部。

SX-019出土土器（Fig.25）

89、90は竜泉窯系の蓮弁文青磁碗破片。91は縄文式土器の粗製の深鉢。

SX-020出土土器（Fig.26）

92～94は弥生式土器。92は壺で鋤形口縁をもつ。93は蓋。94は無頸壺。胴部に断面三角形の凸帯が1条めぐる。

SK-022出土土器（Fig.26）

95～100は弥生式土器。95、96は壺の底部。97～100は逆「L」字形口縁の甕で、98、100は口縁下部に断面三角形の凸帯が1条、99は2条めぐる。

SD-023出土土器（Fig.26・PL.15）

101は竜泉窯系の青磁碗底部。

SK-028出土土器（Fig.26・PL.15）

102は縄文式土器の深鉢。

SK-029出土土器（Fig.26、27・PL.16）

103～118は弥生式土器。103～114は逆「L」字形口縁の甕で、112、113は口縁下部に断面三角形の凸帯が1条めぐる。115は甕の底部。116、117は器台。118は壺の底部。

SK-030出土土器（Fig.28）

119～123は弥生式土器。119～122は逆「L」字形口縁の甕で、119、120は口縁下部に断面三角形の凸帯が1条めぐる。123は大型の壺で、鋤形口縁をもち、胴部上位に断面三角形の凸帯が1条めぐる。

SH-031出土土器（Fig.28）

124は弥生式土器で逆「L」字形口縁をもつ甕。口縁下部に断面三角形の凸帯が1条めぐる。

SH-033出土土器（Fig.28）

125～128は弥生式土器。125は鋤形口縁の壺。126～127は逆「L」字形口縁の甕。128は壺の底部を打ち欠いて皿としたもの。

SK-034出土土器（Fig.28、29）

129～141は弥生式土器。129～131は逆「L」字形口縁の甕。132は逆「L」字形口縁の鉢で、口縁下部に断面三角形の凸帯が1条めぐる。133～135は壺の口縁部。133は素口縁、134は鋤形口縁をもつ。135は鋤形口縁をもつ大型壺。136は蓋。140、141は器台。

SK-037出土土器（Fig.29）

142は縄文式土器の深鉢。

SK-038出土土器（Fig.29）

143は弥生式土器で逆「L」字形口縁をもつ甕。

SH-041出土土器（Fig.29、30）

144～152は弥生式土器。144～147、150、151は逆「L」字形口縁の甕。147は口縁下部に断面三角形の凸帯が2条、150、151は1条めぐる。148、149は逆「L」字形口縁の鉢で、口縁下部に断面三角形の凸帯が1条めぐる。153は蓋。

SH-042出土土器（Fig.30）

154～157は弥生式土器。154～156は逆「L」字形口縁の甕。157はそば猪口形の鉢で平底の底部で体部は直線的に外傾しながら開き口縁に至る。

SH-043出土土器（Fig.31）

158～160は弥生式土器。158、159は逆「L」字形口縁の甕。158は口縁下部に断面三角形の

凸帯が1条めぐる。160は蓋。

SH-044出土土器（Fig.31・PL.16）

161～171は弥生式土器。161、162は鉢、体部が内湾しながら開きそのまま口縁に至る。163～167は逆「L」字形口縁の甕。168は逆「L」字形口縁の鉢。170は壺の頚部、胴部との境界に凸帯がめぐる。

SH-045出土土器（Fig.32）

172～175は弥生式土器。172は壺の頚部、胴部との境界に凸帯がめぐる。173～175は逆「L」字形口縁の甕。

SK-047出土土器（Fig.32）

176、177は弥生式土器で逆「L」字形口縁の甕。146は口縁下部に断面三角形の凸帯が2条、177は1条めぐる。

SK-048出土土器（Fig.32）

178～184は弥生式土器。178～182は逆「L」字形口縁の甕。183は甕、184は壺のそれぞれ底部。

SX-052出土土器（Fig.33・PL.16）

185、186は縄文式土器。185は深鉢で口縁部に沈線、磨り消し縄文が施文されている。186は鉢の円盤状の底部。

SH-053出土土器（Fig.33・PL.16、17）

187～193は弥生式土器。187～189は逆「L」字形口縁の甕。190、191、193は壺。190は鋤形口縁をもつ。192は鼓形を呈す器台。

SH-054出土土器（Fig.33、34・PL.17）

194～202は弥生式土器。194は蓋。195～201は逆「L」字形口縁の甕。202は逆「L」字形口縁の鉢で、口縁下部に断面三角形の凸帯が1条めぐる。

SH-055出土土器（Fig.34～37・PL.17）

203～221は弥生式土器。203～214はそれぞれにバリエーションはあるがいずれも逆「L」字形口縁の甕。214は口縁下部に断面三角形の凸帯が1条めぐる。216は器台。217は小型の無頚壺で胴部に断面三角形の凸帯が1条めぐる。218～221は壺。218は球形の胴部で口縁は素口縁で外反しながら開く。219～221は壺の胴部で凸帯がめぐる。

SK-056出土土器（Fig.37）

222～225は弥生式土器。222、223は逆「L」字形口縁の甕。223は口縁が内傾し截頭卵形に近い形態を呈す。224は鋤形口縁の壺。

SK-058出土土器（Fig.37）

SX-061・SX-062・SX-065・SX-066出土土器（Fig.37・PL.17、18）

229～235は縄文式土器片。それぞれ条痕文や沈線文が施文されている。それぞれ229はSX-061、230はSX-062、231、232はSX-065、233、235はSX-066出土。

SK-073出土土器（Fig.38）

236は弥生式土器で、逆「L」字形口縁の甕。

SK-074出土土器（Fig.38）

237～239は弥生式土器。237、238はいずれも逆「L」字形口縁の甕。239は器台。

SK-075出土土器（Fig.38、39・PL.18）

240～251は弥生式土器。240～246はいずれも逆「L」字形口縁の甕。245は口縁下部に断面三角形の凸帯が1条めぐる。247は広口壺、248鋤形口縁をもつ壺。249、250は器台。251は蓋。

船石遺跡9・10区出土石器など（PL.19）

石鏃（PL.19-1）

石鏃は4点出土した。いずれも凹基式で、261は、長さ2.4cm、幅1.4cm、厚さ0.2cm、重さ0.9g。砂岩または泥岩製。262は、長さ2.6cm、幅1.9cm、厚さ0.3cm、重さ1.0g。サヌカイト製。263は、長さ2.3cm、幅2.1cm、厚さ0.4cm、重さ1.5g。サヌカイト製。264は、長さ3.7cm、幅1.9cm、厚さ0.5cm、重さ2.7g。黒曜石製。261、262はSK-922出土。263はSD-013出土。264はSH-053出土。

石匙（PL.19-1）

265横長の石匙で、写真右側を欠く。遺存部で長さ6.6cm、刃部で幅2.7cm、つまみを含めた全幅は3.6cm、厚さ0.6cm、重さ15.2g。サヌカイト製。SK-922出土。

石棒・磨石・石皿（PL.19-2、19-3）

これらはSH-026からセットで出土した。

石棒266は、全体がやや湾曲して、写真下部で折れており全長は不明。遺存部で、長さ13.5cm、幅は写真上部で2.7cm、欠損部で4.7cm、厚さ3.2cm、重さ371g。砂岩質の石材を利用している。

磨石267は、完形で、長さ11.3cm、幅91cm、厚さ4.1cm、重さ730g。砂岩製。片面（写真下面）のみが使用されている。断面は角が取れた長方形に近い形態を呈す。

石皿268は全体が凹レンズ状に湾曲した砂岩質の円形石材で、全体の1/3程度を欠く（写真手前部分）。大きさは遺存部で直径30.8cm、厚みは均一でなく写真左で4.4cm、中央で5.5cm、写真右で6.4cmとややいびつな形状を呈す。上面は縁辺より2.3cmの深さまでくぼんでいる。重量は、6,235g。

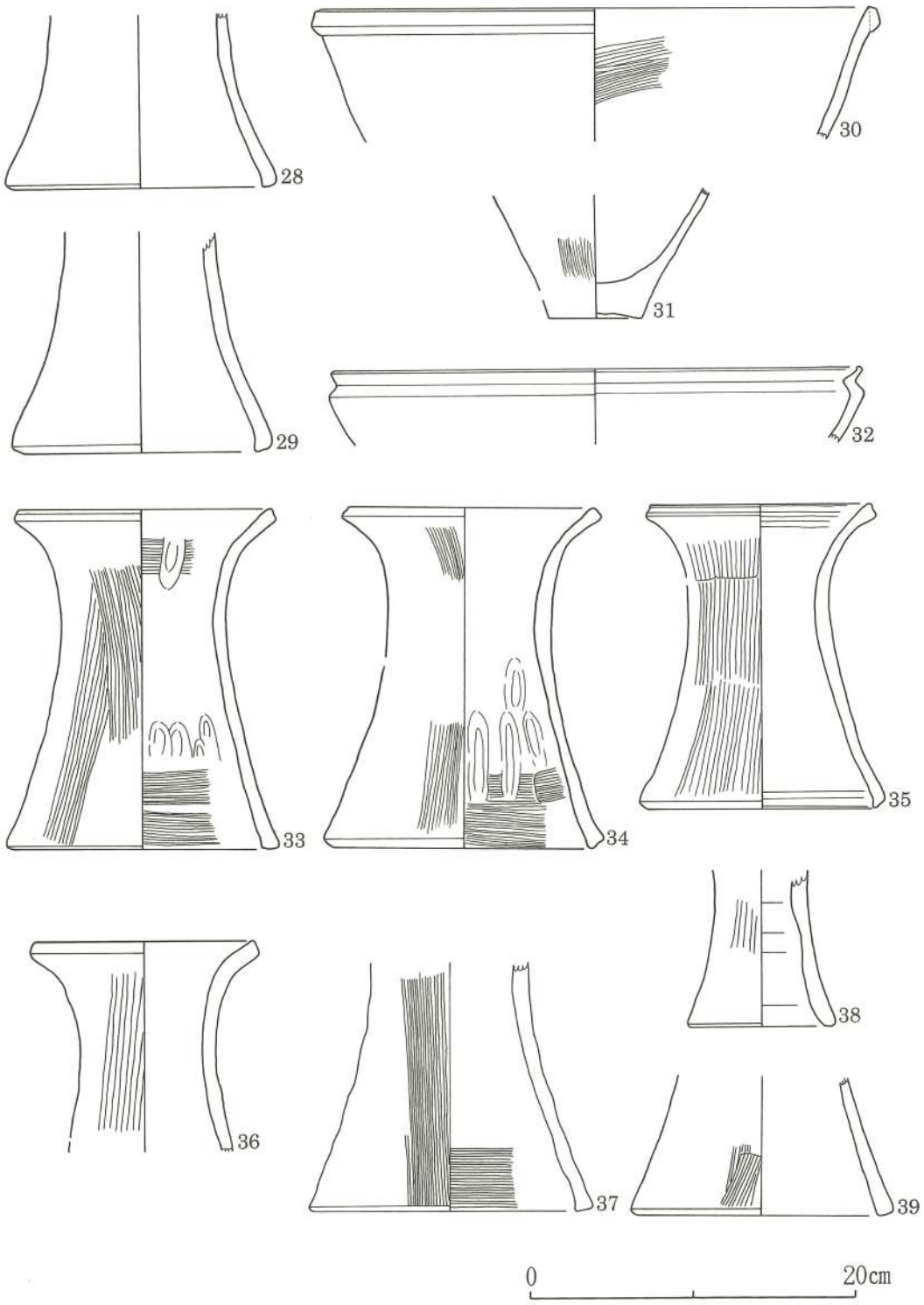


Fig.21　船石遺跡９区出土遺物実測図(1)（１/４）

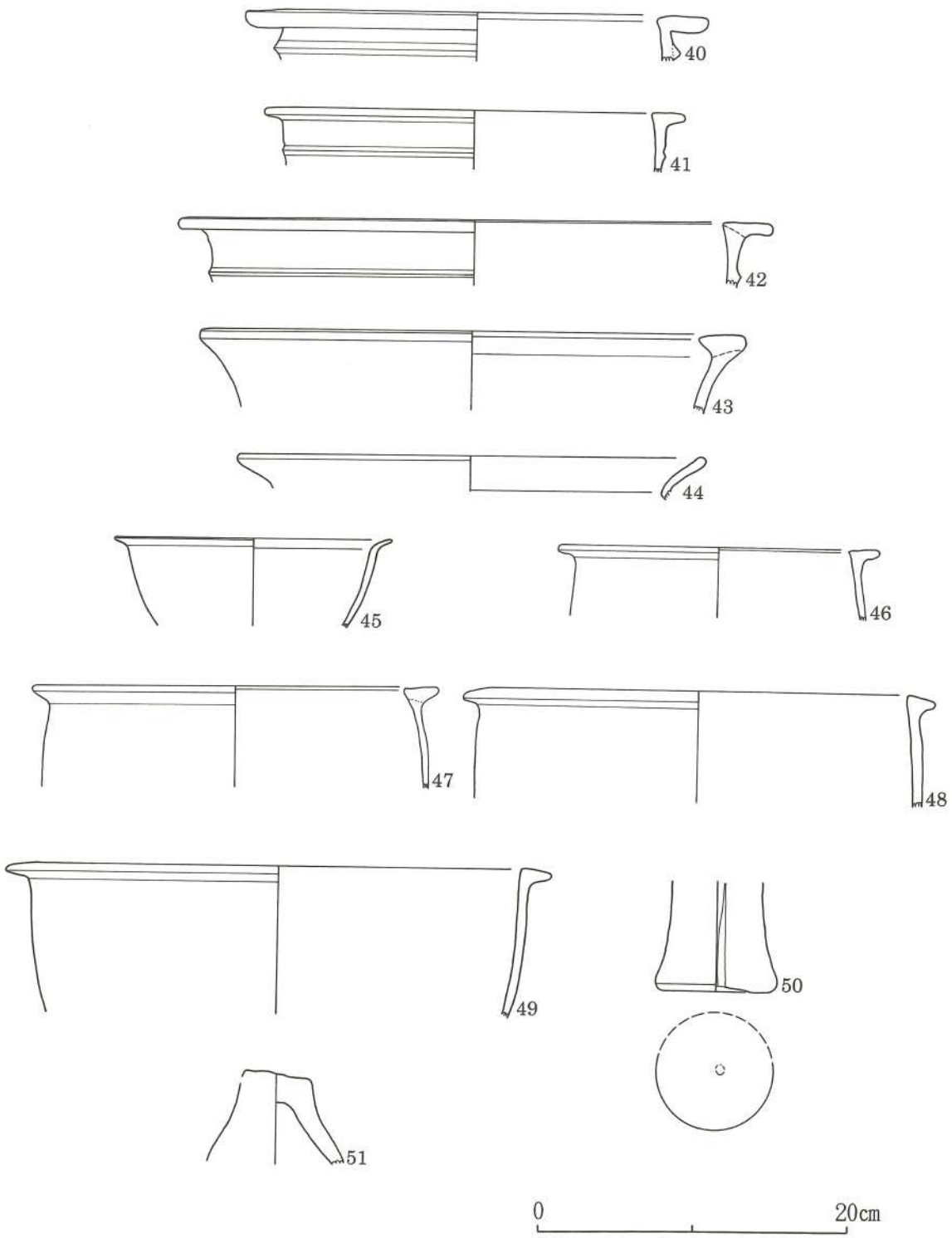


Fig.22　船石遺跡９区出土遺物実測図(2)（１/４）

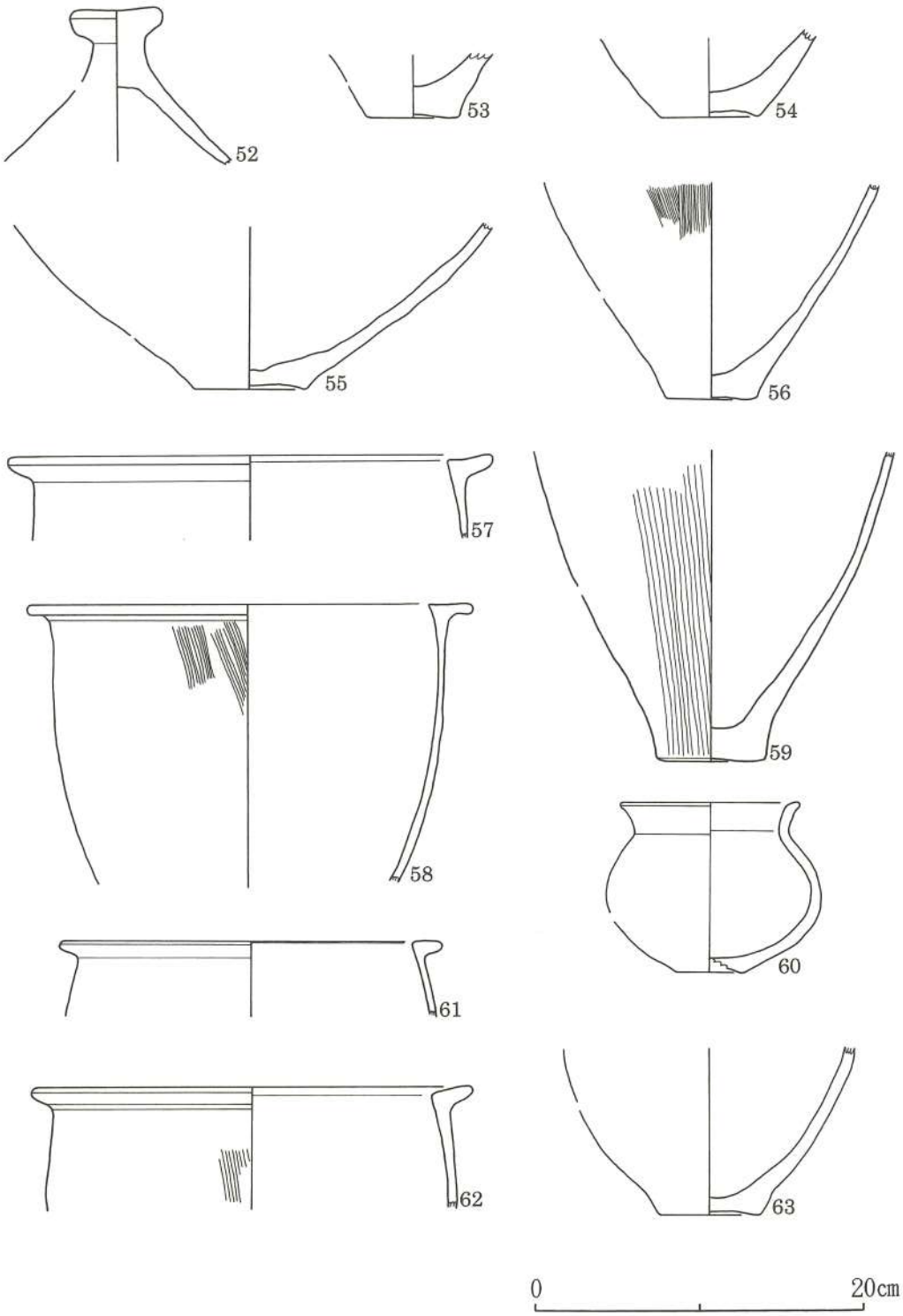


Fig.23　船石遺跡 9 区出土遺物実測図(3)（1／4）

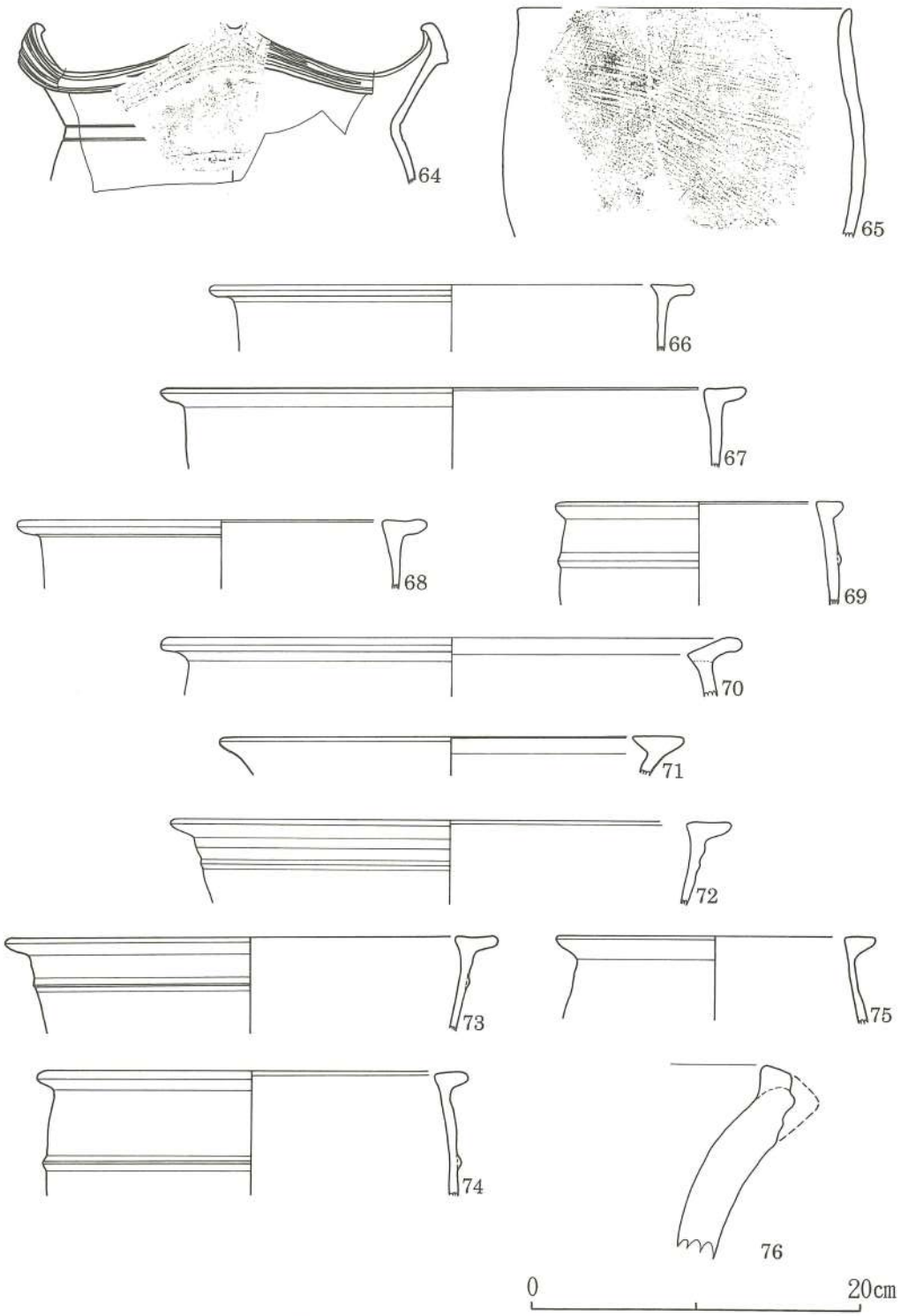


Fig.24　船石遺跡 9 区出土遺物実測図(4)（1／4）

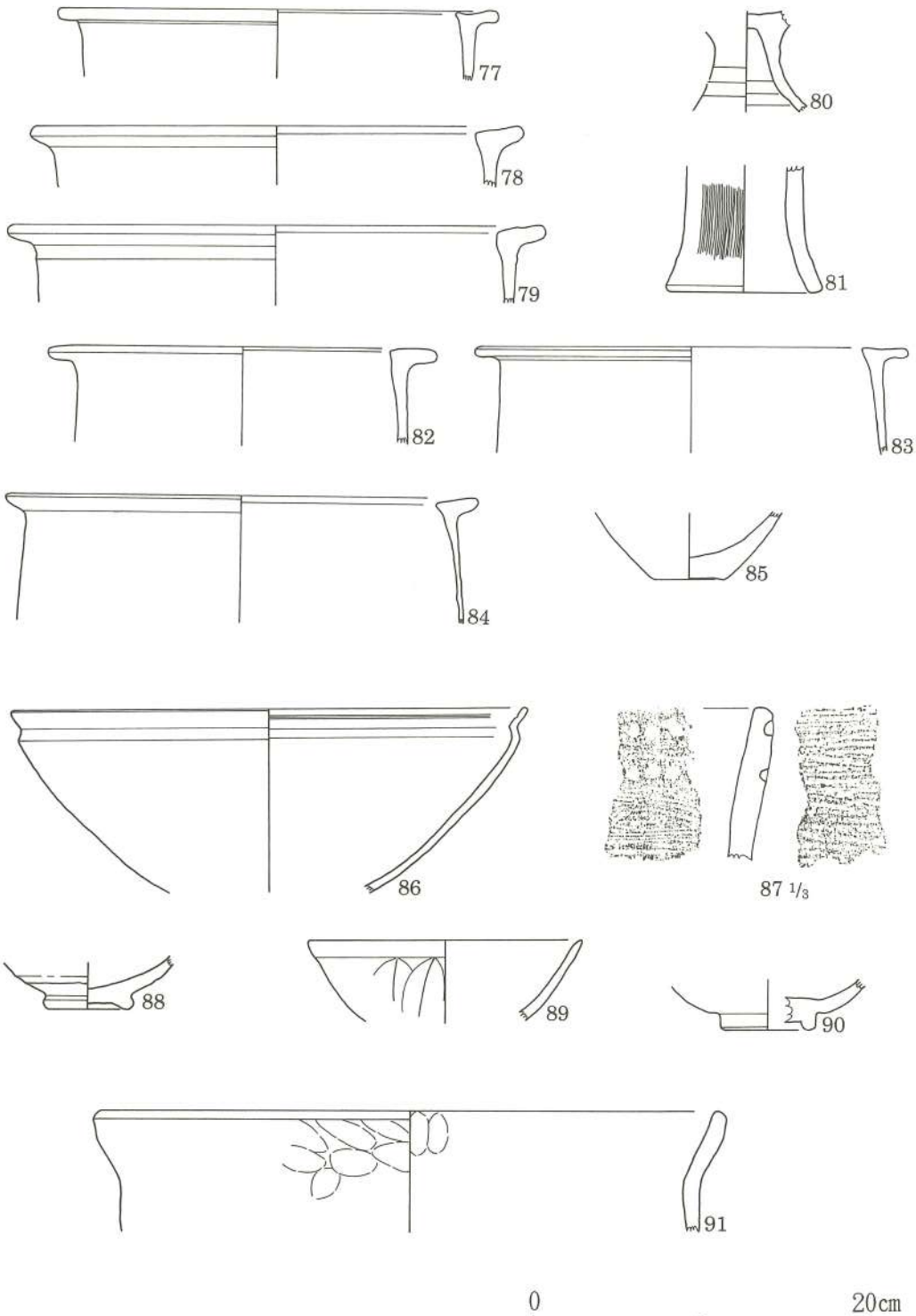


Fig.25　船石遺跡９区出土遺物実測図(5)・船石遺跡10区出土遺物実測図(1)（１/４）

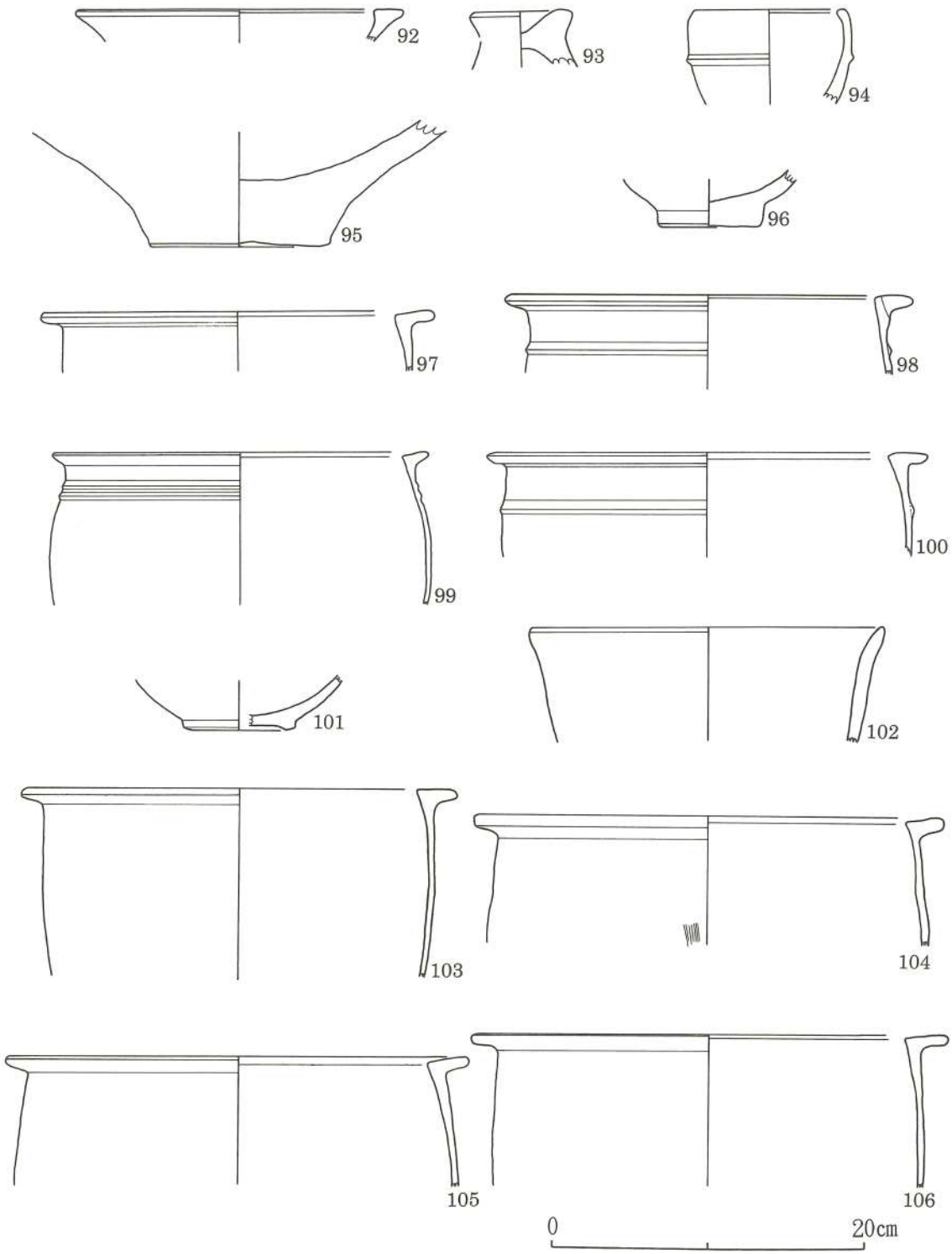


Fig.26　船石遺跡10区出土遺物実測図(2)（1／4）

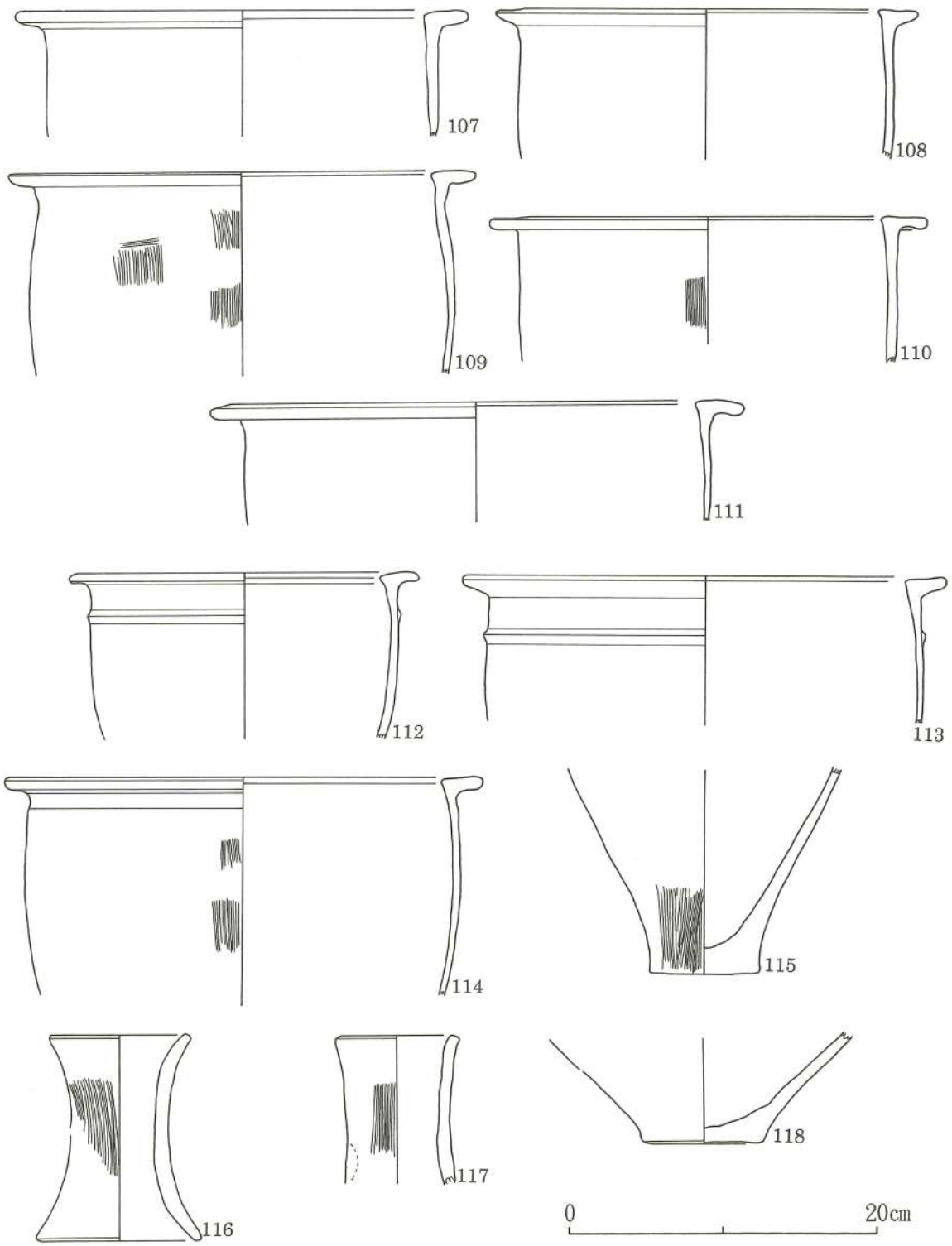


Fig.27　船石遺跡10区出土遺物実測図(3)（1／4）

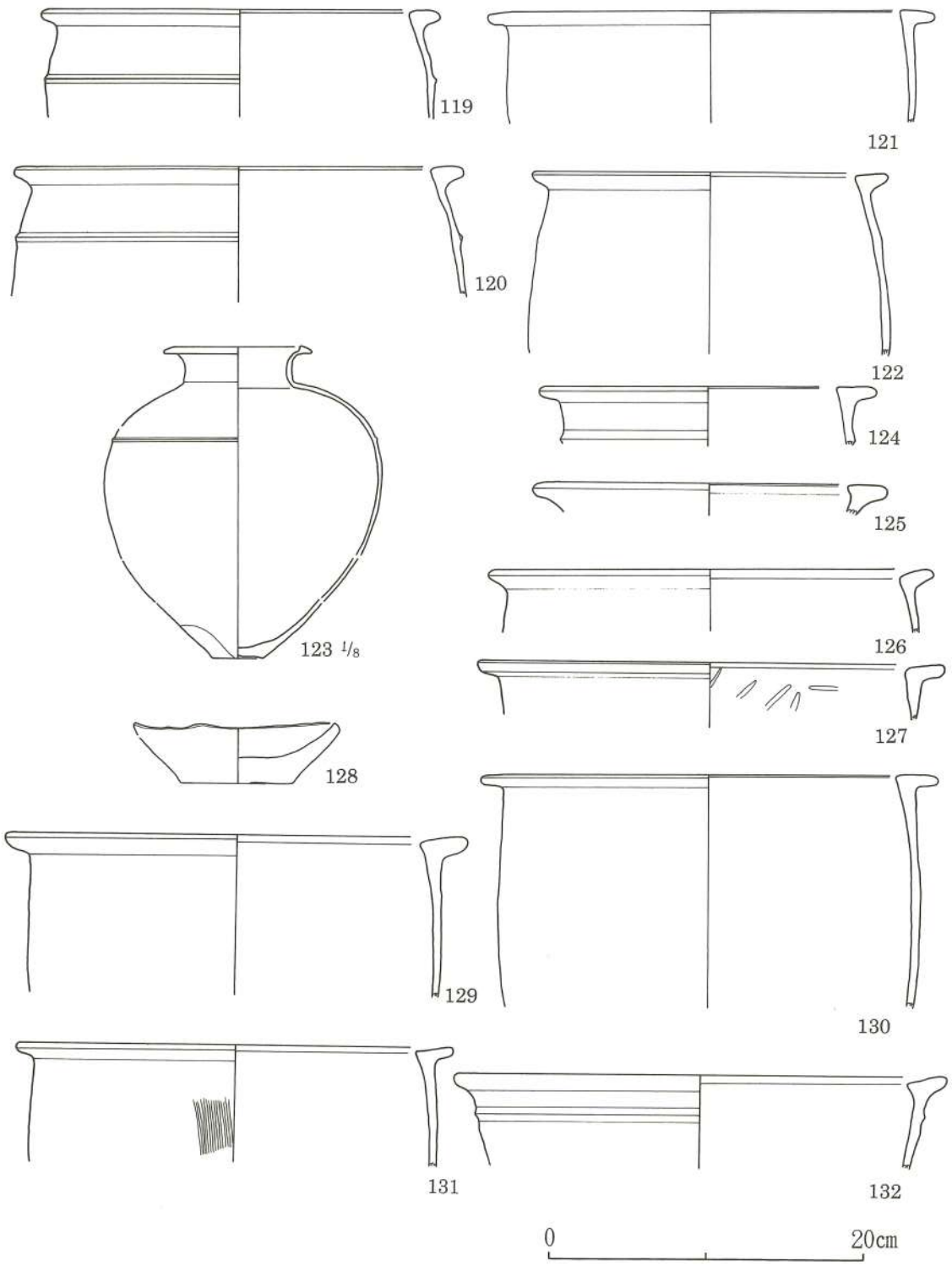


Fig.28　船石遺跡10区出土遺物実測図(4)（1／4）

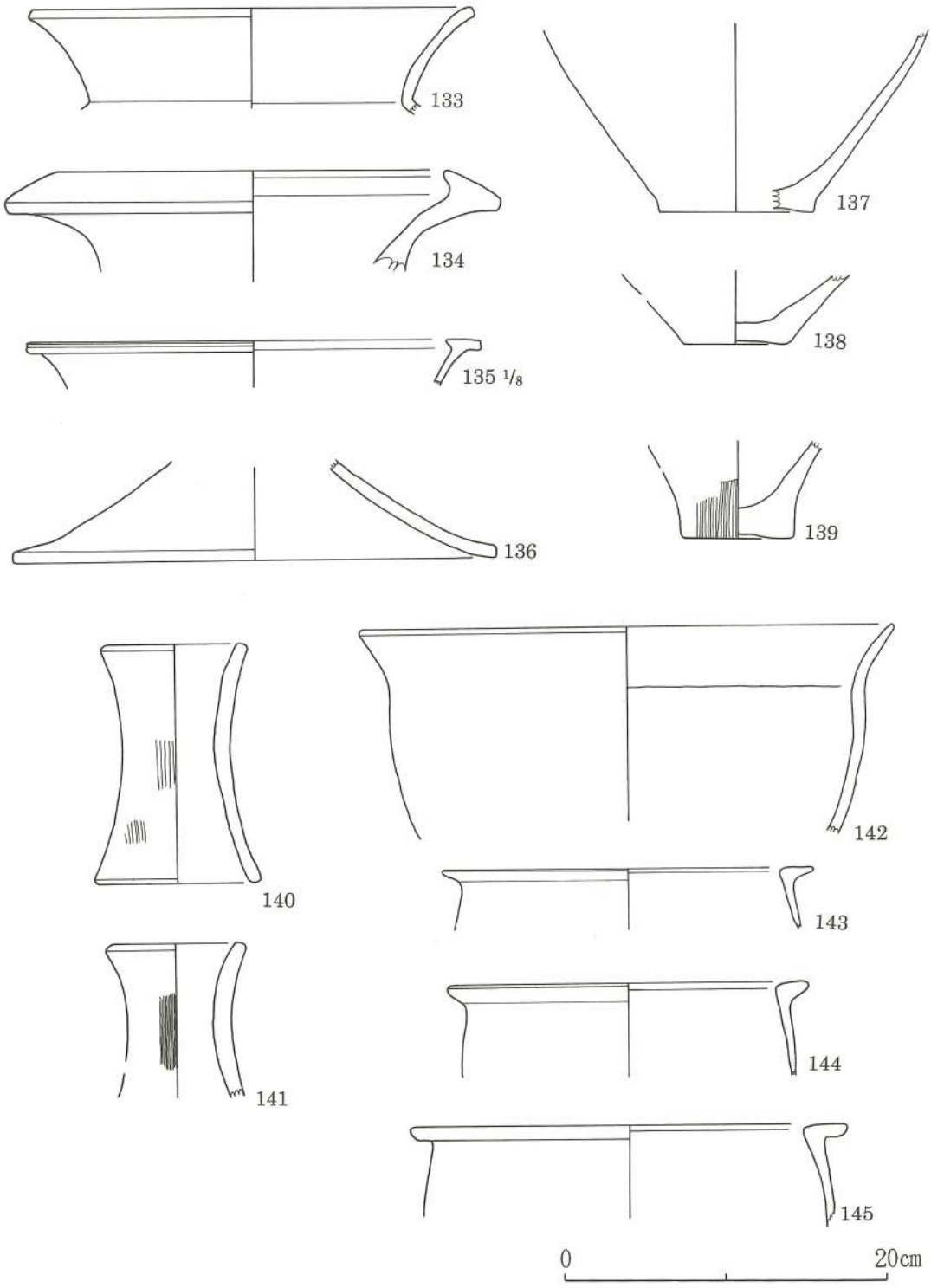


Fig.29　船石遺跡10区出土遺物実測図(5)（1/4）

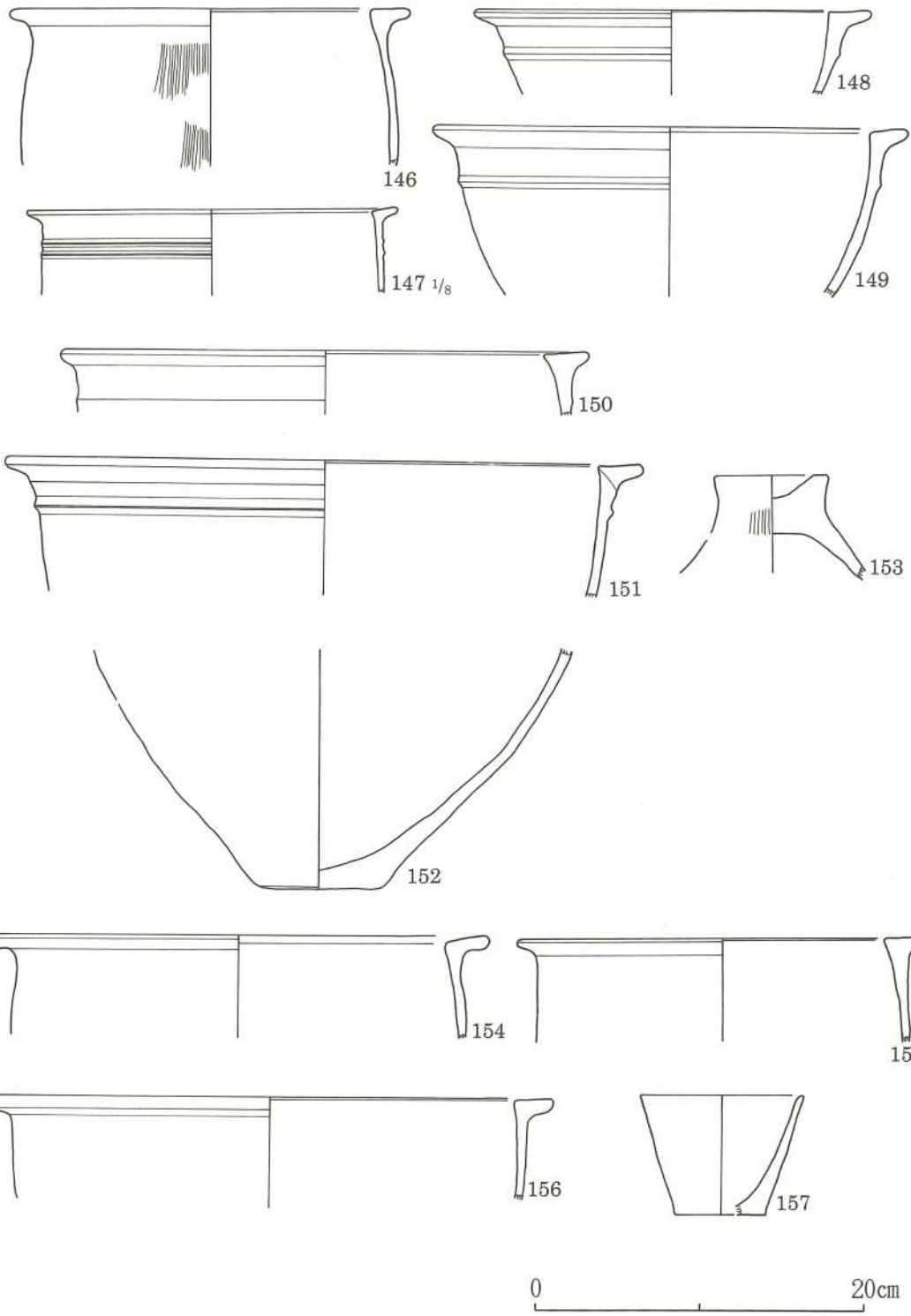


Fig.30　船石遺跡10区出土遺物実測図(6)（1／4）

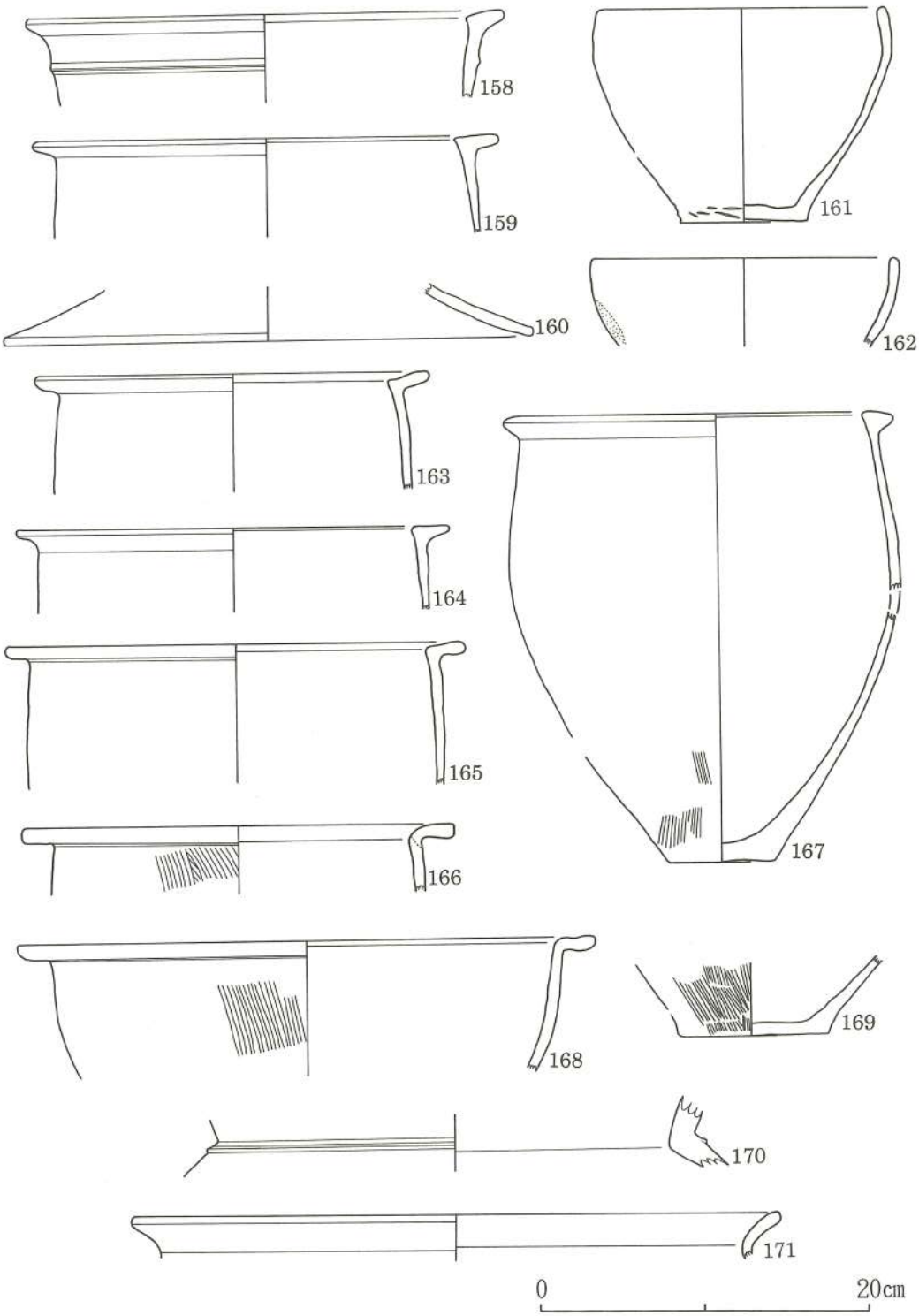


Fig.31　船石遺跡10区出土遺物実測図(7)（1／4）

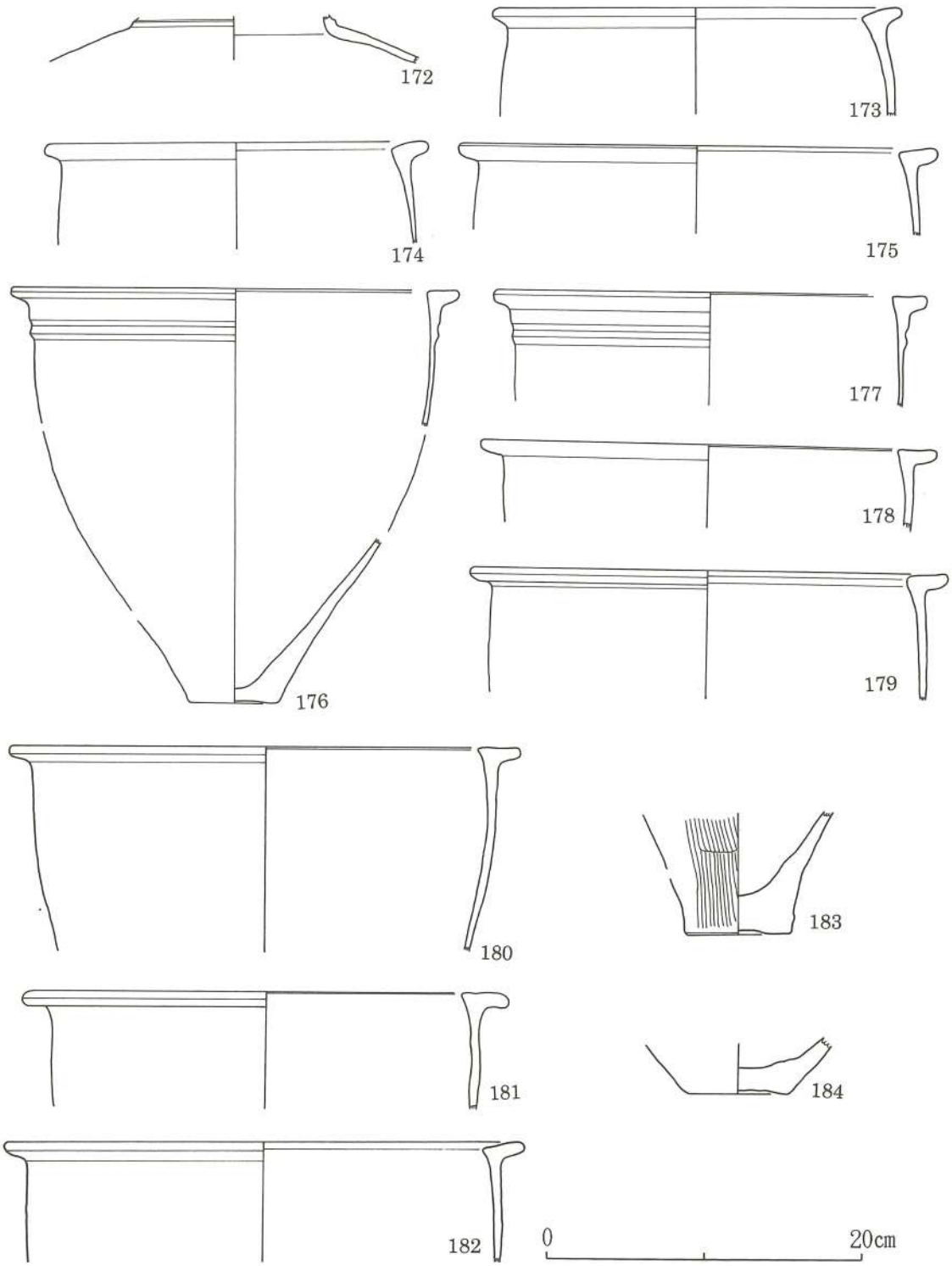


Fig.32　船石遺跡10区出土遺物実測図(8)（1／4）

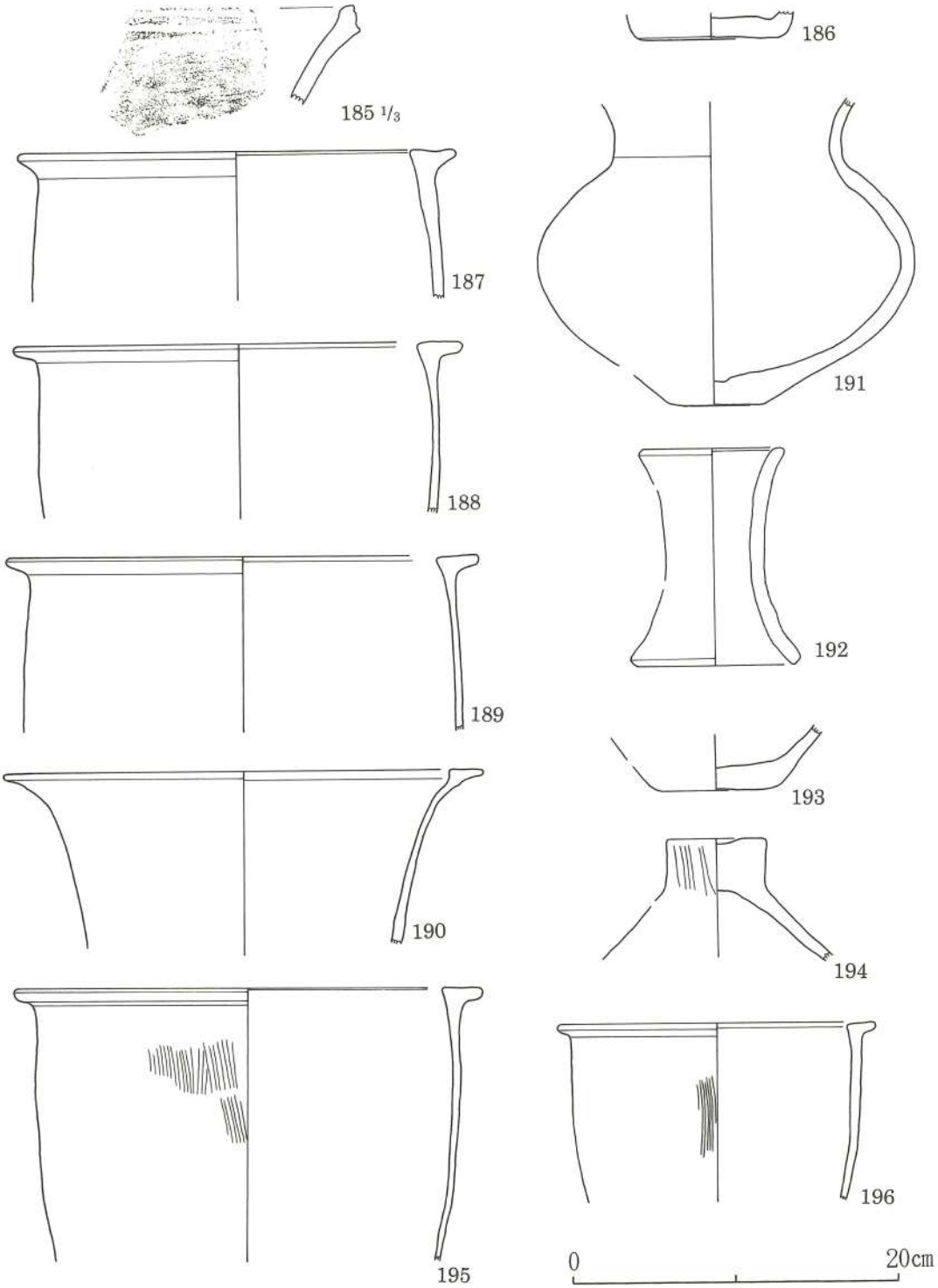


Fig.33　船石遺跡10区出土遺物実測図(9)（1／4）

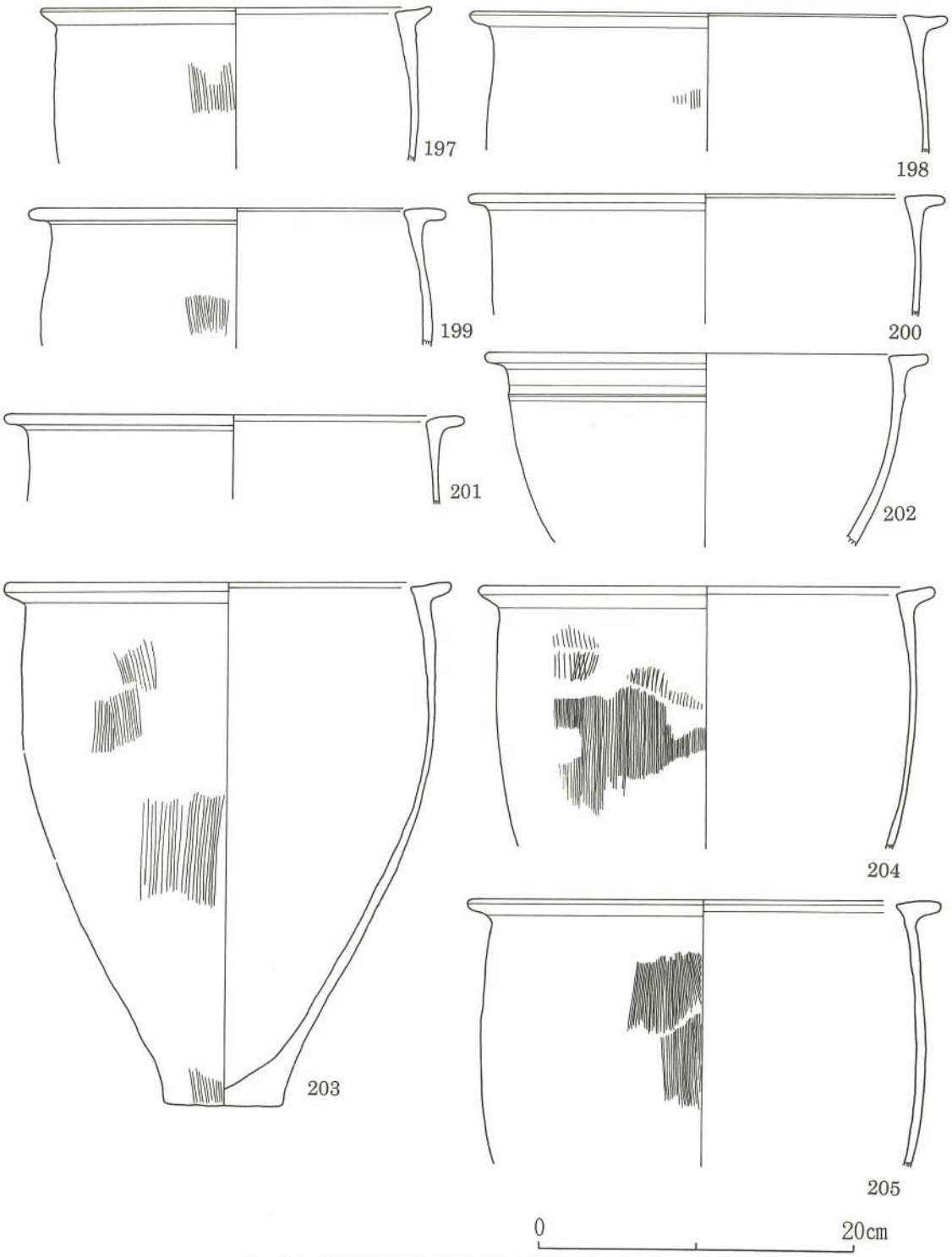


Fig.34　船石遺跡10区出土遺物実測図(10)（1／4）

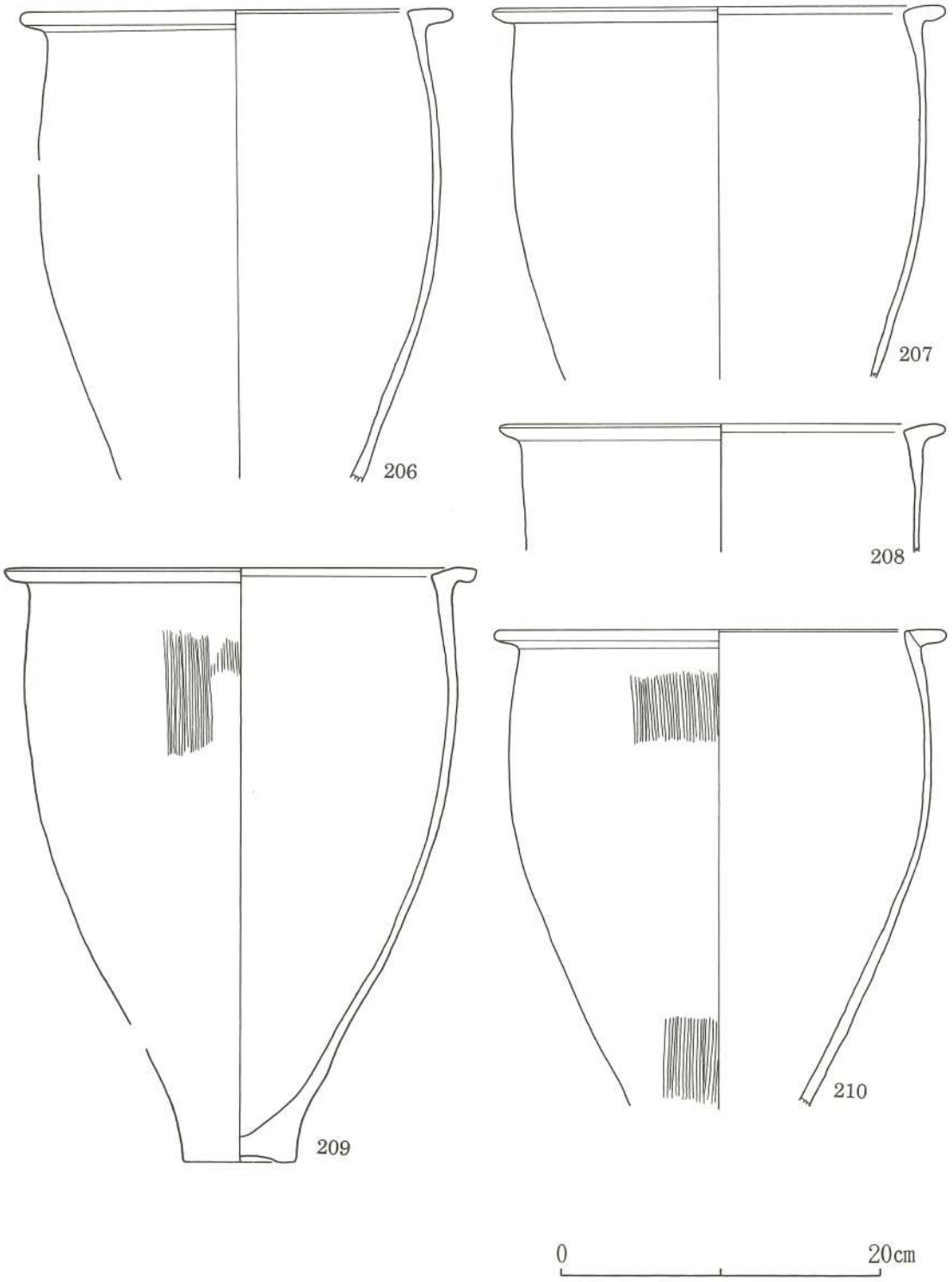


Fig.35　船石遺跡10区出土遺物実測図(11)（1／4）

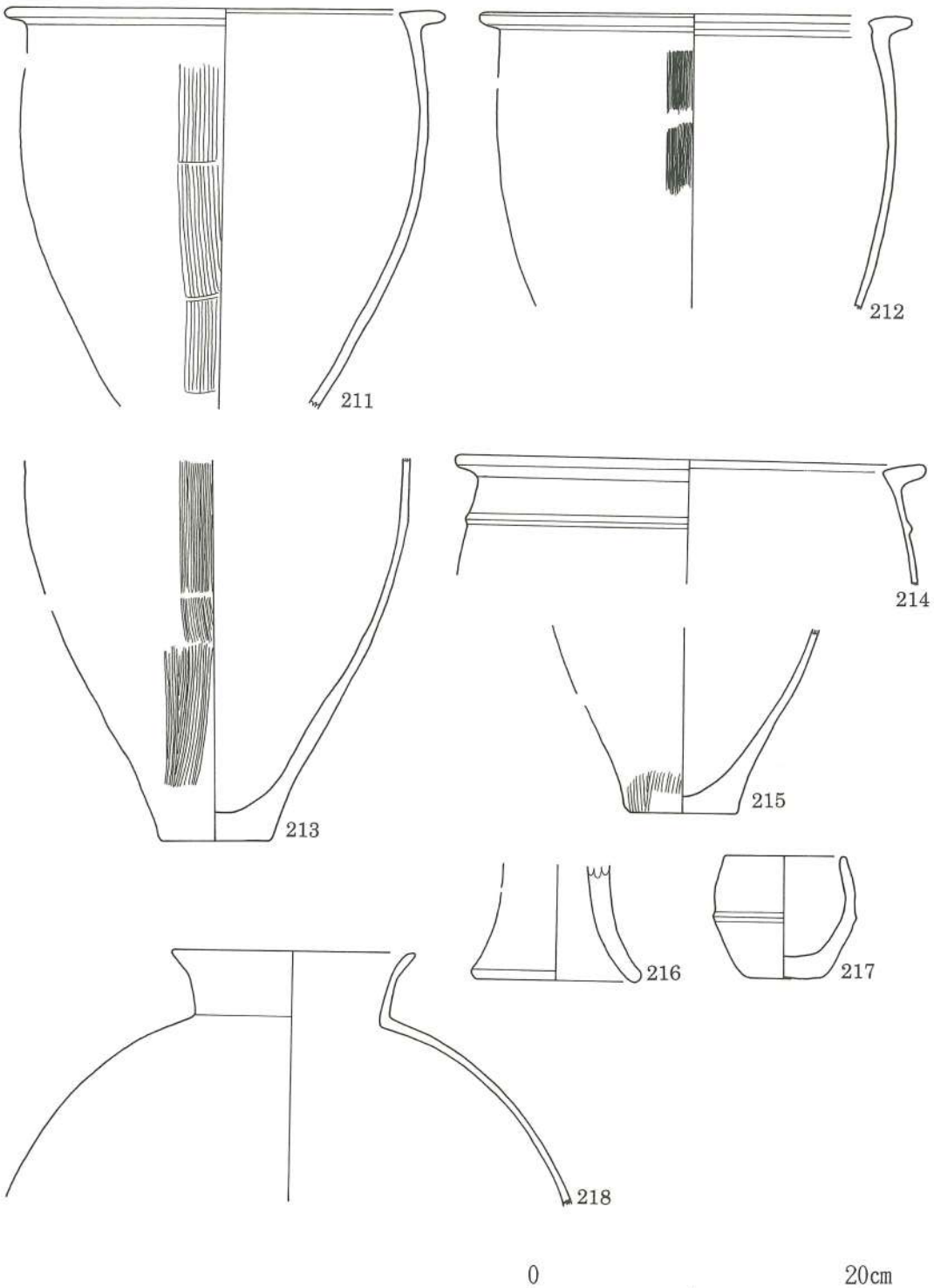


Fig.36　船石遺跡10区出土遺物実測図(12)（1/4）

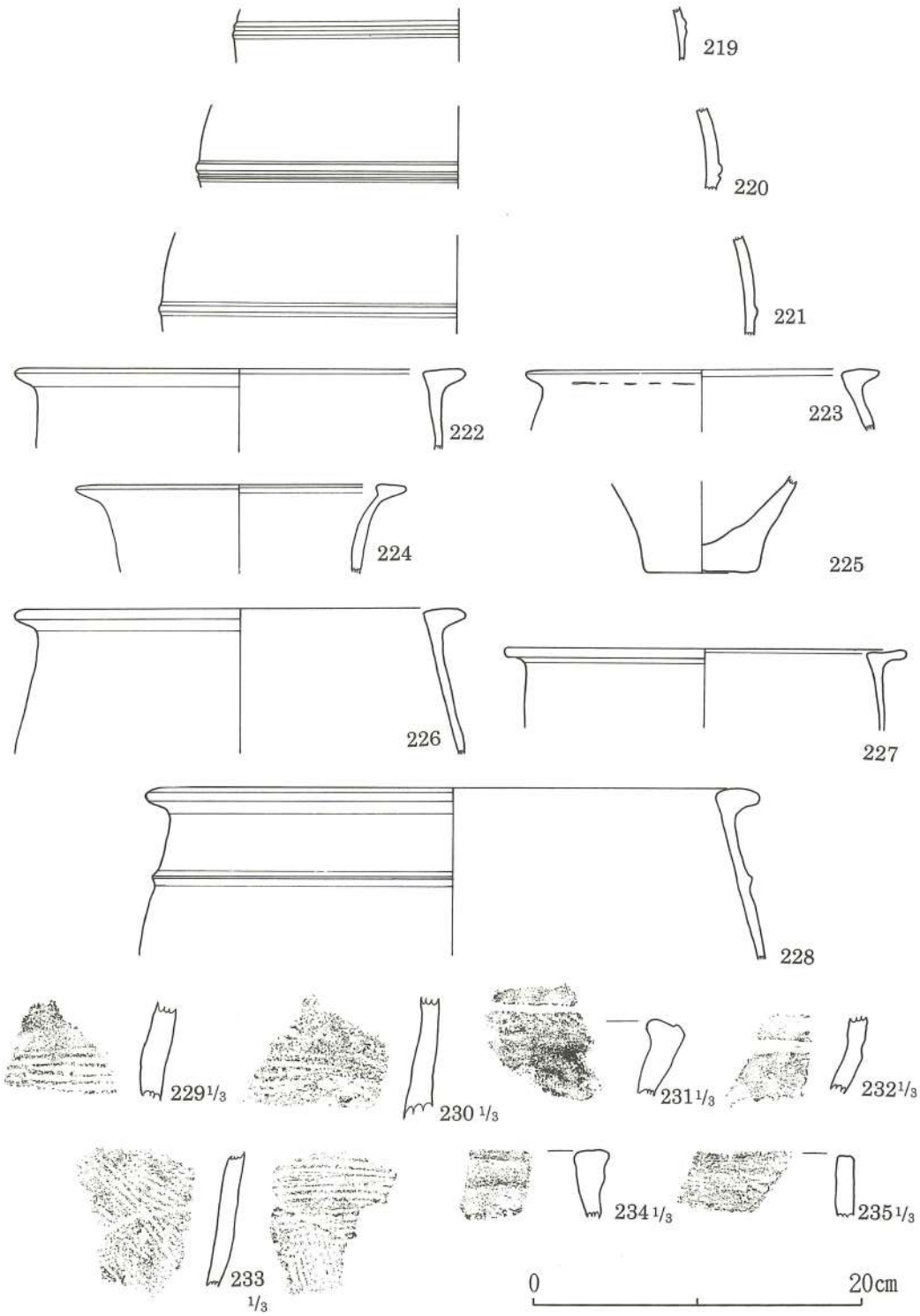


Fig.37　船石遺跡10区出土遺物実測図(13)（1／4）

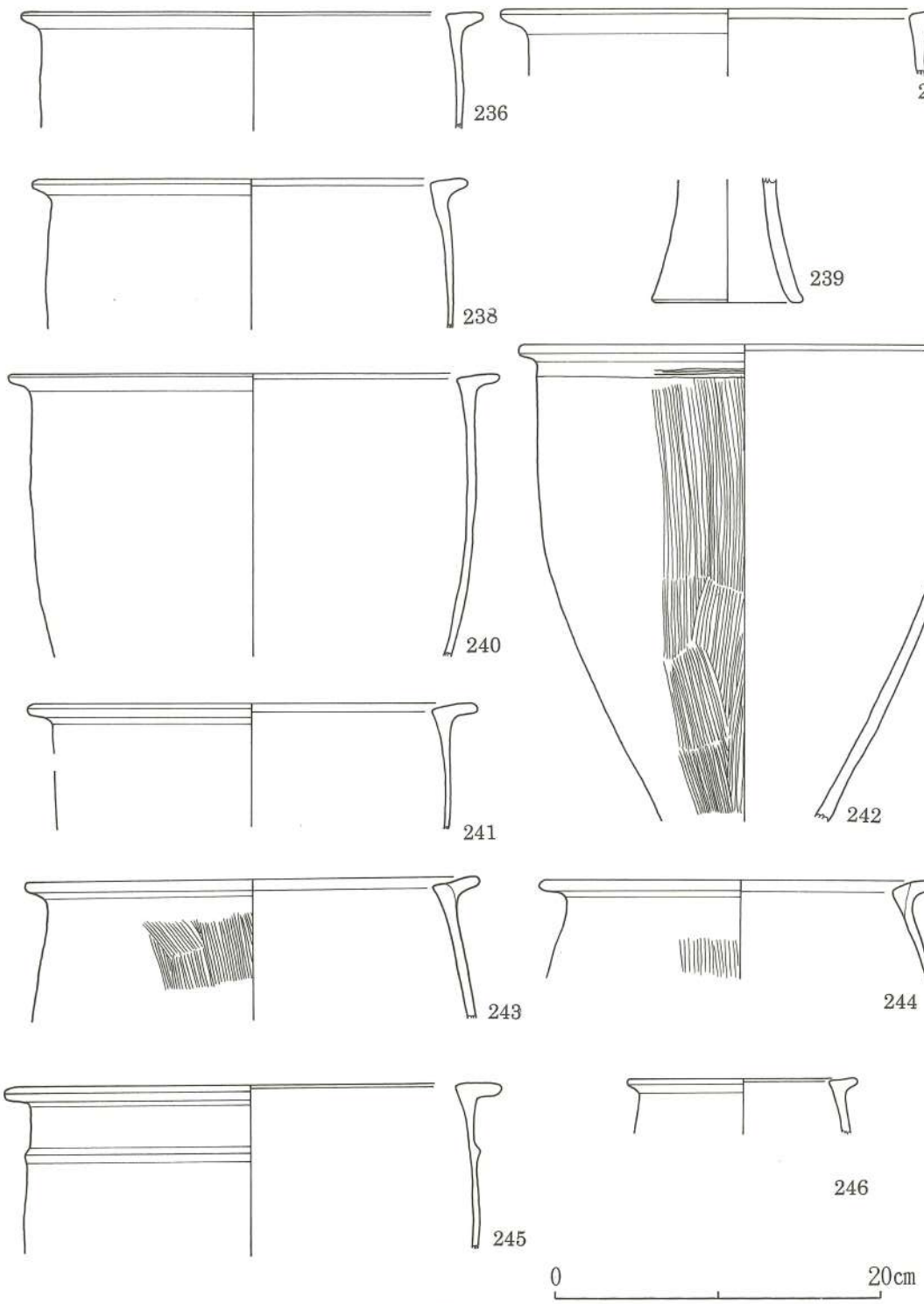


Fig.38　船石遺跡10区出土遺物実測図(14)（1／4）

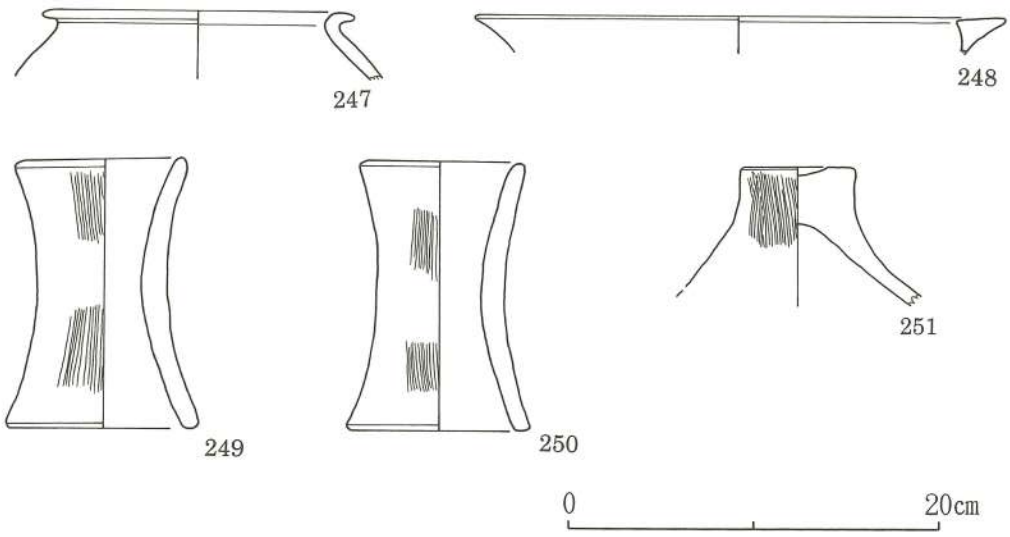


Fig.39　船石遺跡10区出土遺物実測図(15)（1／4）

Ⅳ. ま　と　め

今回の船石遺跡８区及び９・10区の調査を通じての成果、所見、雑感などを列記し、まとめとしたい。

縄文時代の遺構・遺物について

今回の調査で、昭和62年度調査に引き続き、縄文時代の遺構、遺物がまとまって出土した。とくに10区で検出された縄文時代後期の竪穴式住居址SH-026は、町内では初の調査例となった。住居とはいえ、地面を掘りくぼめただけで、しっかりした柱穴ももたず、上屋はおそらく雨露をしのぐだけの天幕的な施設であったと考えられる。このような住居の存在は、拠点集落中心に季節によりある一定の地域内を移動していたとされる縄文人の世界観を髣髴とさせる。

また、この住居址からは石棒が磨り石や石皿とともに出土したが、この石棒の用途は不明である。これについては、用途を示唆するような類例、調査例が手元にない現時点では判断できないので、今後の調査例の増加を期待したい。

弥生時代の遺構・遺物について

今回の９・10区の調査において、弥生時代中期前半から中ごろに及ぶ竪穴式住居址が検出されたが、その分布は調査区の南部に限られていた。調査区の北部ではこの時期の住居址はまったく見られず、土壙などの遺構の数も激減する。このようなことから、この区域における船石遺跡の弥生時代中期の集落の北限がこの辺りにあったものと推測されよう。

船石遺跡10区北部の黒色土堆積部分について

本文中のFig. 7の遺構配置図にスクリーンで図示したが、10区の調査区北限に近い部分に黒色土の自然堆積層が検出された。そこで、この土層の堆積状況、遺物などの包含状況、それにこの黒色土層の下部における遺構の有無を確認するために、調査区のグリッドにあわせてトレンチを設定し、調査を行った。その結果、この黒色土層は地山の低い部分に堆積していたこと、遺物などをほとんど含まないことが判明し、あわせて遺構も検出されなかった。そこでこの黒色土堆積部分については、黒色土層の下部で検出された地山面が深く圃場基盤造成工事の影響が及ばないことが確認できたため、トレンチによる調査にとどめ、あえて面的な発掘調査を実施せず現状保存を行ったことを付記しておく。

図　　版

船石遺跡８区全景　―写真上方が北―

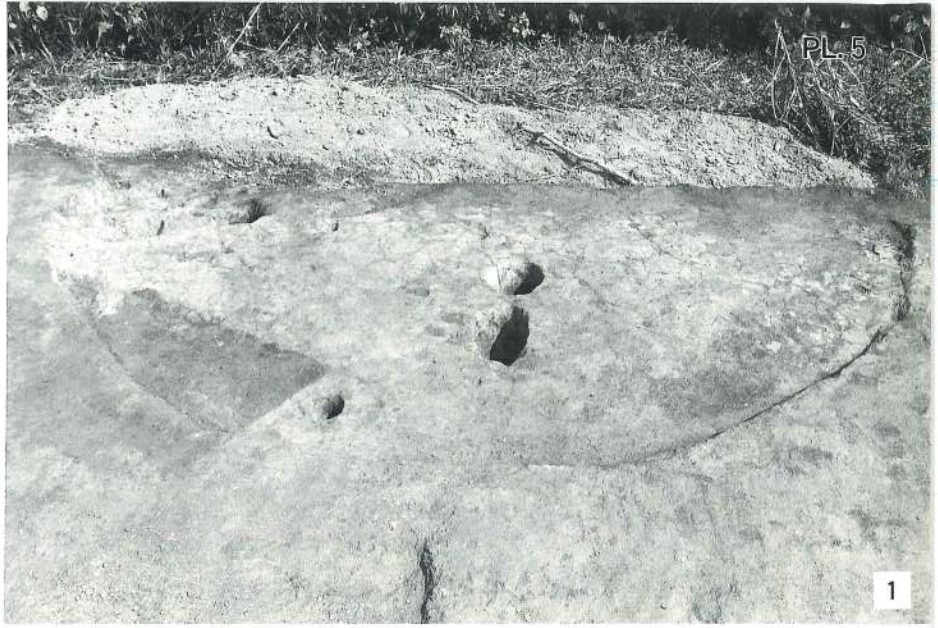
船石遺跡９・10区全景　―写真上方が北―

船石遺跡９・10区竪穴式住居址集中部分　―写真上方が北―

1　SH-801（南より）

2　SH-807（南より）

3　SB-810（南西より）



1

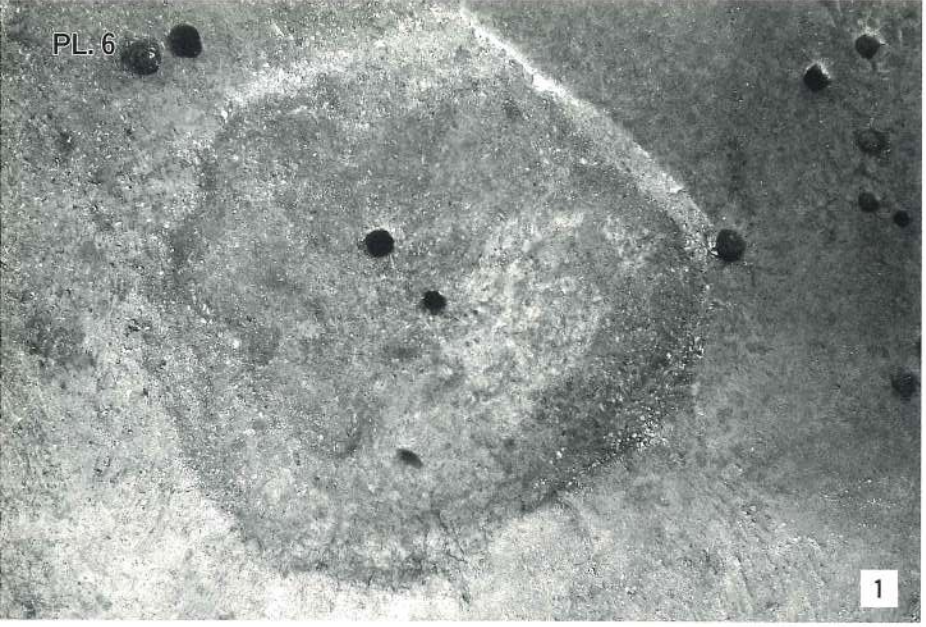
2

3

1　SH-925（西より）

2　SH-926（南西より）

3　SH-026（南より）



1　SH-026（南より）

2　SH-031（北東より）

3　SH-032（北東より）

1

2

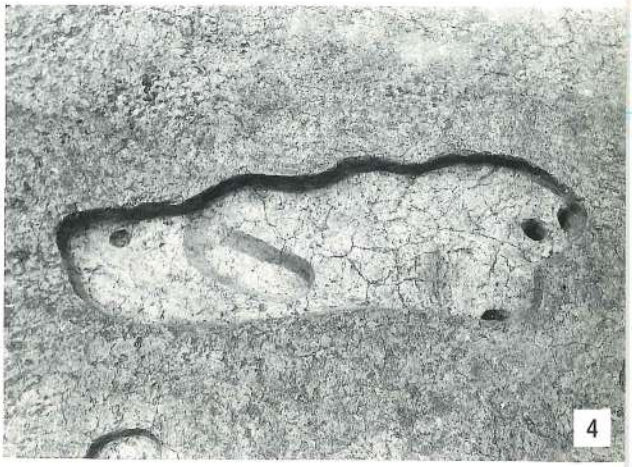
3

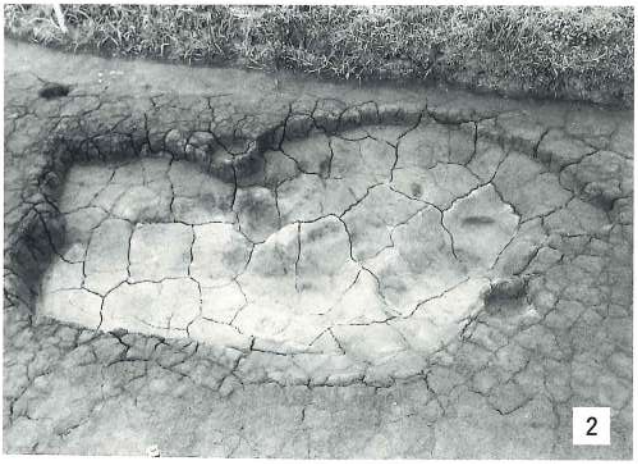
1　SH-033（南東より）

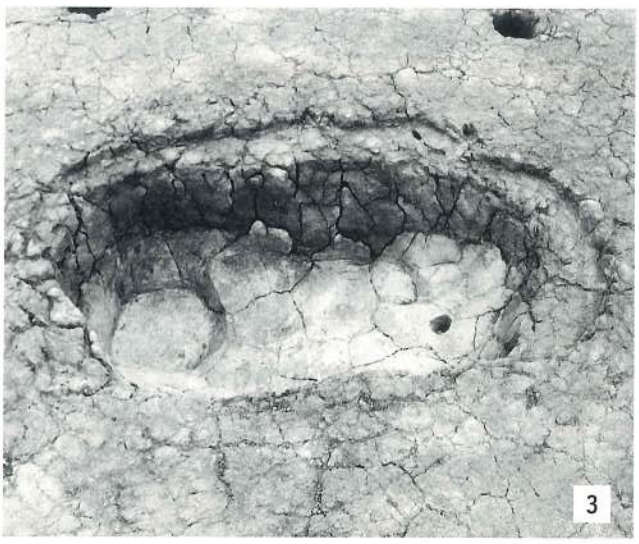
2　SH-042（北より）

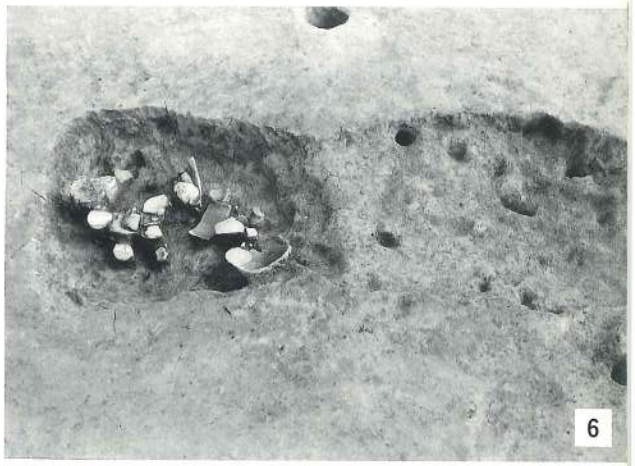
3　SH-043（南東より）

1　SH-044A・B
　　（北東より）
2　SH-045（北東より）
3　SH-054（北東より）









1　SK-802（西より）

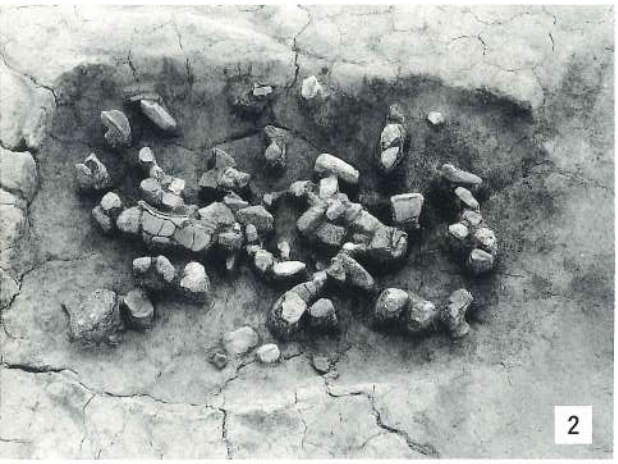
2　SK-803（東より）

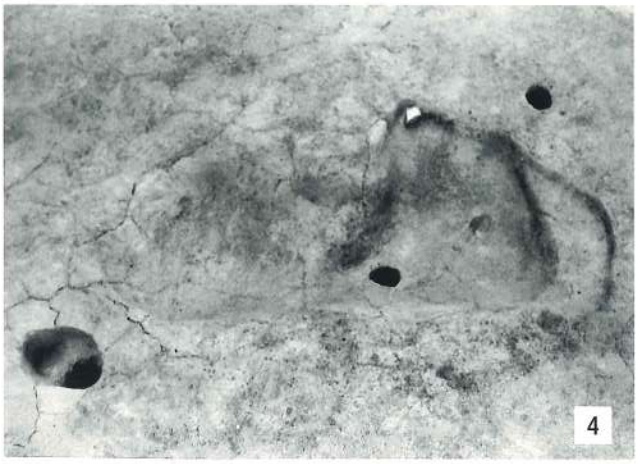
3　SK-804（南西より）

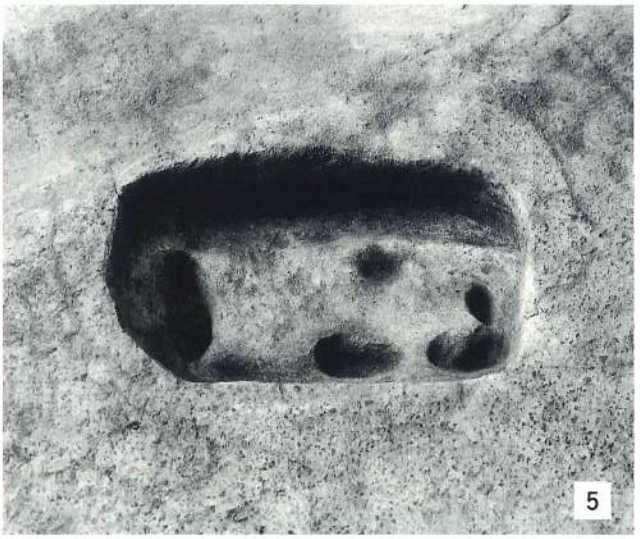
4　SK-808（東より）

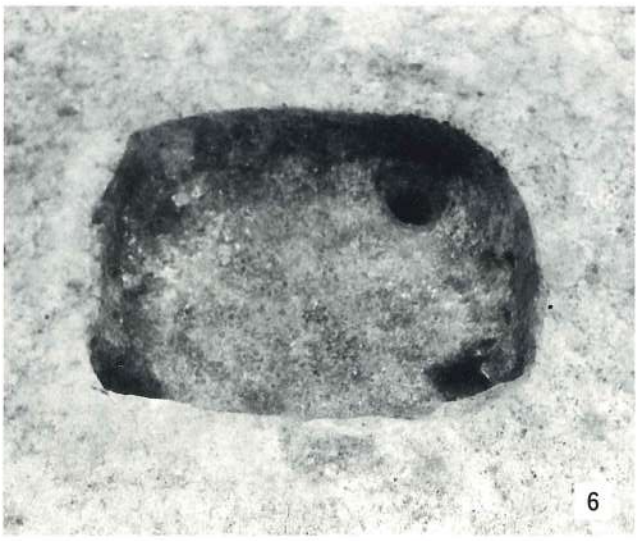
5　SK-910（南西より）

6　SK-912（南西より）

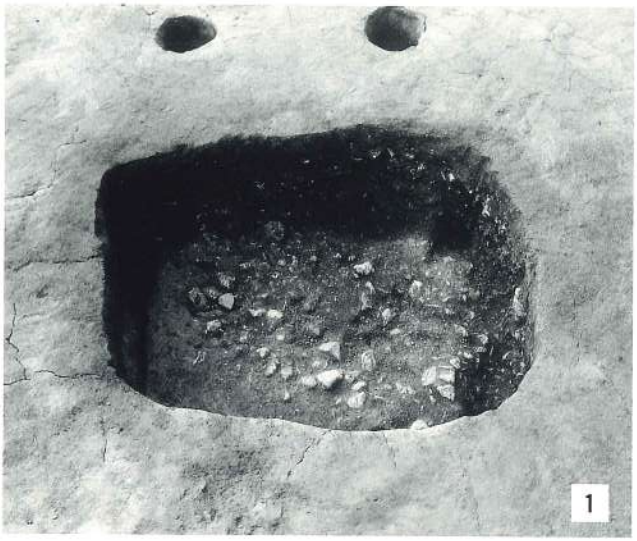


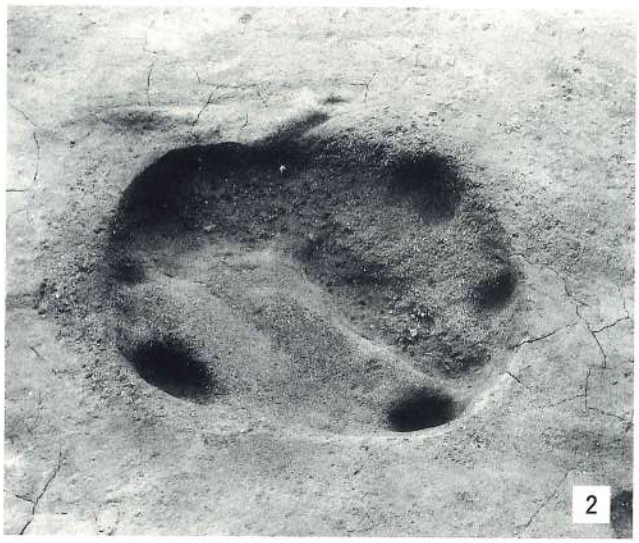


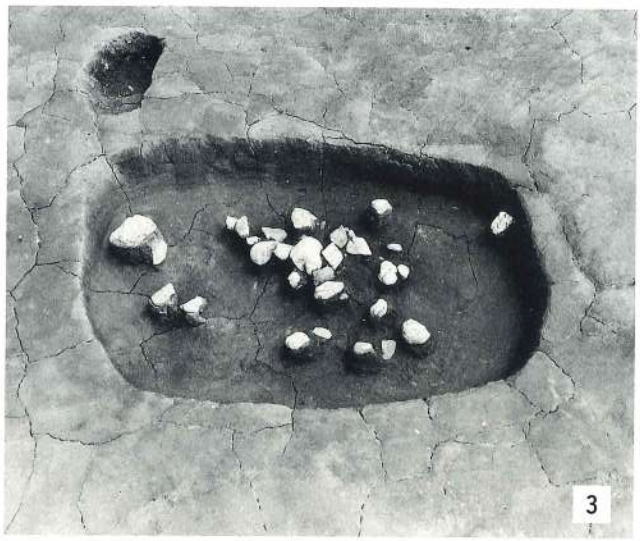


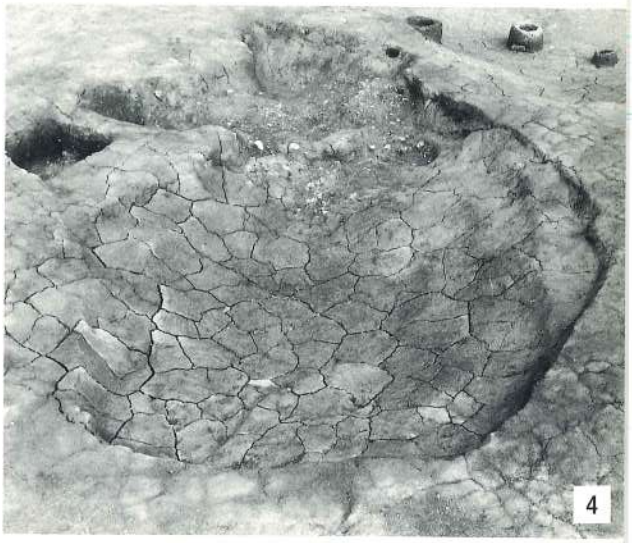


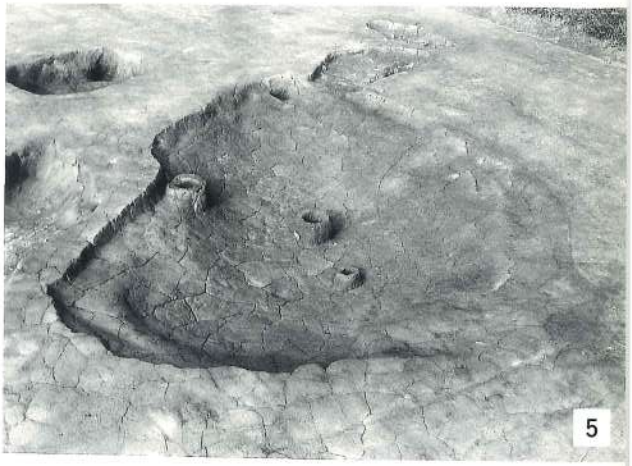
1　SK-913（南西より）
2　SK-918（北西より）
3　SK-922（南西より）
4　SK-001（北より）
5　SK-002（南東より）
6　SK-003（北より）











1　SK-004（南東より）

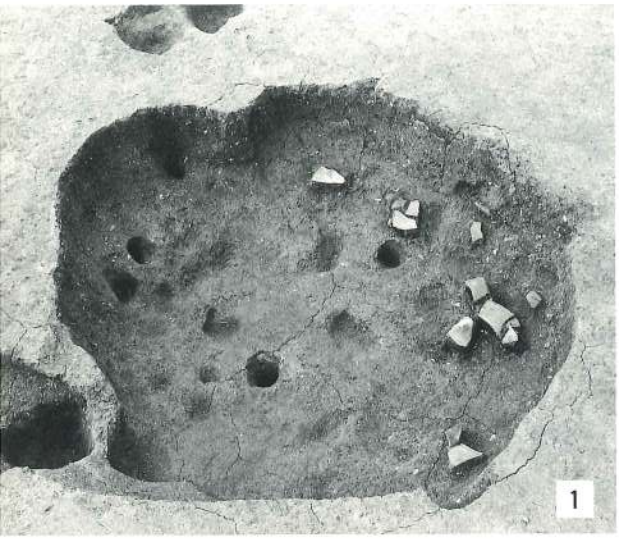
2　SK-007（東より）

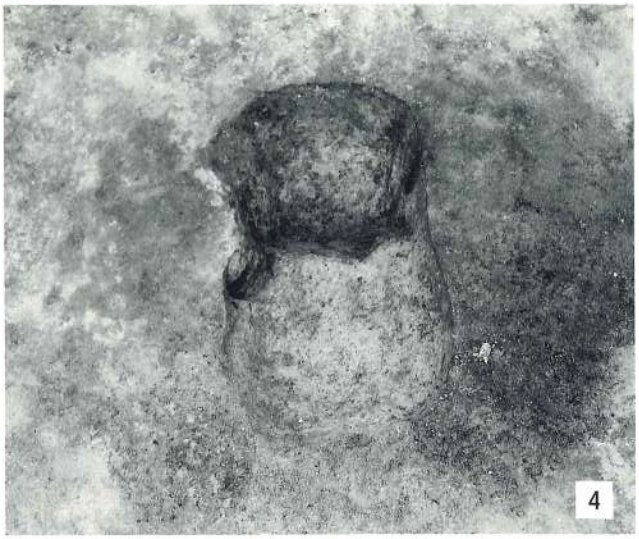
3　SK-008（北西より）

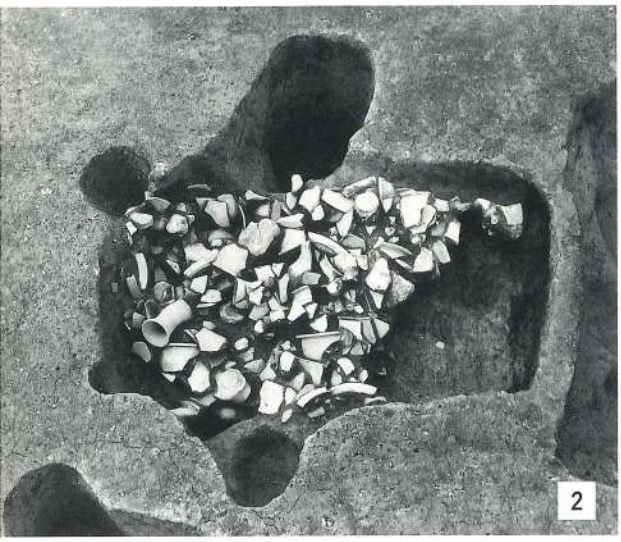
4　SK-010（西より）

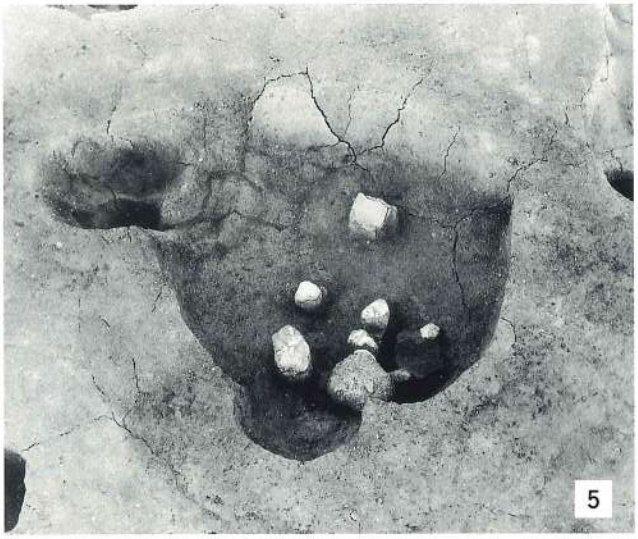
5　SK-011（南より）

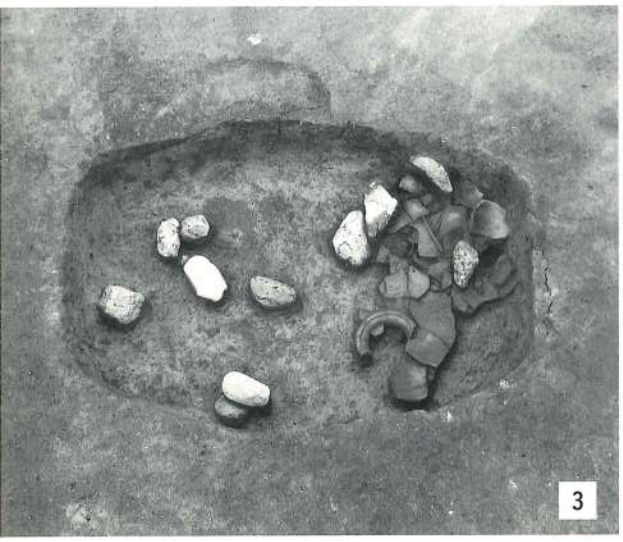
6　SK-022（南より）



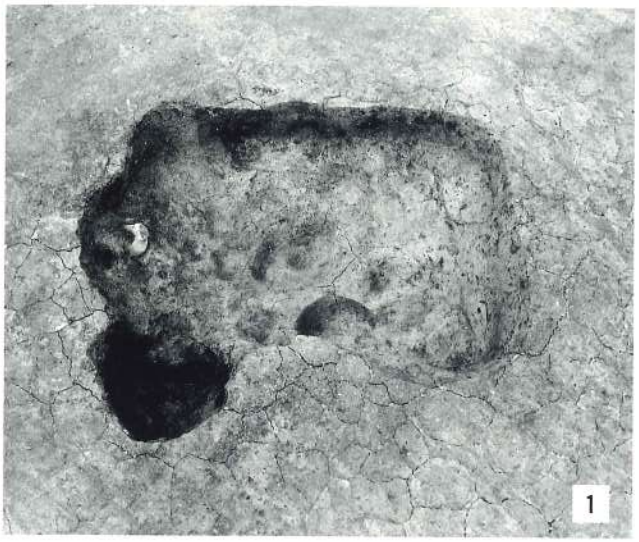


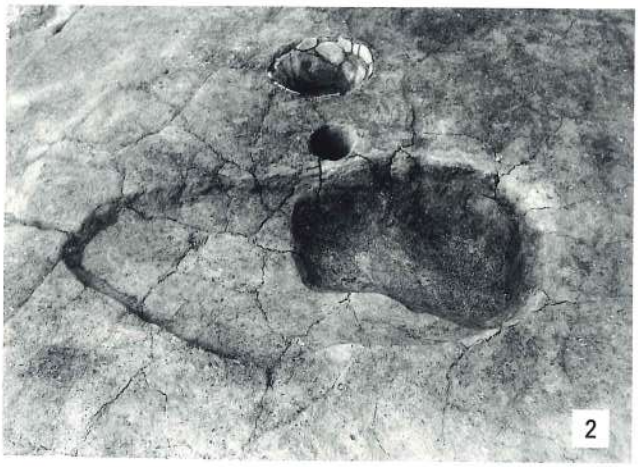


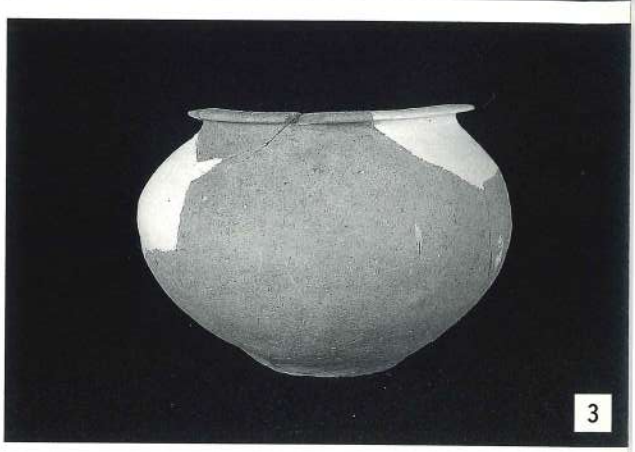


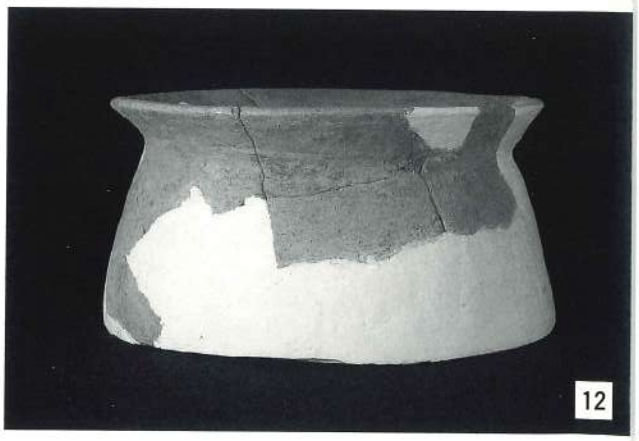


1　SK-028（南東より）
2　SK-029（南東より）
3　SK-030（南西より）
4　SK-034（南東より）
5　SK-037（南より）
6　SK-041（西より）



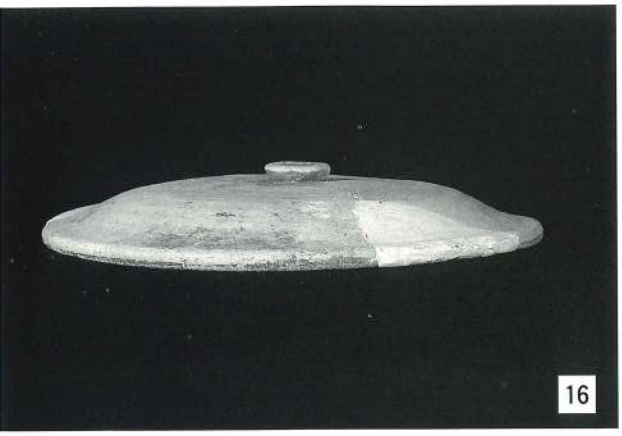






1　SK-056（南東より）

2　SK-079（南より）

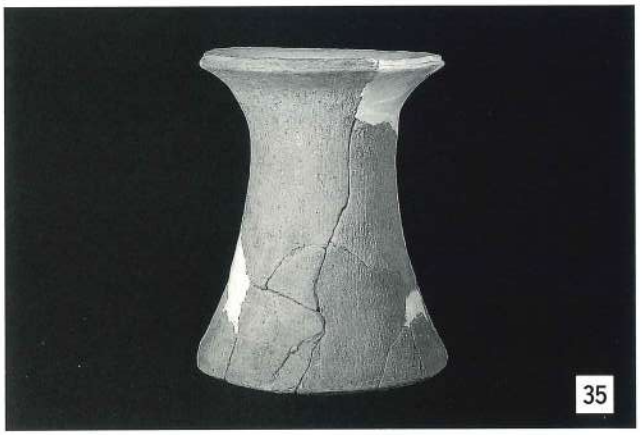

16

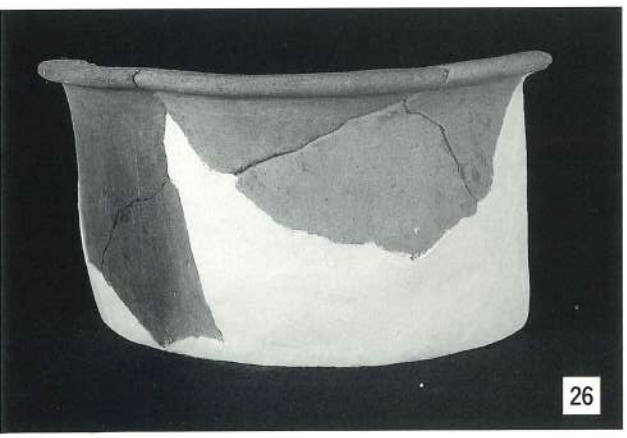
33

19

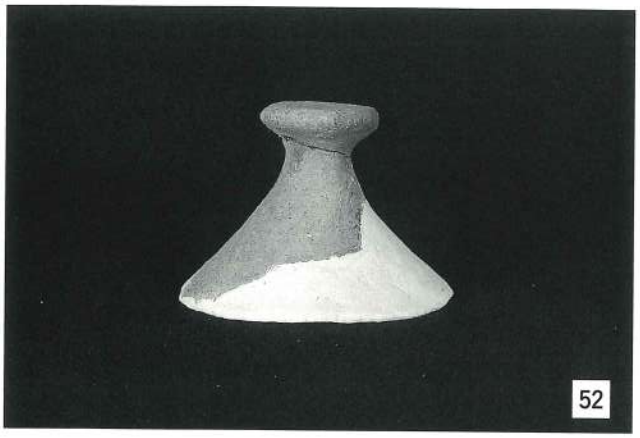
34

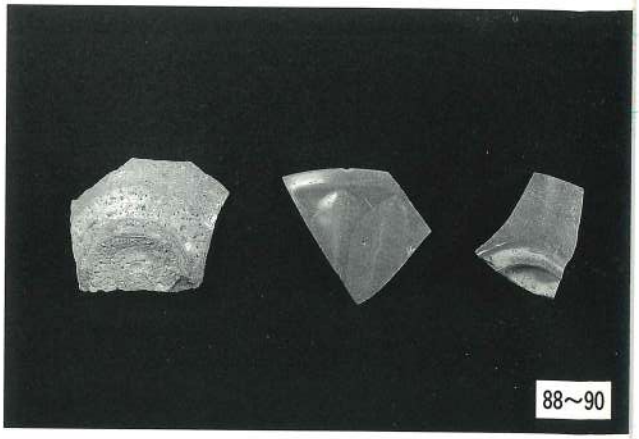
20


35

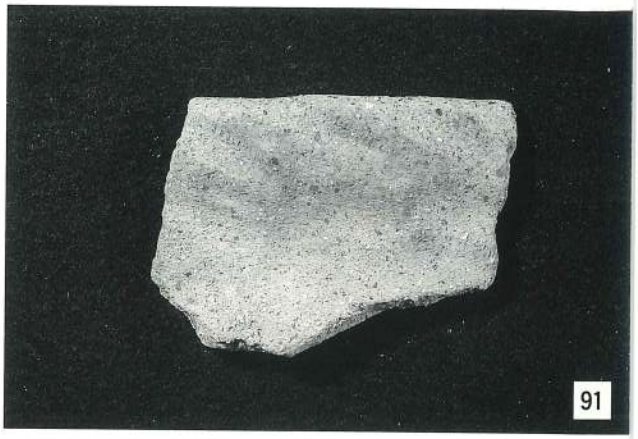

26

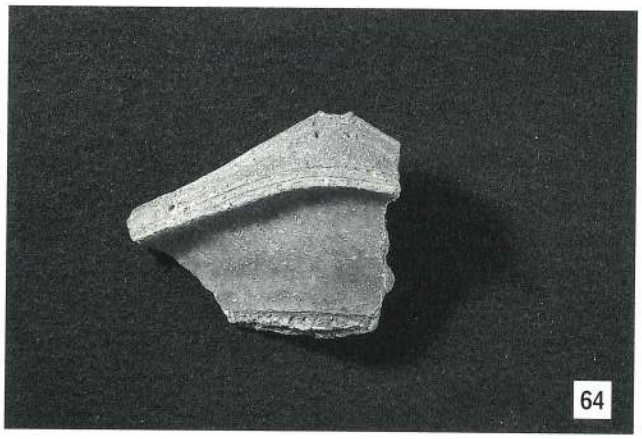
36


52

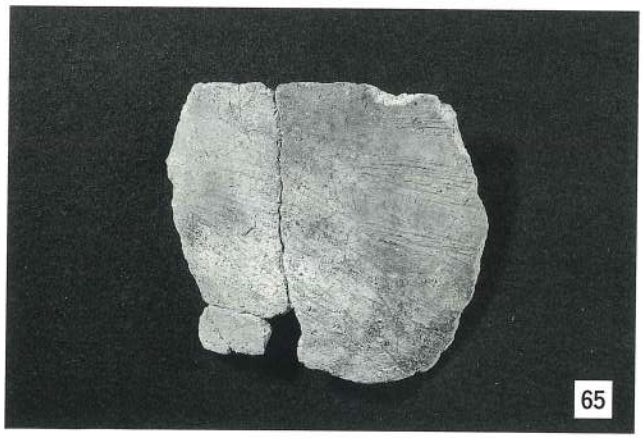

88～90

58


91

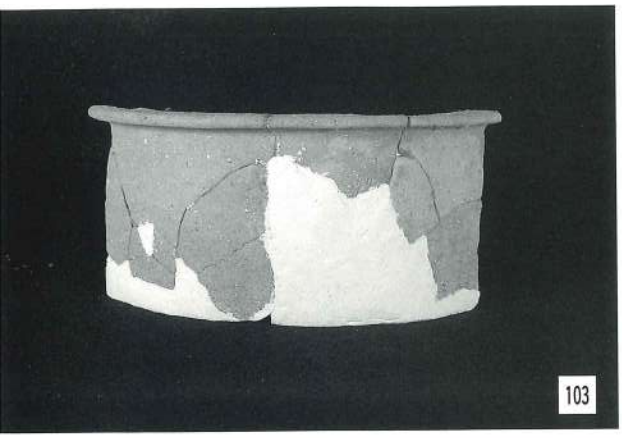

64

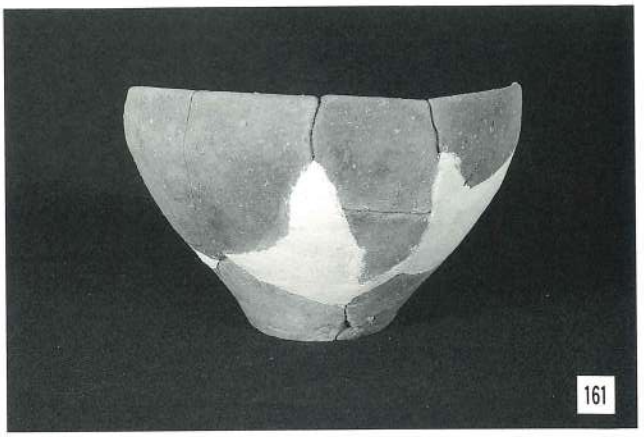
101

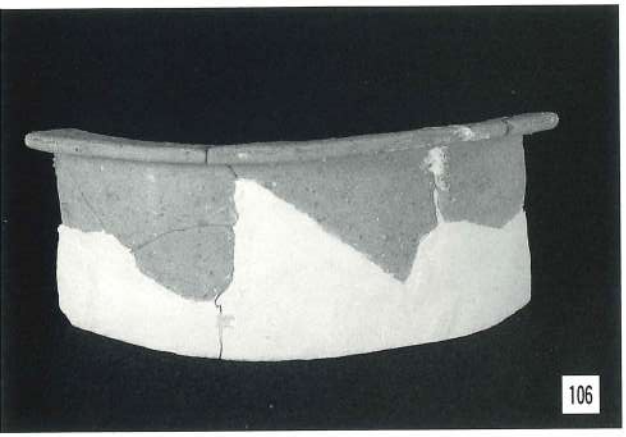

65

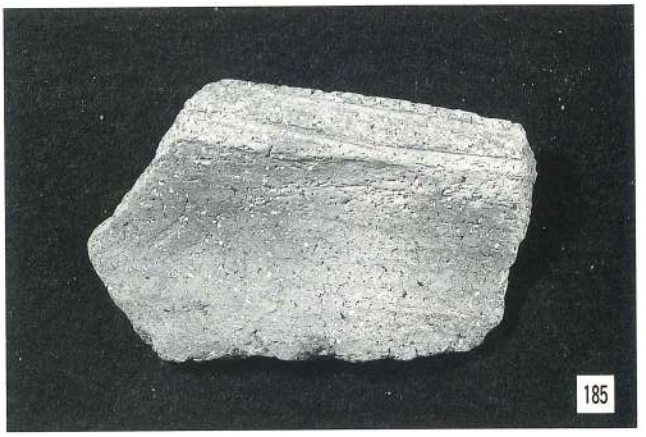
102

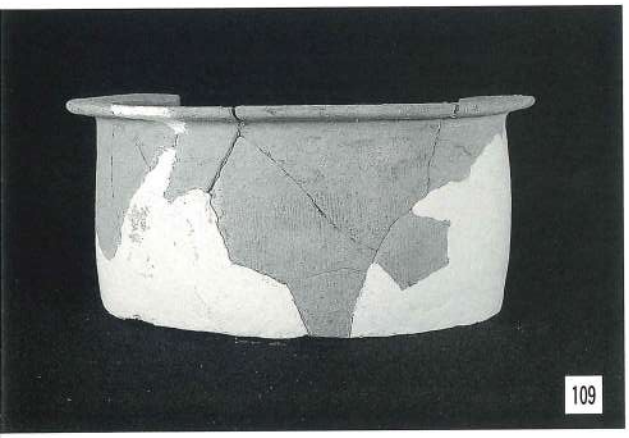
PL.16

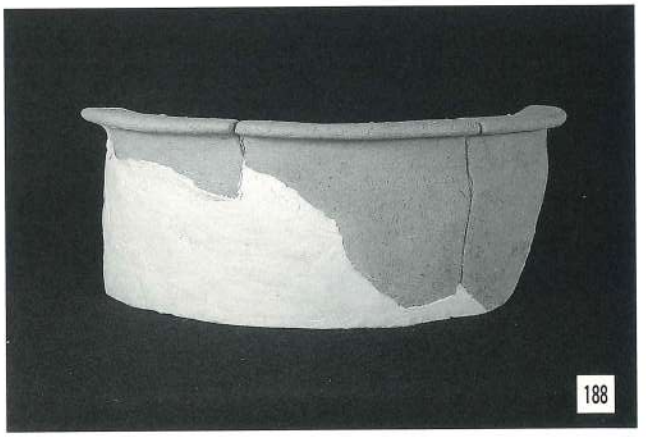

103

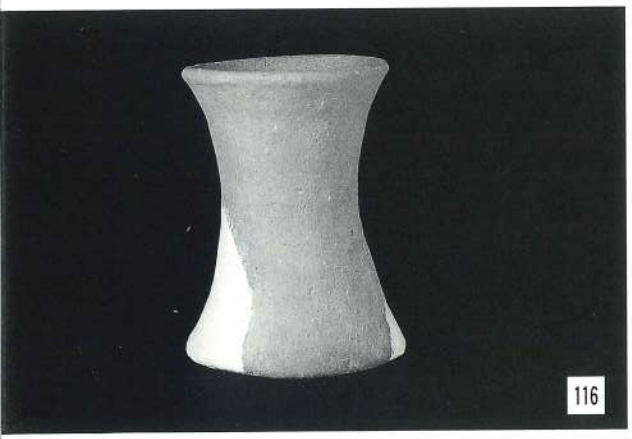

161

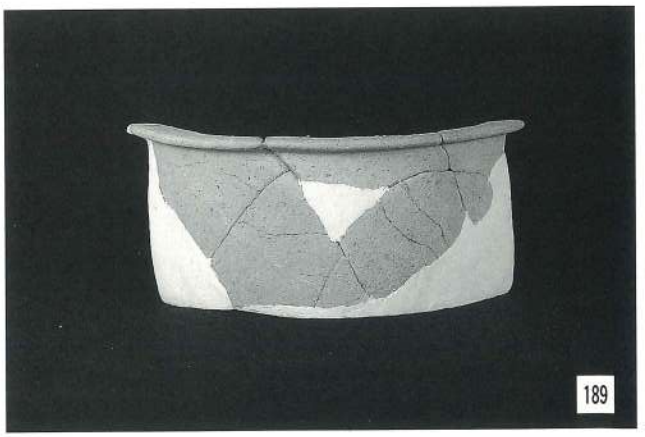

106


185


109


188

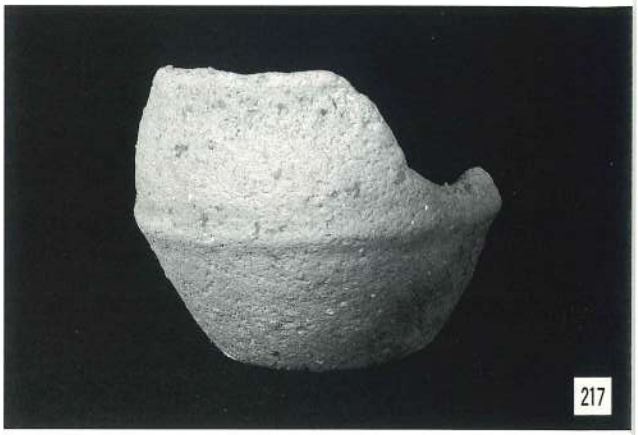

116

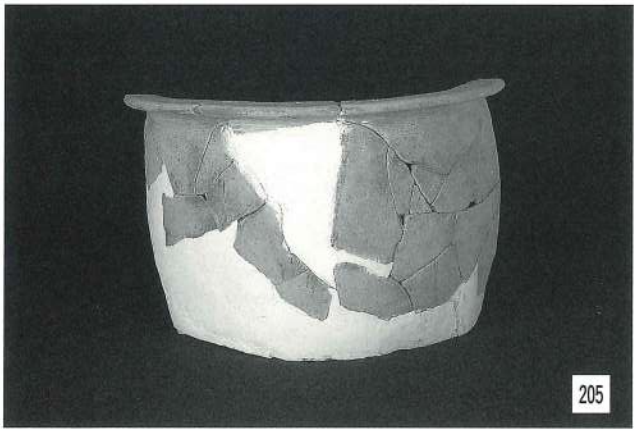

189

192

212

195

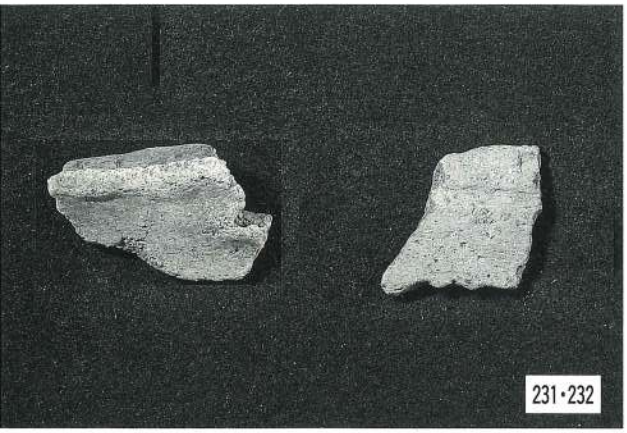

217

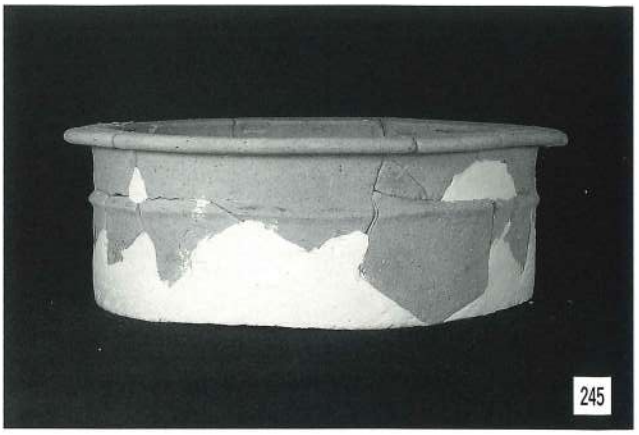

205

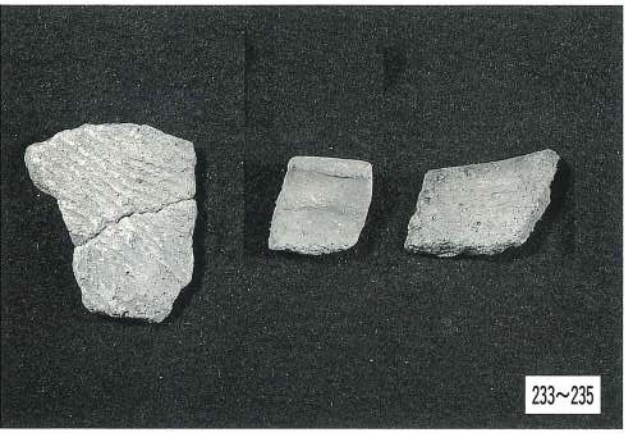
229

209

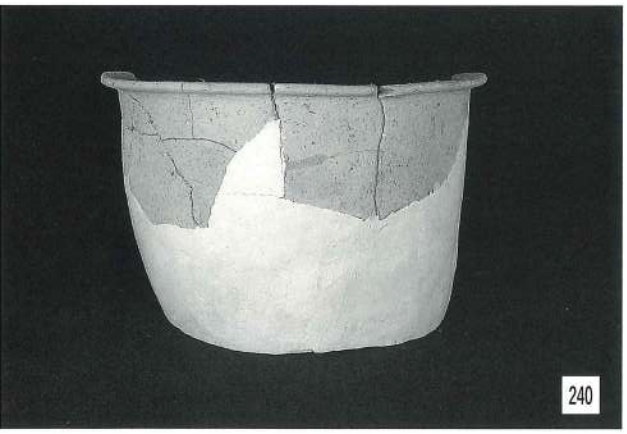
230


231・232

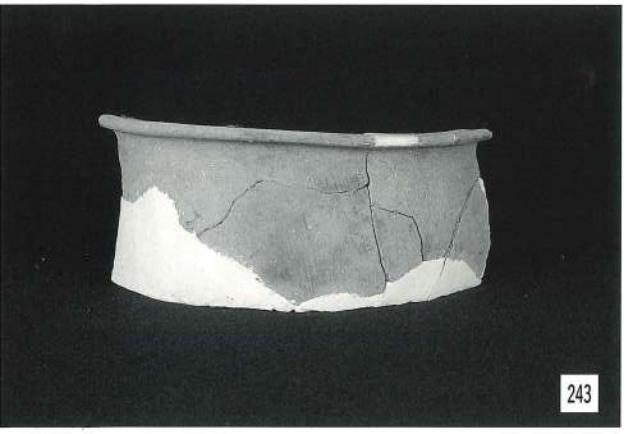

245

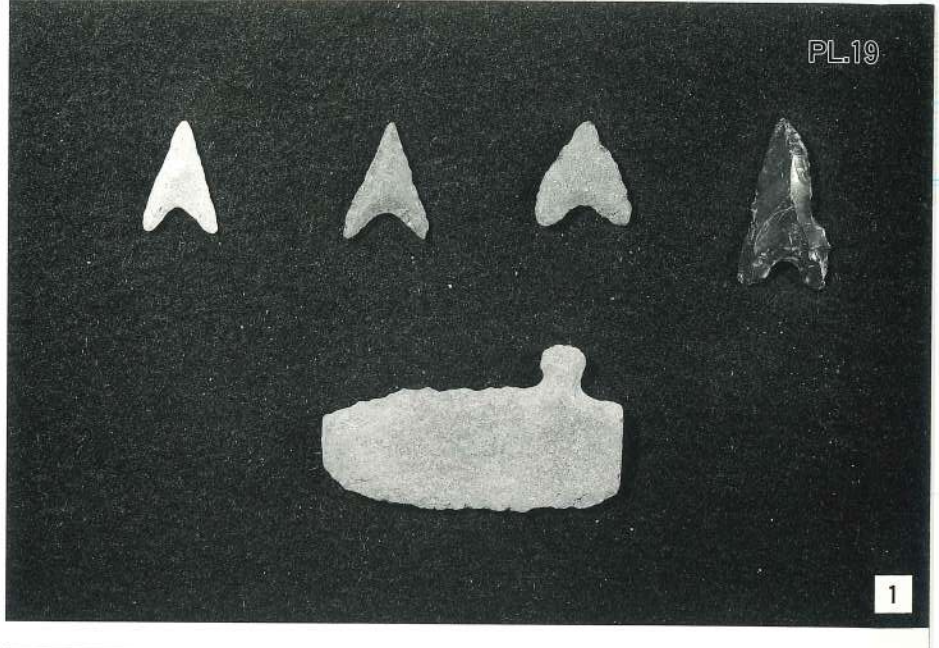

233～235

250

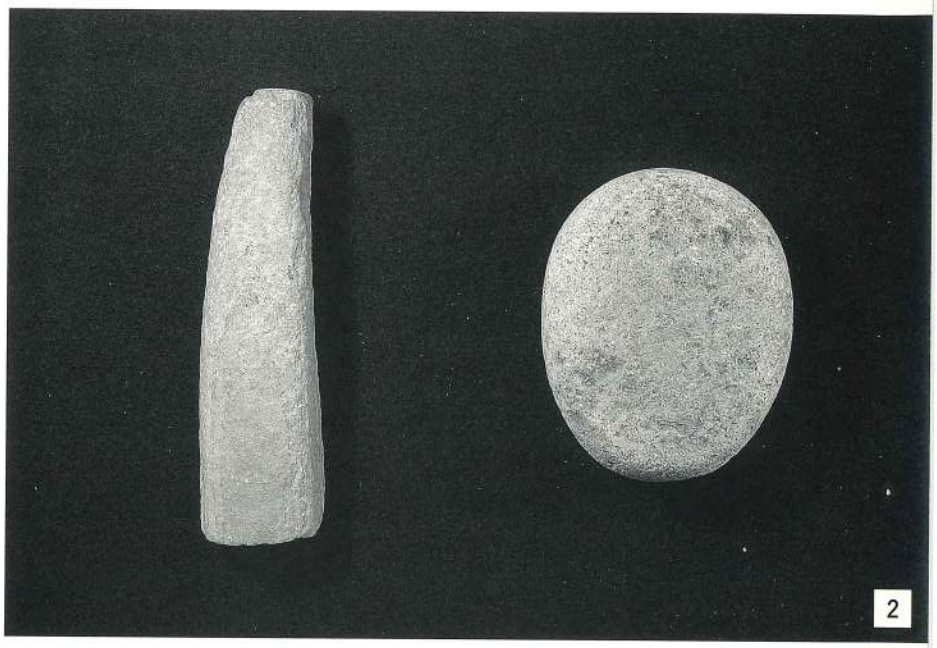

240

15

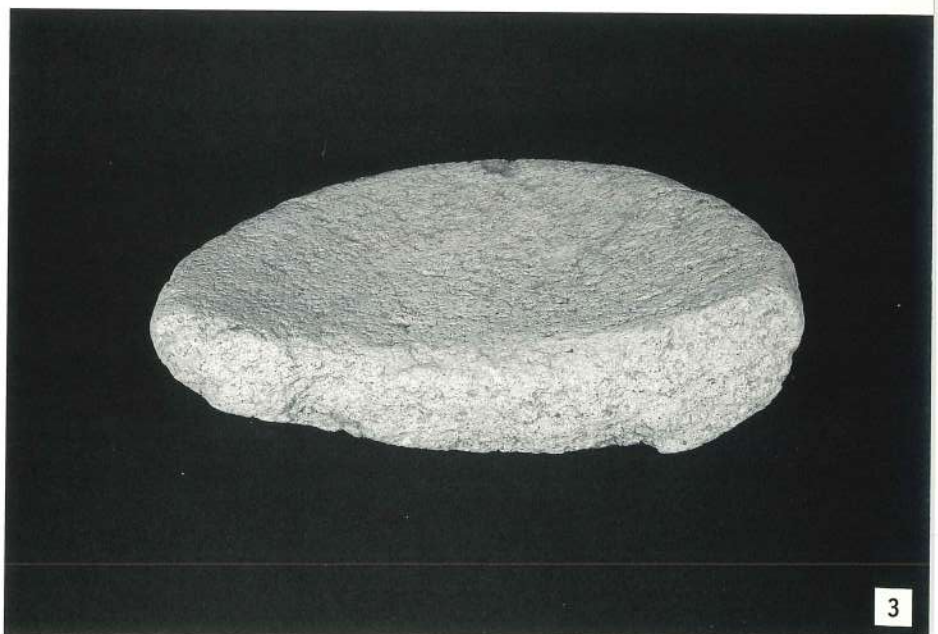

243



1



2



3

1　石鏃・石匙
　上）261・262・263・264
　下）265
2　石棒・磨石
　左）266・右）267
3　石皿　268

上峰町文化財調査報告書第９集

船石遺跡Ⅳ

平成３年３月18日印刷
平成３年３月31日発行

編集
発行　上峰町教育委員会
佐賀県三養基郡上峰町坊所383-１

印刷　(有)昭和堂印刷
佐賀県佐賀市神野西４-１-32